

太田遺跡・太田廃寺跡 1

令和6年（2024年）3月



茨木市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター

太田遺跡・太田廃寺跡 1

令和 6 年（2024 年）3 月



茨木市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター



調査地から太田茶白山古墳を望む（南から）

序 文

私たちの暮らす茨木市では、北部は北摂山系が、南部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安全・安心なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手強い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢の中、開発に伴う埋蔵文化財の調査件数は全国的に激減しているのに対し、本市では微減の傾向をみせているにすぎません。

本書は、令和3年度に太田東芝町で実施した発掘調査の成果報告書です。旧国摂津で最大級の前方後円墳、太田茶白山古墳と指呼の間に位置する今回の調査地では、弥生時代から古墳時代、そして中近世に至るこの地に根ざした人びとの歴史が克明に残っていました。

調査の実施にあたりましては、学校法人追手門学院、施工関係者、調査関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに公益財団法人大阪府文化財センターの諸機関には、ご指導と格別のご協力をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月31日

茨木市教育委員会

教 育 長 岡 田 祐 一

は し が き

大阪府の北部に位置する茨木市は、大阪市へのアクセスのしやすさに比して、居住環境が恵まれていることから、近年とみに住宅地としての人気が高まっています。人の流入が新たな開発を生み、急速に市域の景観が変化しているなか、大規模な発掘調査が続けて行われたことで、新たな知見が得られています。茨木市域に広がる富田丘陵とその縁辺部では、將軍山古墳や安威古墳群、太田茶臼山古墳、阿武山古墳などの特色のある古墳の存在に加え、飛鳥時代の寺院である太田廃寺や古代の官道である山陽道の存在などから、当地が政治的にも重要性の高い場所だったことが推察されていました。近年の発掘調査の進展により、それらの古墳造営や古代寺院の建立に関わったであろう、周辺地域の人びとの生活基盤がどのように構成されていたのかといった、具体的な考察ができるようになってきています。

この太田遺跡では、これまで茨木市教育委員会や大阪府教育庁・公益財団法人大阪府文化財センターが数次にわたる調査を実施しており、弥生時代から古墳時代に至る集落や墳墓を確認していますが、今回の調査成果においても、地域の歴史的考察に資する重要な成果を得ることができたと自負しております。

本書がより多くの市民の皆さまに広く活用され、歴史を語る一助となれば幸いです。

今回の調査において地元関係各位をはじめ、学校法人追手門学院、大林道路株式会社、大阪府教育庁ならびに茨木市教育委員会より多大なるご指導とご協力をいただきました。深く感謝しますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月31日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は（仮称）学校法人追手門学院 総持寺キャンパスⅡ期計画に伴い実施した大阪府茨木市太田東芝町所在の太田遺跡・太田廃寺跡の発掘調査報告書である。調査名称は「太田遺跡・太田廃寺跡 2020-1」とした。
2. 発掘調査は株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、茨木市教育委員会と共同で実施した。遺物整理及び本書の編集は茨木市教育委員会の指導のもと公益財団法人大阪府文化財センターが行い、令和4年12月28日までに全ての資料を茨木市教育委員会に引き渡した。本書編集後の印刷・製本は茨木市が行い、令和6年3月31日に本書の刊行をもって完了した。
3. 契約名称・契約期間は以下のとおりである。
【契約名称】（仮称）学校法人追手門学院 総持寺キャンパスⅡ期計画に伴う
太田遺跡・太田廃寺跡発掘調査
【契約期間】令和3年7月1日～令和4年12月28日
4. 現地調査及び整理作業は以下の体制で実施した。
【茨木市教育委員会】
教育総務部歴史文化財課長 木下典子
課長代理兼調査管理係長 前田聡志、調査管理係 坂田典彦
【公益財団法人大阪府文化財センター】
〔令和3年度〕
事務局長兼専務理事 岡本茂史、事務局次長 市本芳三、調査課長 岡戸哲紀、
調査課長補佐 佐伯博光 副主査 若林幸子（令和3年7月1日から9月30日まで）、
副主査 福佐美智子
〔令和4年度〕
事務局長兼専務理事 岡本茂史、事務局次長 市本芳三、調査課長 佐伯博光、
調査課長補佐 後藤信義、副主査 福佐美智子（令和4年4月1日から11月30日まで）
技師 寶珍貴史（令和4年12月1日から12月28日まで）
5. 遺構の写真撮影は若林と福佐が、遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の諸機関よりご指導・ご協力を賜った。
記して感謝の意を表したい。（敬称略）
学校法人追手門学院、鳥羽正剛（高野山霊宝館）、三好孝一（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）、森岡秀人（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、若林邦彦（同志社大学歴史資料館）
7. 石材の鑑定は、貴治康夫（立命館高校・佛教学教諭）、吉村健（大阪府立茨木高等学校教諭）の協力を得た。
8. 本書の執筆は第1章第1・2節を坂田が、それ以外を福佐が担当した。編集は福佐が行った。
9. 本調査に関わる遺物及び写真・実測図などの記録類は、全て茨木市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構及び断面図の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする表示である。数値は全てメートル単位である。
2. 調査ならびに本書における使用測地系は、世界測地系（測地成果 2011）に基づく平面直角座標系第VI系である。座標数値は全てメートル単位であるが、図中では単位を省略している。
3. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位は全て座標北を示す。なお座標北は真北より西へ約 $0^{\circ}14'$ 、磁北より西へ約 $7^{\circ}18'$ 偏移する。
4. 現地調査及び遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠することを基本とし、適宜、茨木市教育委員会と調整を語りながら進めた。
5. 地層及び土器の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2008年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。
6. 本書に用いる遺構番号は、遺構の種類に関わらず調査において検出した順に1から始まる通し番号を付し、番号の後に遺構種類を表記した。また建物などの複数の遺構集合体であるものについては、遺構種類名称の後に番号を表記した。この番号は通し番号とは異なる遺構毎の番号となる。
7. 遺構図のうち個別遺構の平面図及び断面図の掲載縮尺は四十分の一を基本とし、必要に応じて縮尺を使い分けた。縮尺は各図にスケールを配置して明記している。
8. 遺物実測図の縮尺は、四分の一を基本とし、一部八分の一とした。
9. 遺構図における断面位置は、平面図に「ヒョ」を記し、その位置を明示した。遺物実測図は調整が変化する境を1点破線で、稜線を2点破線で表した。遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、瓦器をアミカケとした。
10. 遺物番号は本文・挿図・図版全てに一致する通し番号である。
11. 出土遺物の記述においては、以下の文献を参考にした。
 - ・森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編II 木耳社
 - ・森岡秀人・西村歩編 2006『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
 - ・宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40 大阪府立近つ飛鳥博物館
 - ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会
 - ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 - ・宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第 49 集 大宰府市教育委員会

目 次

巻頭原色図版

序文・はしがき・例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	(坂田) 1
第2節 既往の調査成果と最近の動向	(坂田) 2
第3節 調査の経過	(福佐) 3
第2章 遺跡の位置と環境	(福佐) 5
第1節 位置と地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査・整理の方法	(福佐) 9
第4章 調査成果	(福佐) 11
第1節 基本層序	11
第2節 第1面検出の遺構と遺物	18
第3節 第2・3面検出の遺構と遺物	20
第4節 第4面検出の遺構と遺物	24
第5章 総括	(福佐) 104
遺物観察表	113
抄録	
奥付	

巻頭原色図版目次

巻頭原色図版 調査地から太田茶白山古墳を望む（南から）

挿図目次

図1	調査地位置	1
図2	今回の調査区と既往調査区位置	2
図3	茨木市域地質	6
図4	太田遺跡周辺遺跡分布	7
図5	地区割	10
図6	基本層序模式	11
図7	1区 北・東壁断面	12
図8	1区 西壁断面	13
図9	2・3区 北壁断面	14
図10	3区 西壁付近断面	15
図11	4区 東壁断面（1）	16
図12	4区 東壁断面（2）	17
図13	第1面 平面	19
図14	第3・4層 出土遺物	20
図15	第2面 平面	21
図16	第5層 出土遺物	22
図17	第6-1層 出土遺物	23
図18	第6-2・3層 出土遺物	23
図19	掘立柱建物1 平・断面	25
図20	316井戸・322溝 平・断面	26
図21	2・7・8・9土坑 平・断面	27
図22	10・11・12・15土坑 平・断面	29
図23	16・17・20・21・22土坑 平・断面	31
図24	15・21土坑 出土遺物	32
図25	50・56・60・61土坑 平・断面及び61土坑 出土遺物	33
図26	64・66・67・68土坑 平・断面及び68土坑 出土遺物	34
図27	70土坑 平・断面・出土遺物	35
図28	71土坑 平・断面・出土遺物	36
図29	73・75・76・78土坑 平・断面及び76土坑 出土遺物	37
図30	81・82・83・84土坑 平・断面及び83土坑 出土遺物	39
図31	85・86土坑 平・断面	40
図32	87土坑 平・断面・出土遺物	41

図33	88・89・92土坑 平・断面	43
図34	93・94・95・96・97土坑 平・断面	44
図35	98・99・103・104土坑 平・断面	45
図36	106・107・112・119・120土坑 平・断面及び112土坑 出土遺物	47
図37	121・122・123・124・128・129土坑 平・断面	49
図38	131・132・133・136・137土坑 平・断面	51
図39	138・139土坑 平・断面及び138土坑 出土遺物	52
図40	141・142・143・145土坑 平・断面	54
図41	146・157・158・162土坑 平・断面	55
図42	164・168土坑 平・断面・出土遺物	57
図43	171・175・178・179土坑 平・断面	59
図44	185・187土坑 平・断面	60
図45	188・190・193土坑 平・断面及び190・193土坑 出土遺物	61
図46	194・195・196・197土坑 平・断面及び196・197土坑 出土遺物	63
図47	198・199・201土坑 平・断面	64
図48	202・204・206・207・211土坑 平・断面	66
図49	212・224・232・235・236土坑 平・断面	68
図50	237・240・241・242土坑 平・断面	69
図51	251・252・269土坑 平・断面及び269土坑 出土遺物	71
図52	270・280・286・297土坑 平・断面	73
図53	298・301・302・303土坑 平・断面	74
図54	304・305土坑 平・断面及び305土坑 出土遺物	75
図55	308・309・310・311・312土坑 平・断面	77
図56	311・312土坑 出土遺物	78
図57	313・314・315・317土坑 平・断面	79
図58	318～320・324・325土坑 平・断面及び320土坑 出土遺物	81
図59	327・328土坑 平・断面	82
図60	52・54・79・110・117・181ピット 平・断面	83
図61	209・267・272・273・284・285・323ピット 平・断面	84
図62	267・272・273ピット 出土遺物	85
図63	57・59溝 平・断面	86
図64	90溝 平面及び遺物出土状況	88
図65	90溝 断面	89
図66	90溝出土遺物(1)	89
図67	90溝出土遺物(2)	90
図68	186・225溝 平・断面	91
図69	228溝 平・断面	92
図70	279溝 平・断面	93
図71	287・299・307溝 平・断面	94
図72	283礫集中 最上段平面	96
図73	283礫集中 A・B断面	97

図 74	283 礫集中 C・D断面	98
図 75	283 礫集中 断面オルソ	99・100
図 76	283 礫集中 出土遺物	102
図 77	283 礫集中周辺2層 出土遺物	103
図 78	今回の調査と周辺既往調査成果 弥生時代後期から古墳時代前期	105
図 79	弥生時代後期から古墳時代前期の地形模式	106
図 80	太田遺跡・太田廃寺跡出土外来系土器	106
図 81	今回の調査と周辺既往調査成果 古墳時代中期	108
図 82	今回の調査と周辺既往調査成果 古墳時代末から古代	109
図 83	日野観音寺遺跡で検出された石敷遺構	110
図 84	古代の太田遺跡・太田廃寺跡及び周辺遺跡状況	111

表 目 次

表 1	現地調査期間一覧	4
表 2	283 礫集中 礫計測表	101

写 真 目 次

写真 1	機械掘削	3
写真 2	遺構検出	3
写真 3	現地公開 (1)	3
写真 4	現地公開 (2)	3

写 真 図 版 目 次

写真図版 1

1. 調査地遠景 (南から)
2. 調査前状況 (南から)

写真図版 2

1. 1区 北壁断面 (南西から)
2. 1区 東壁断面 (北西から)
3. 1区 西壁断面 (東から)
4. 1区追加調査2・3 西壁断面 (東から)

写真図版 3

1. 3区 北壁断面 (南西から)
2. 3区 南壁断面 (北から)
3. 4区 東壁北半断面 (北西から)
4. 4区 東壁南半断面 (北西から)
5. 1区 地震による変形状況 (南東から)

写真図版 4

1. 3区南半 第1面 全景 (北東より)
2. 3区南半 第1面 第3層 (整地層) 検出状況 (東から)

写真図版 5

1. 1区 第4面 全景 (南から)
2. 1区 第4面 全景 (北から)

写真図版 6

1. 1区追加調査1 第4面 全景 (南東から)
2. 1区追加調査2・3 第4面 全景 (南から)
3. 1区追加調査4 第4面 全景 (北から)

写真図版 7

1. 2区 第4面 全景 (北から)

2. 2区 第4面 全景 (東から)

写真図版8

1. 3区 第4面 全景 (南から)
2. 3区北半 第4面 全景 (東から)

写真図版9

1. 4区 第4面 全景 (北から)
2. 4区中央部 第4面 全景 (北から)

写真図版10

1. 掘立柱建物1 全景 (南から)
2. 掘立柱建物1 38柱穴 断面 (西から)
3. 掘立柱建物1 39柱穴 断面 (西から)
4. 掘立柱建物1 42柱穴 断面 (東から)
5. 掘立柱建物1 44柱穴 断面 (東から)

写真図版11

1. 316井戸・322溝 全景 (東から)
2. 316井戸 上半断面 (南から)
3. 316井戸 下半断面 (南から)
4. 322溝 断面 (西から)
5. 329木杭 断面 (南から)
6. 330木杭 断面 (南から)
7. 2土坑 断面 (南から)
8. 9土坑 断面 (南西から)

写真図版12

1. 15土坑 断面 (西から)
2. 15土坑 遺物出土状況 (東から)
3. 20土坑 断面 (南から)
4. 61土坑 断面 (南から)
5. 64土坑 断面 (南から)
6. 64土坑 完掘状況 (南から)
7. 66土坑 断面 (南から)
8. 68土坑 断面 (西から)

写真図版13

1. 70土坑 断面 (西から)
2. 71土坑 遺物出土状況 (西から)
3. 75土坑 断面 (南から)
4. 85土坑 断面 (東から)
5. 87土坑 断面 (西から)
6. 104土坑 遺物出土状況 (南から)
7. 119土坑 断面 (北西から)
8. 137土坑 断面 (西から)

写真図版14

1. 138・206土坑 断面 (北西から)
2. 139・269土坑 断面 (北西から)
3. 157土坑 断面 (南から)
4. 164土坑 断面 (西から)
5. 190土坑 断面 (西から)
6. 190土坑 遺物出土状況 (南西から)
7. 198・199土坑 断面 (北西から)
8. 201土坑 断面 (西から)

写真図版15

1. 240土坑 断面 (南西から)
2. 241土坑 断面 (西から)
3. 242土坑 断面 (北西から)
4. 280土坑 断面 (北から)
5. 298土坑 断面 (南東から)
6. 301土坑 断面 (南から)
7. 304土坑 断面 (南から)
8. 305土坑 断面 (北から)

写真図版16

1. 311土坑 断面 (南から)
2. 312土坑 断面 (南から)
3. 312土坑 遺物出土状況 (南から)
4. 314土坑 断面 (南東から)
5. 315土坑 断面 (南から)
6. 317土坑 断面 (南から)
7. 325土坑 断面 (北から)
8. 328土坑 断面 (西から)

写真図版17

1. 90溝 (2区) 全景 (南西から)
2. 90溝 (3区) 全景 (北東から)
3. 90溝 断面 (北東から)

写真図版18

1. 283礫集中 最上部 全景 (南西から)
2. 283礫集中 最上部南半 検出状況 (南西から)

写真図版19

1. 283礫集中 最下部 全景 (南から)
2. 283礫集中 最下部南半 検出状況 (南西から)

写真図版20

1. 283礫集中 Aライン 断面 (南東から)

2. 283 礫集中 (南東から)	Bライン上層 断面	4. 283 礫集中 検出状況(南から)	Dライン周辺最下部
3. 283 礫集中	Bライン下層 断面(南から)	写真図版 22	
4. 283 礫集中 (南から)	Bライン下層中央 断面	出土遺物	
写真図版 21		写真図版 23	
		出土遺物	
1. 283 礫集中 (南東から)	Dライン上層 断面	写真図版 24	
		出土遺物	
2. 283 礫集中	Dライン下層 断面(南から)	写真図版 25	
3. 283 礫集中 (南から)	Dライン下層西半 断面	出土遺物	

付 図 目 次

付図1 第4面 平面

付図2 283 礫集中 最上段平面

付図3 283 礫集中 最下段平面

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大阪府茨木市東芝町400番6号において(図1)、令和2年10月に埋蔵文化財発掘調査の届出が事業主である学校法人追手門学院より提出された(茨教歴第1220号、令和2年10月8日付け)。本市教育委員会は受理した届出を基に計画建物の範囲を対象に、令和2年11月16日～12月11日の期間で確認調査を実施した。その結果、本書で報告した範囲に埋蔵文化財が認められたため、本発掘調査の計画及び工程表の作成に着手した。

事前協議及び調整会議を重ねる中、本件の調査規模はもとより本市における当時の調査体制では発掘調査の実施が困難と判断し、大阪府教育委員会教育長に調査の協力を依頼した(茨教歴第1678-1号、令和2年12月24日付け)。結果、公益財団法人大阪府文化財センターが協力する旨、回答を得た(教文第2936号、令和3年1月13日付け)。

そこで、当該調査の実施に関して、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査をはかることを目的とした協定書の作成に着手した。協定書は、茨木市教育委員会(以下、茨木市教委と略す)、学校法人追手門学院、大林道路株式会社、株式会社島田組、公益財団法人大阪府文化財センター(以下、センターと略す)の五者で締結した(令和3年5月18日付け)。以上の経緯を踏まえ、令和3年7月から本発掘調査を開始した。



図1 調査地位置

第2節 既往の調査成果と最近の動向

今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である太田遺跡、太田廃寺跡に位置し、指呼の間にある太田茶臼山古墳(継体天皇三島藍野陵)との間に太田北遺跡、そして西国街道が東西に走行する(図4)。付近では先の大戦から1970年代にかけて宅地化が進み、さらに町名に含まれる東芝はその名のとおりの企業名に由来し、当該地の履歴と面影を残している。

本節では既刊報告書との重複を避けるため、追手門学院 総持寺キャンパスI期調査と、東芝家電製造株式会社大阪工場(以下、東芝大阪工場と略す)時代の確認調査(試掘・立会調査を含む)及び本発掘調査については『太田遺跡発掘調査概報』(茨木市教委 2015)、『太田遺跡・太田廃寺跡 太田遺跡・太田城跡1』(茨木市教委・センター 2020)、『太田遺跡 太田遺跡・太田城跡1』(茨木市教委・センター 2021)に委ね、確認調査と周辺の既往調査を中心に記述する(図2)。

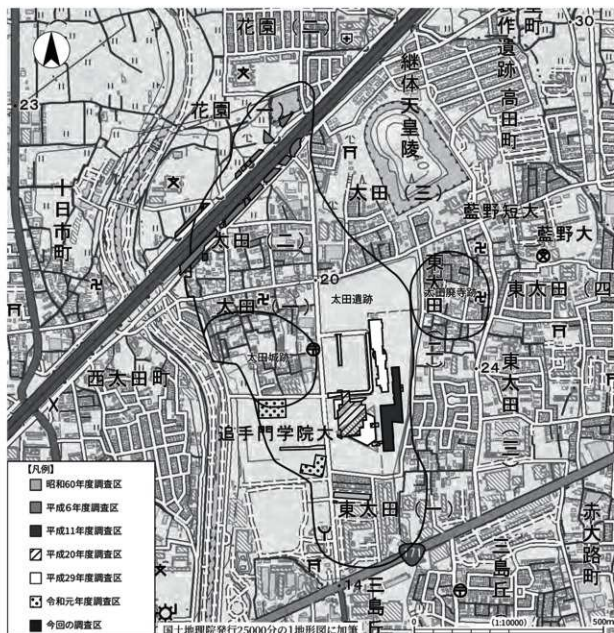


図2 今回の調査区と既往調査区位置

確認調査は追手門学院 総持寺キャンパスⅡ期調査として、建物計画範囲に9箇所のトレンチを設定した。東側(1区・2区)は造成による台地縁辺部の削平ラインを明確にするため、24～35mのトレンチを3本設定し、西側(3区・4区)は学生の安全を考慮しながら2m四方のトレンチを6箇所設定した(図5)。結果、本書で報告する範囲において本発掘調査が必要な埋蔵文化財が認められた。

一方、本書で報告するような大規模開発地を除く太田遺跡、太田廃寺跡、太田城跡における近年の動向としては、本節冒頭に記したように初期の宅地化からおよそ50年が経過し、個人住宅の建て替えや中小規模の共同住宅の新築に伴う届出が散見されるが、本発掘調査に至ったものは極めて少ない。とくに今回報告する太田東芝町の東側、すなわち南西に向かって張り出してきた富田台地の崖状地形の上端にあたる太田廃寺跡では戸建て住宅の調査が数件実施されているが明瞭な遺構は確認されていない。要因としては遺構面までの深度が50cm程度と浅く、宅地化が進むなかですでに削平されたことが推察される。工事立会などで局所的に包含層の遺存が看取されるが、その層序はおおむね盛土直下で観察されることなども、上記要因の証左となろう。

第3節 調査の経過

現地調査は令和3年7月12日から令和4年3月4日まで実施した。調査区は、残土置き場を確保する必要などから4区に分け、3区、4区、1区、2区の順で行った。また、調査開始後に計画建物の基礎掘削工法に変更が生じたため、追加調査として当初計画範囲を拡張した箇所がある。結果、総調査



写真1 機械掘削



写真2 遺構検出



写真3 現地公開(1)



写真4 現地公開(2)

表1 現地調査期間一覧

調査区	機械掘削	人力掘削	空中写真撮影・ 全景斜め写真撮影	埋戻し
1区	令和3年9月9日～ 10月21日	令和3年10月4日～ 令和4年1月18日	令和3年11月18日・ 令和3年12月15日・ 令和4年1月12日	令和4年1月24日～ 3月4日
1区追加調査	令和4年1月12日～ 1月31日	令和4年1月13日～ 2月7日	令和4年1月14日・ 令和4年1月18日・ 令和4年2月7日	
2区	令和3年11月1日～ 11月12日 令和4年1月17日～ 1月20日	令和4年1月18日～ 2月14日	令和4年2月8日	令和4年2月15日～ 3月4日
3区	令和3年7月12日～ 8月2日	令和3年7月15日～ 9月16日	令和3年8月31日	令和3年9月16日～ 9月24日
4区	令和3年8月24日～ 9月7日	令和3年9月1日～ 9月30日	令和3年9月28日	令和3年10月1日～ 10月25日

面積は6,475㎡となった。

調査は、令和3年7月12日より盛土及び近現代から近世の作土層をバックホウによって除去し、それ以下から人力により地層の掘削及び遺構検出を行った(写真1・2)。各遺構面から検出された遺構は、遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。合わせて写真による記録を行った。出土遺物は現地にて順次洗浄作業、注記作業を行った後に台帳を作成した。各調査区の機械・人力掘削期間、空中写真撮影や全景斜め写真撮影日は一覧表のとおりである(表1)。

同年12月3日には新型コロナウイルス感染症の対策を十分にとりながら追手門学院中・高等学校の生徒を対象とした現地見学会を開催した。参加者は34名である。1区の調査状況を見学し、地層や発掘調査方法について説明を行った。次に本調査ならびに隣接する既往調査で出土した遺物を見学した。とくに遺物については説明を聞き、見るだけでなく実際の須恵器や円筒埴輪などの遺物に触れられるようにしたところ、生徒をはじめ参加者は円筒埴輪を持った写真を撮影し合い、大変好評であった(写真3・4)。

現地調査終了後、令和4年4月1日から整理作業を開始した。整理作業は、遺物の接合・復元を行い、その後に実測可能な遺物を全て抽出し遺物実測を行った。実測遺物のなかから写真図版に掲載する遺物を選別し、写真撮影を行った。現地調査で撮影した写真は台帳を作成した。遺構図は図面整理作業を行った。その後遺構・遺物挿図、写真図版を作成し、原稿執筆作業を行い、これらを本報告書に掲載した。令和4年12月28日に作業を終了し、令和6年3月に報告書の印刷・製本を行った。

【引用・参考文献】

茨木市教育委員会 1986 『太田遺跡発掘調査概要』

茨木市教育委員会 2015 『太田遺跡発掘調査概報』 茨木市文化財資料集第61集

茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2020 『太田遺跡・太田廃寺跡 太田遺跡・太田城跡1』

茨木市文化財資料集第73集・公益財団法人大阪府文化財センター第302集

茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2021 『太田遺跡 太田遺跡・太田城跡1』 茨木市文化財資料集第78集・公益財団法人大阪府文化財センター第308集

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

茨木市は大阪府の北東部に位置し、南北17km、東西10kmと南北に長く東西に短い市域である。北は京都府亀岡市、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町に接する(図1)。

市域の地形は、およそ北東-南西方向に走る有馬高槻構造線で南北で大きく二分される(図3)。北半部は標高300m前後の摂丹山地と茨木丘陵部からなり、これらの山地から安威川・佐保川・茨木川・勝尾寺川が南流する。基盤地質は中軸部に茨木花崗岩体・能勢岩体が、その側方に超丹波帯高槻層の砂岩・頁岩・砂岩頁岩層や田能コンプレックスの頁岩で構成される。南半部は西に標高50~100m前後の洪積層からなる千里丘陵が南北に広がり、東端に高槻市から標高10~30mの富田台地の裾が延びる。これらの丘陵・台地間には南流する河川や淀川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がる。

太田遺跡・太田廃寺跡は市域中央東端の安威川左岸に位置し、後背湿地及び河岸段丘から富田台地の低位段丘面裾に立地する。現行の町名では花園町一丁目、太田一・二丁目、東太田一・二・三丁目、太田東芝町にあたり、南北1.3km、東西0.8kmの範囲に広がる。

今回の調査地はJR総持寺駅から北に1.2kmの茨木市道東太田一丁目花園二丁目線東側に位置する。かつては東芝大阪工場があり、現在は追手門学院大学総持寺キャンパスと追手門学院中・高等学校校舎が建てられ使用されている。遺跡の中央東端の富田台地裾部の低位段丘面下の後背湿地に位置し、宮地他2005地質図幅京都市西部によると後背湿地堆積物の礫・砂・シルト及び砂が分布する地域にあたる。標高は現況で20~21mである。

第2節 歴史的環境

旧石器時代は調査地である太田遺跡や太田茶白山古墳周辺・郡遺跡・中条小学校遺跡において、表面採集や後世の包含層からナイフ形石器が出土している(図4)。

縄文時代は草創期から後期まで他時代の遺跡数と比べると希薄で、晩期に沖積平野に立地する遺跡が多くなる傾向が認められる。太田遺跡の南に位置する総持寺遺跡では晩期中葉の突帯土器がまとまって出土している。さらに安威川を挟んで南側の牟礼遺跡では自然流路から晩期後葉の土器が出土している。安威川と茨木川に挟まれた低位段丘上の耳原遺跡では晩期の土坑や甕棺からなる墓域が検出され、現在のところ、市内最古の集落と考えられている。

弥生時代には山地部から平野部全域に遺跡が分布し、とくに市域南半の平野部に大規模な集落が存在する。牟礼遺跡・耳原遺跡は縄文時代晩期から引き続き弥生時代前期にかけて継続する。前期から始まる東奈良遺跡は畿内における主要な拠点集落のひとつと考えられており、幾重もの環濠で囲まれた集落や前期末の方形周溝墓が検出されている。集落内からは銅鐸・銅戈の鋳型が出土し、鋳造工房施設があったと推定されている。

弥生時代中期になると遺跡数は増加し、総持寺遺跡・郡遺跡のような低位段丘縁辺部に居住域が広がる。近年の郡遺跡・倍賀遺跡での調査では環濠に囲まれた集落と160基以上の方形周溝墓からなる

墓域が検出され、当時の集落景観が復元できる貴重な成果となった。

弥生時代後期にはさらに低位段丘縁辺部で集落が増加し、太田遺跡でも居住域が確認されている。総持寺遺跡では後期後半の土器棺墓や方形周溝墓などの墓域が検出されている。

古墳時代は多くの古墳が築かれ、高槻市域の古墳とともに三島古墳群として知られている。前期中葉に福井や安威の丘陵部に紫金山古墳や將軍山古墳が造営され、中期には富田台地上に太田茶白山古墳が築かれる。太田茶白山古墳は、全長約 226 m の三島地域最大の前方後円墳である。この太田茶白山古墳から南方約 500 m に位置する太田遺跡からは円墳 6 基と方墳 7 基が混在する群集墳、さらに南の総持寺遺跡では 1 基の円墳を除き 42 基の方墳で構成される群集墳が検出されている。後期には安威川・佐保川・勝尾寺川流域の山麓部に將軍山古墳群・安威古墳群などが築かれる。

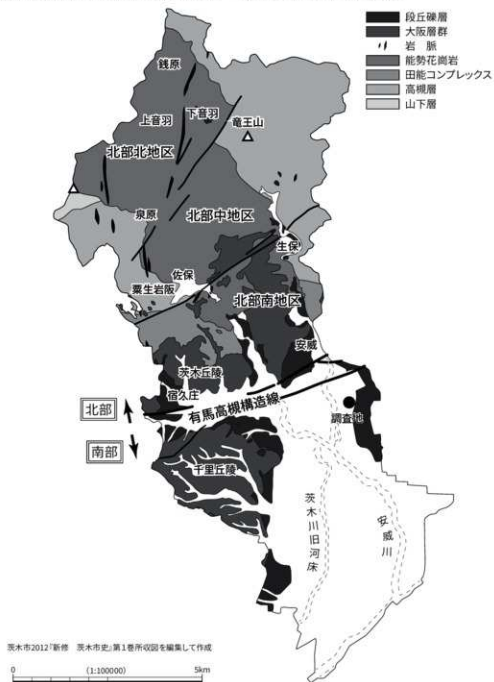


図3 茨木市域地質

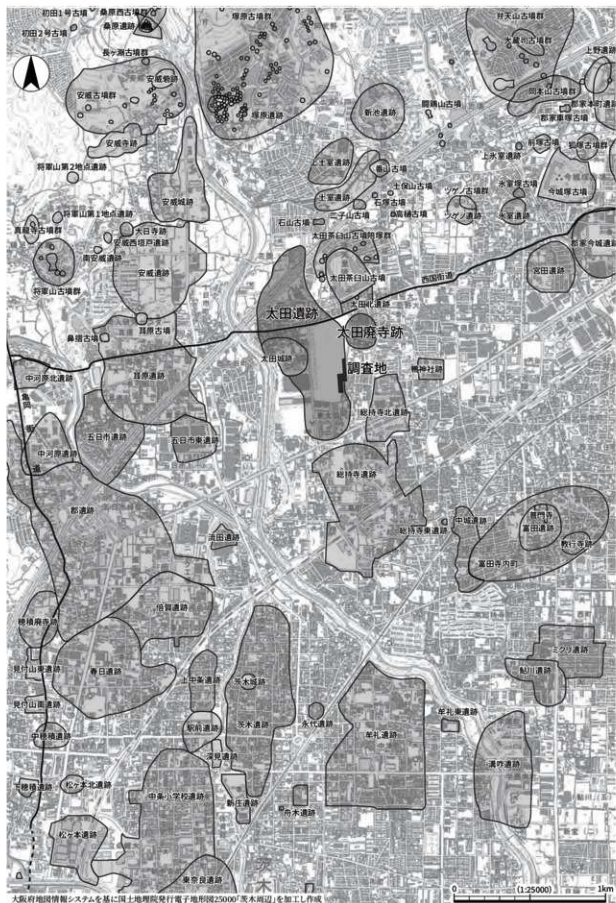


図4 太田遺跡周辺遺跡分布

集落は弥生時代から引き続き太田遺跡・総持寺遺跡・郡遺跡・安威遺跡などで営まれる。溝昨遺跡では古墳時代をとおして居住域と水田域が見られ、関東・東海・北陸・瀬戸内などからの外来系土器も多く出土している。中期から後期にかけては太田遺跡から安威川を挟む対岸の安威遺跡で大規模な集落が形成される。朝鮮半島系の遺物が多く出土し、鍛冶炉や鉄滓が検出されており鍛冶工房が存在したと考えられている。

古代は嶋下郡と呼ばれ、郡の下には新野・宿久・安威・穂積の四郷が置かれる。郡衙は西国街道沿いの郡付近にあったと推定されている。文献には太田とその周辺に造酒司領太田保という荘園があったことが記されている。この造酒司とは仏神事の供物や宮中で使われる酒・酢を用意する役所名で、役所の所有する荘園があったことがわかる。

飛鳥時代から奈良時代にかけては太田廃寺跡・穂積廃寺跡・三宅廃寺などの寺院が建立された。太田廃寺跡は調査地から東方約100mの台地上に所在した寺院で、明治40(1907)年に舍利容器一具を納めた花崗岩製塔心礎が発見された。その後発掘調査で明瞭な遺構は確認されておらず、実態は不明であるが、周辺の宅地開発の際に多くの瓦が採集されている。創建時の軒丸瓦には単弁八弁蓮華文軒丸瓦や単弁十二弁蓮華文軒丸瓦があり、後者は東大阪市河内寺廃寺跡出土例と同范である。瓦から創建は7世紀後葉から8世紀前葉、奈良時代をとおして存続していたと考えられている。

そして太田廃寺跡の北方250mを東西方向に古代山陽道の後身にあたとされている西国街道が通る。中河原北遺跡では幅約7mの道路基礎と考えられる石敷遺構が検出されている。西国街道沿いには少なくとも12世紀始めには太田に宿が成立し、中世には有馬温泉への湯治にも利用された宿場町であった。集落遺跡は東奈良遺跡や中条小学校遺跡などで前代から継続して展開する。中でも総持寺北遺跡と総持寺遺跡では6世紀から10世紀にかけての掘立柱建物を主体とする大規模な集落が確認され、台地上での集落の広がりが明らかになっている。

中世には当遺跡の西に12世紀後半に太田太郎頼基が居城していたとされる太田城があったとされるが、記録がなく詳細は不明である。集落は古代から引き続き総持寺遺跡や郡遺跡で溝や柵列によって区画された掘立柱建物・井戸の屋敷地が検出されている。

【引用・参考文献】

茨木市史編さん委員会 2012『新修茨木市史』第1巻 通史

茨木市史編さん委員会 2012『新修茨木市史』第7巻 史料編 考古

宮地良典他 2005 5万分の1地質図幅「京都西南部」産業技術総合研究所地質調査総合センター

第3章 調査・整理の方法

発掘は、財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』（以下、「マニュアル」とする）に準拠し、機械掘削、人力掘削の順で実施した。機械掘削は0.8 m級のバックホウを使用し、現代の盛土や近世以降の耕作土層などを掘削対象とした。遺物包含層の掘削や遺構検出、遺構埋土の掘削は人力で行った。人力掘削の過程においては遺構面の測量、調査区・遺構断面などの実測、遺構面や遺構などの写真撮影を随時行った。調査中は随時、茨木市教委歴史文化財課に指示を仰ぎ、調査完了時には立会を受けた。

測量はトータルステーションを用いたデジタル測量を主とし、一部デジタルカメラで撮影した写真を基にSFMを用いて3Dモデルを作成し、平面直角座標系VI系に基づいた座標値と縮尺を付与したオルソ画像に変換し、適宜トレースを行った。

写真は主にニコン社製のデジタル一眼レフカメラ D5300 を使用し、全景写真は6×7白黒・リバーサルフィルムも使用した。デジタルカメラにおける写真データの保存形式はRAWとJPEGの二種類とした。撮影にあたっては、当センター所定のラベルに調査名・撮影内容（地区割）・撮影方向・撮影日時・撮影者を記載し、写し込みを行った。

出土遺物に対しては遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号を記したセンター所定のマイラーベースのラベルを添付し、遺構、包含層ごとに適宜取り上げた。

測量や遺物の取り上げの基本となる地区割は、世界測地系に準拠する平面直角座標系第VI系を基準とし、大阪府全域を共通の方式で位置を示すことができるように大小4段階の区画を設定した（図5）。第I区画は大阪府南西端 $X = -192,000$ 、 $Y = -88,000$ を基準とし、縦6 km、横8 km ほどの基準線で区画し、縦軸をA～O、横軸を0～8で表示したものである。第II区画は第I区画を縦1.5 km、横2.0 km でそれぞれ区分し、計16区画を設定し、南西端を1、南東端を4として北東端を16とする。第III区画は第II区画を100 m 単位で縦15、横20に区画したもので、北東端を起点に縦軸がA～O、横軸が1～20となる。第IV区画は第III区画を10 m 単位で縦、横各10区画したもので、縦軸がa～j、横軸が1～10となる。本調査においては第IV区画を最小区画とした。

出土遺物は調査現場において洗浄し、乾燥後に注記を行った。注記は「オオダ・オオダハイジール2020-1 No. 登録番号」とした。洗浄・注記が終了した遺物は、登録番号ごとに袋に詰め、コンテナへ収納した。実測・撮影対象遺物は必要に応じて接合・復元した。遺物実測図は、スキャナ及びアドビ社のPhotoshopCCを用いてデジタルデータ化し、IllustratorCCを用いて実測図面の浄書を行った。調査現場において作成した図面もIllustratorCCを用いて編集した。

調査現場で撮影した写真のうち、6×7白黒・リバーサルフィルムは現像後、報告書の写真図版に掲載するものはデジタルデータ化した。写真のデジタルデータ化・遺物撮影は、当センター中部調査事務所写真室にて行った。

出土遺物や実測遺物は、Excelを用いてそれぞれに台帳を作成した。調査現場で撮影したフィルムは所定のアルバム類に収納するとともに、写真台帳を作成した。写真台帳には調査現場においてデジタルカメラで撮影した画像に加え、写し込みラベルの情報、前述した各フィルムの収納情報を記入した。

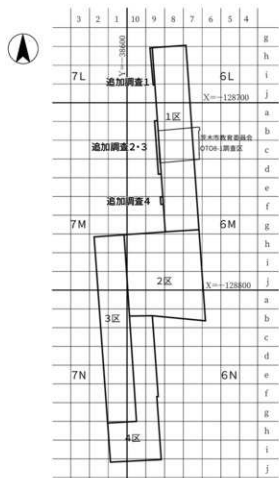
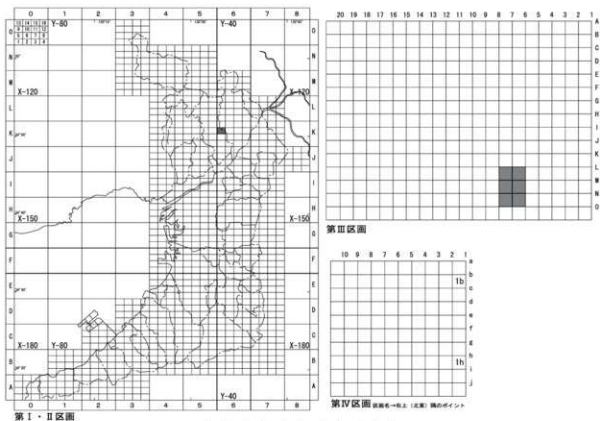


図5 地区割

第4章 調査成果

第1節 基本層序(図6～12、図版2・3)

調査地の現況は、昭和30年代の東芝大阪工場建設に伴う盛土や工場解体後の造成により、北から南へと低く、標高は北端がT.P.+21.2m、南端はT.P.+19.6mである。攪乱や削平された箇所も多くあり、2区東端や4区南側は基盤層まで削られていた。工場が建設される以前の旧表土が残存する箇所では、現地盤と比べ1.0～1.4m低く、T.P.+19.0～19.8mを測る。北から南へと下り、さらに東の富田台地の段丘崖から西方向に下る地形に沿って水田が営まれていた。

第1層 東芝大阪工場建設以前の近・現代の作土層である。

2層に細分され、第1-1層は黄灰～オリーブ黒色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。層厚は0.1～0.4m。

第1-2層はオリーブ褐～オリーブ色極粗砂混じりシルト質砂で第1-1層より砂を多く含む。層厚は0.02～0.05mと薄い。

第2層 近世の作土・整地層である。3層に細分され、第2-1・3層は作土層、第2-2層は整地層である。

第2-1層は調査区全体に広がり、黄褐～灰色粗砂混じりシルト質砂で3区南側では極粗砂を含む。

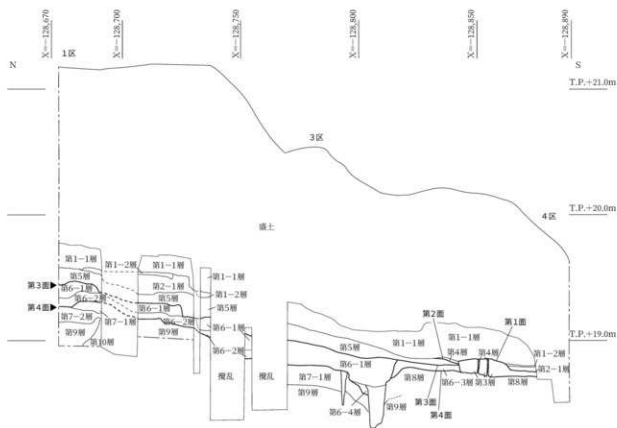
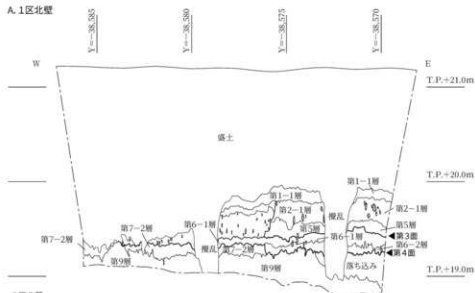


図6 基本層序模式

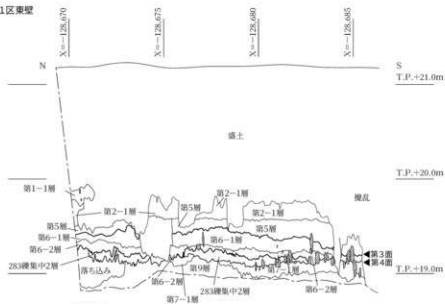
A. 1区北壁



1区北壁

- 第1-1層 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂混シルト質砂
- 第2-1層 5Y4/3 暗オリーブ 粗砂混シルト質砂
- 第5層 2.5Y4/3 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混砂質シルト 極粗砂多量を含む
- 第6-1層 10YR3/2 黒褐 粗砂～極粗砂混砂質シルト
- 第6-2層 2.5Y2/1 黒 粗砂混砂質シルト 10Y5/2 灰 シルトブロック (2～3mm) 含む
- 第7-2層 10YR4/2 灰黄褐 シルト質砂
- 第9層 5Y6/2 灰オリーブ シルト質粘土
- 落ち込み 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト

B. 1区東壁



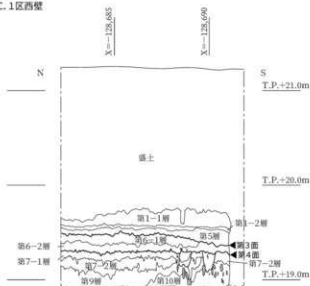
1区東壁

- 第2-1層 5Y4/3 暗オリーブ 粗砂混シルト質砂
- 第5層 5Y4/2 灰オリーブ 粗砂～極粗砂混砂質シルト 極粗砂多量を含む 炭化物粒含む
- 第6-1層 10YR3/2 黒褐 粗砂～極粗砂混砂質シルト 10Y5/2 オリーブ灰 シルトブロック (3～5mm) 含む
- 第6-2層 2.5Y2/1 黒 粗砂混砂質シルト 10Y5/2 灰 シルトブロック (2～3mm) 含む
- 第7-1層 2.5Y3/2 黒褐 シルト質粘土
- 第9層 7.5YR4/1 紅灰 シルト質粘土
- 283練集中2層 10YR2/1 黒 シルト質粘土
- 落ち込み 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト



図7 1区 北・東壁断面

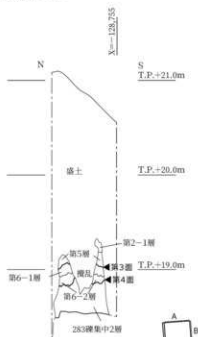
C. 1区西壁



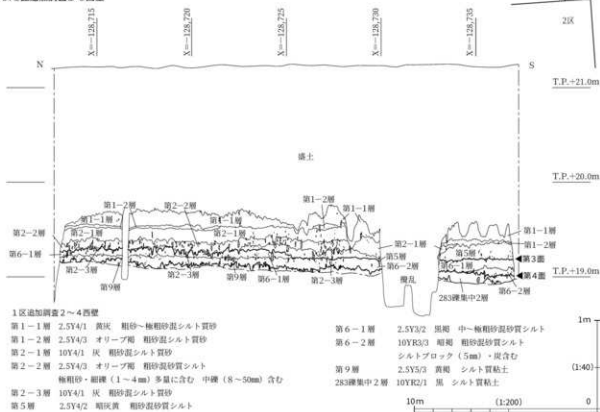
1区西壁

- 第1-1層 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～極粗砂混シルト質砂
 第1-2層 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混シルト質砂
 第5層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混砂質シルト
 第6-1層 2.5Y3/2 黒褐 中砂～極粗砂混砂質シルト
 第6-2層 10YR3/3 暗褐 粗砂混砂質シルト シルトブロック(5mm)・炭含む
 第7-1層 2.5Y3/2 黒褐 シルト質粘土
 第7-2層 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
 第9層 2.5Y5/2 黄褐 シルト質粘土
 第10層 2.5Y5/2 暗灰黄 中～大礫(50～150mm) 混シルト

E. 1区追加調査4西壁



D. 1区追加調査2・4西壁

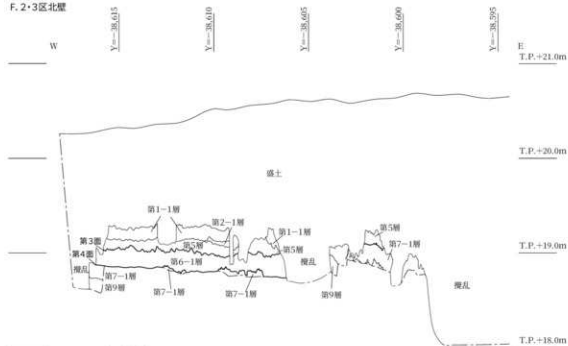


1区追加調査2～4西壁

- 第1-1層 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～極粗砂混シルト質砂
 第1-2層 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混シルト質砂
 第2-1層 10Y4/1 灰 粗砂混シルト質砂
 第2-2層 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混砂質シルト
 極粗砂・細礫(1～4mm)多量を含む 中礫(8～50mm)含む
 第2-3層 10Y4/1 灰 粗砂混シルト質砂
 第5層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混砂質シルト
 第6-1層 2.5Y3/2 黒褐 中～極粗砂混砂質シルト
 第6-2層 10YR3/3 暗褐 粗砂混砂質シルト
 シルトブロック(5mm)・炭含む
 第9層 2.5Y5/2 黄褐 シルト質粘土
 283礫集中2層 10YR2/1 黒 シルト質粘土
 第6-2層

図8 1区 西壁断面

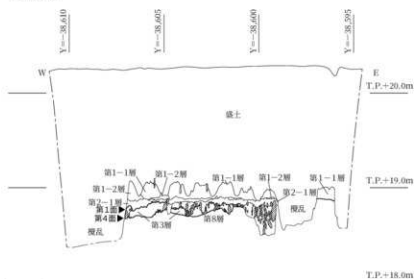
F. 2・3区北壁



2・3区北壁

- 第1-1層 5Y4/3 暗オリーブ 粗砂混シルト質砂
- 第2-1層 2.5Y5/4 黄褐 粗砂混シルト質砂
- 第5層 2.5Y3/3 暗オリーブ相 粗砂～極粗砂質シルト 中礫(5mm)含む
- 第6-1層 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
- 第7-1層 2.5Y4/2 暗灰青 シルト質粘土 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック(10~15mm)含む
- 第9層 2.5Y6/3 によい黄 粘土質シルト

G. 3区南壁



3区南壁断面

- 第1-1層 5Y4/2 灰オリーブ 極粗砂混シルト質砂 灰オリーブ砂質シルトブロック(20mm)含む
- 第1-2層 5Y5/4 オリーブ 極粗砂混シルト質砂
- 第2-1層 5Y4/4 暗オリーブ 粗砂～極粗砂質シルト
- 第3層 5Y4/4 暗オリーブ 砂質シルト 粗砂～極粗砂・大礫(20~100mm)多く含む オリーブ色粒(1~2mm)含む
- 第8層 5Y5/3 灰オリーブ 砂質シルト 中礫(5~10mm)多量に含む 大礫(50~100mm)少量含む

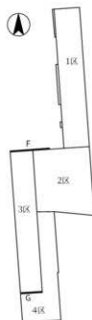


図9 2・3区 北壁断面

層厚は0.1～0.2mである。層中から肥前染付碗・猪口、搦鉢、棧瓦が出土した。

第2-2・3層は1区中央西側の一部のみで検出した。第2-2層はオリブ褐色粗砂混じり砂質シルトである。極粗砂から中礫を含み、とくに極粗砂から細礫の割合が高い。層厚は0.08～0.1mである。第2-3層は灰色粗砂混じりシルト質砂で第2-1層に酷似する。層厚は0.01～0.03mと薄い。

第3層 3区南側に堆積した中世の整地層である。オリブ褐～暗オリブ色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。直径2～10cmの大礫が非常に多く含まれた。層厚は0.1～0.15mである。層中から瓦器・須恵器・土師器・弥生土器が出土した。

この層の上面を第1面として調査した。

第4層 3区南側に堆積した中世の作土層である。黄褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は0.06mである。この層を掘削除去した面を第2面として調査した。

第5層 中世の作土層である。暗灰黄～黒褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで極粗砂が多く混じる。層厚は0.06～0.25mである。層中から瓦器・須恵器・土師器・平瓦が出土した。この層を掘削除去した面を第3面として調査した。

第6層 4層に細分された。第6-1層は中世の作土層で黒褐～黒色中砂から極粗砂混じり砂質シルト

H. 3区西壁付近

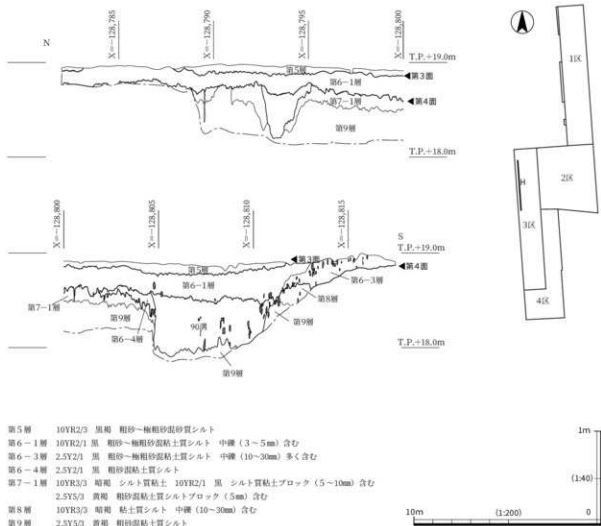


図10 3区 西壁付近断面

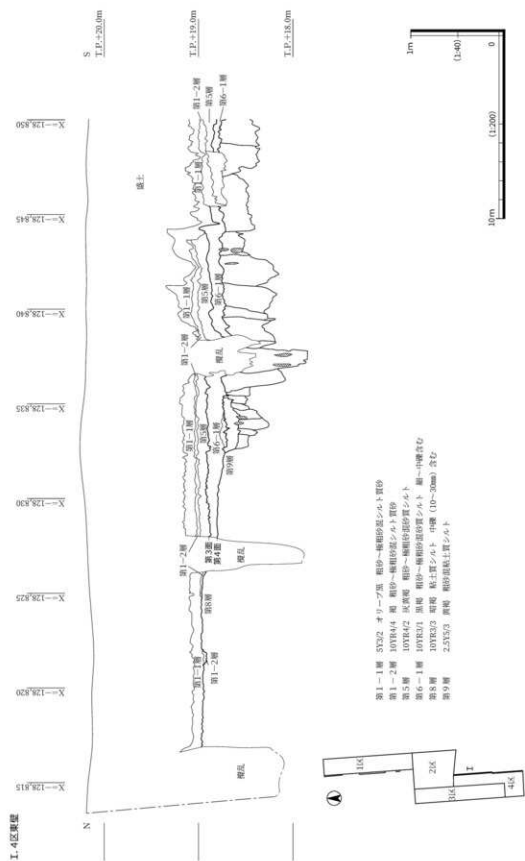


図 11 4区 東壁断面 (1)

I.4区東壁

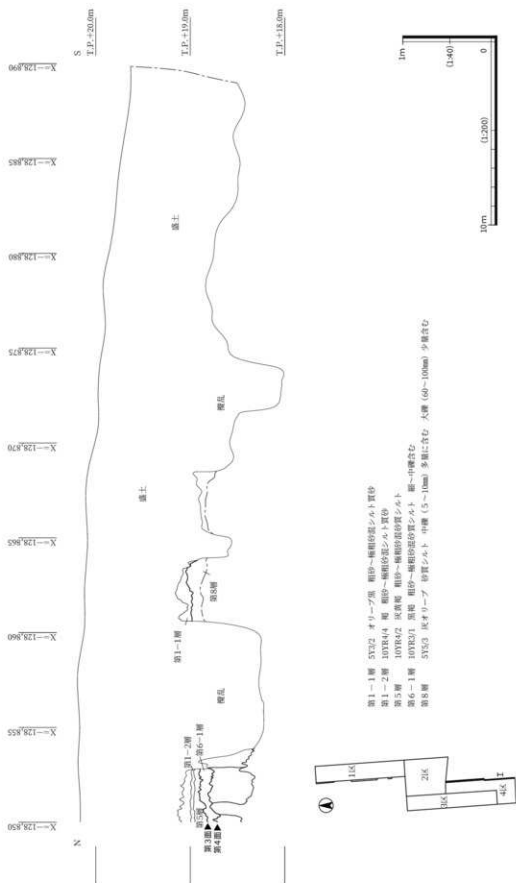


図 12 4区 東壁断面 (2)

である。3区北側ではシルトが強く粘土質シルトである。粗砂から極粗砂は第5層より少ない。層厚は0.07～0.3mである。層中からは瓦器・黒色土器・須恵器・土師器・弥生土器・平瓦などが出土した。

第6～2層は古代に該当する整地土と考えられる層で1区の283礫集中周辺に堆積する。暗褐～黒色粗砂混じり砂質シルトである。シルトブロックを含み、1区南側では細礫や中礫を含む。層厚は0.05～0.18mである。層中からは黒色土器・須恵器・土師器杯・弥生土器・平瓦が出土した。

第6～3層は3区南側の微高地に堆積した土壌層の黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。中礫を多く含む。層厚は0.05～0.25mである。層中から須恵器・土師器が出土した。

第6～4層は3区中央部の90溝から北側の低地にあたる箇所へ堆積した土壌層である。黒色粗砂混じり粘土質シルトで層厚0.07～0.13mである。

この第6層を掘削除去した面を第4面として調査した。

第7層 弥生時代以前の土壌層で2層に細分された。第7-1層は1区北側や3区北側に堆積する。暗灰黄～黒褐色シルト質粘土で3区北側では黒色シルト質粘土ブロックや黄褐色粗砂混じり粘土質シルトブロックを含む。層厚は0.1～0.5mである。

第7-2層は暗灰黄色シルトで若干土壌化が見られる。層厚は0.1～0.15mである。

第8層 1区南東端から2区東端や、3区南側から4区南端にかけて堆積する。0.5～3cmの中礫が混じる灰オリーブ色砂質シルトの基盤層である。3区の中央部の微高地から低地へと変換する地点ではシルトが強く暗褐色粘土質シルトが見られた。

第9層 1区北部から南西部、2区北西端、3区北部にかけてと4区中央東端に堆積する基盤層である。灰オリーブ～黄褐色シルト質粘土や粗砂混じり粘土質シルトである。1区で地震によると見られる変形構造を確認した(図版3-5)。

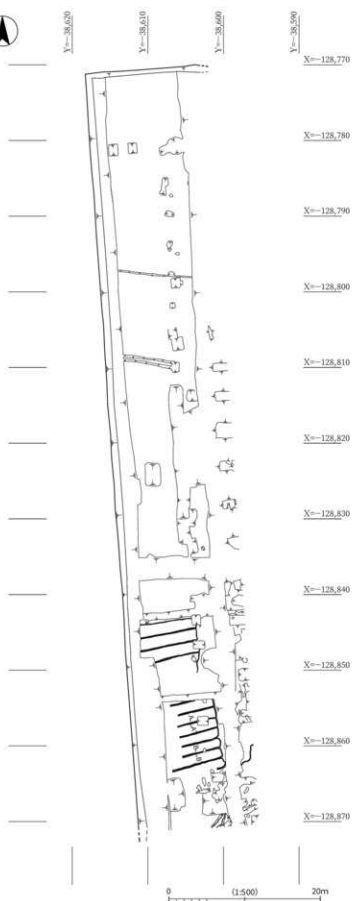
第10層 1区中央西端で確認した基盤層である。暗灰黄色礫混じりシルト層で細礫や直径5～15cmの中礫を多く含む。

第2節 第1面検出の遺構と遺物

3区南側において第2層を重機により掘削後、第3層を検出した。この第3層上面で精査作業を行ったところ、約1.5m間隔で東西方向に0.1m幅の帯状に延びる第4層の黄褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂層を11箇所検出し、これを第1面とし調査を行った。(図13・図版4)。これは東西方向に幅1.5mの短冊形の区画を設け、区画内の第4層を除去した後に第3層の大礫を主体としたオリーブ褐色粗砂混じり砂質シルトを0.1mの厚さで敷き均し嵩上げを行い、第4層を上層に入れ替える天地返しを行ったものと判断した。時期は第3層の出土遺物から中世と考えられる。

第3層出土遺物(図14・図版22)

第3層からは瓦器椀、須恵器杯・壺・甕、土師器羽釜、弥生土器甕、瓦が出土した。1～3は須恵器である。1は杯である。体部内外面に暗文のようなヘラミガキを施し、底部内面は時計回りにヘラミガキを施す。8世紀前半に比定される。2・3は甕である。2は直口甕で口頸部は肩部からほぼ直立し、口頸部中央と肩部境に各1条の凹線を施す。8世紀に比定される。3は口頸部を折り返し、頸部外面に粗い櫛描波状文とその直下に2条の凹線を施す。7世紀中頃に比定される。



- Aライン
1. 2.5Y5/4 黄褐色 粗砂～極粗砂混シルト質砂 (第2層)
 2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂混砂質シルト 大礫 (20～60mm) 多く含む (第3層)
 3. 2.5Y5/4 黄褐色 粗砂～極粗砂混シルト質砂 (第4層)



- Bライン
1. 2.5Y5/4 黄褐色 粗砂～極粗砂混シルト質砂 (第2層)
 2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂混砂質シルト 大礫 (20～60mm) 多く含む (第3層)
 3. 2.5Y5/4 黄褐色 粗砂～極粗砂混シルト質砂 (第4層)

図13 第1面 平面

第4層出土遺物(図14)

第4層からは須恵器杯・甕が出土した。4は須恵器甕である。口端部を外方に拡張する。6世紀中頃であろうか。

第3節 第2・3面検出の遺構と遺物

第2面は第4層を掘削除去した面で、3区南側において土坑・ピット・溝を検出した(図15)。第3面は第5層を掘削除去した面であるが、遺構は検出されなかった。

1土坑(図15)

3区南側7N-1fで検出した。平面形は不整な方形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.83~1.05m、深さ0.08mである。

埋土は褐灰色砂質シルトに中砂や細礫から中礫を多く含む。遺物は出土していない。

6溝(図15)

3区南側7N-1eで検出し、東・西側は攪乱を受ける。溝は東から西方向に延び、規模は最大幅0.8m、深さ0.05mである。

埋土は第4層のオリーブ褐色シルト質砂である。遺物は出土していない。

第5層出土遺物(図16、図版22)

第5層からは、青磁・瓦器・瓦質土器・黒色土器・須恵器・土師器・瓦が出土した。5・6は青磁である。5は碗である。体部外面に蓮弁文を施す。口縁端部の所々が剥離しており、打ち欠き痕と見られる。軸調はオリーブ灰色を呈する。13世紀中頃から14世紀初頭に比定される。6は皿である。見込みに文様を施す。軸調は灰オリーブ色を呈する。12世紀中頃から後半に比定される。

7は瓦器碗である。内外面ともにヘラミガキを施すが、外面は剥離により不明瞭である。内面は細かいヘラミガキが隙間なく施される。11世紀後半に比定される。8は黒色土器碗で底部に貼付け輪高台を有する。9世紀末から10世紀に比定される。

9・10は須恵器で9は杯蓋、10は杯である。9は口縁端部に自然釉が付着し、重ね焼き痕が残る。9は9世紀前半、10は9世紀に比定される。

11・12は土師器である。11は皿である。口縁端部は強く横方向のナデにより外反する。11世紀前半に比定される。12の甕は口縁端部を上方に突出させる。9世紀前半に比定される。

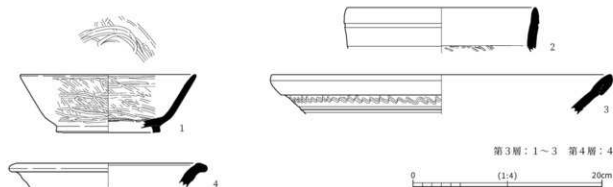


図14 第3・4層 出土遺物



図 15 第 2 面 平面

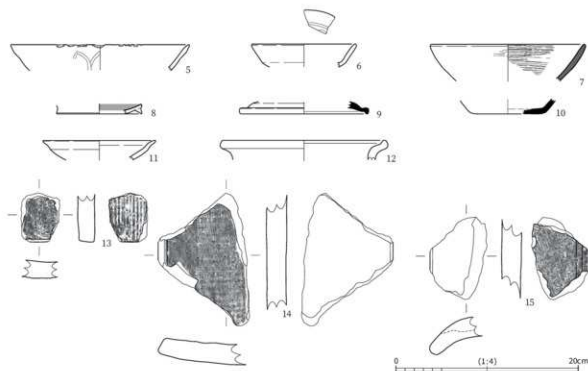


図16 第5層 出土遺物

13・14は平瓦である。いずれも凹面は布目痕が残存し、13は斜方向の糸切痕が残る。14は端面付近にナデを行う。凸面は、13は縄目タタキ、14は摩滅のため調整不明である。15は丸瓦である。凹面は布目痕が残存し、端面付近はナデを行う。凸面は丁寧なナデにより、平滑に仕上げる。いずれの瓦も古代の所産である。

第6—1層出土遺物(図17、図版22・23・25)

第6—1層からは瓦器・黒色土器・須恵器・土師器・弥生土器・埴輪・土製品・木製品・核果が出土した。16・17は黒色土器椀である。いずれも外面が摩滅により調整不明、内面は細かいヘラミガキを施す。底部に貼付け輪高台を有する。9世紀から10世紀前半に比定される。

18～25は須恵器である。18～21は杯蓋である。18はボタン状のつまみが付き、頂部は平坦でヘラケズリを行う。22～24は高台が付く杯底部である。25は壺である。18・20・25は8世紀、19・22～24は8世紀後半から9世紀初頭、21は7世紀前半に比定される。

26～29は土師器である。26は椀である。内外面を口縁部は横方向のナデ、体部はナデ、外面底部はユビオサエを行う。8世紀に比定される。27は杯である。外面はナデで粘土接合痕が残る。内面は放射状の暗文を施す。28は皿である。摩滅により調整不明な部分が多いが、内面は放射状暗文で底部付近は螺旋状暗文の痕跡が残る。27・28は8世紀前半に比定される。29は甕である。口縁から頸部は強い横方向のナデにより、口縁端面は凹線状にくぼみ、口縁部直下は段をもつ。外面体部はハケを施す。内面はハケ後、口縁端部は横方向のナデ、体部は一部ナデを行う。7世紀前半に比定される。

33は庄内式期の鉢である。口縁部は横方向のナデ、体部はタタキ後ナデを行う。30～32・34～36は弥生土器である。30の高杯は、内外面ともに摩滅により調整不明である。杯底部は円盤状の粘土塊を充填する。31～33は鉢である。31は大形で、口縁部は「く」字状に外反する。32は小形で短い脚をもち、全体にユビオサエで粗雑な作りである。34～36は甕である。35は外面がタタキ後ナデ、内面は摩滅に

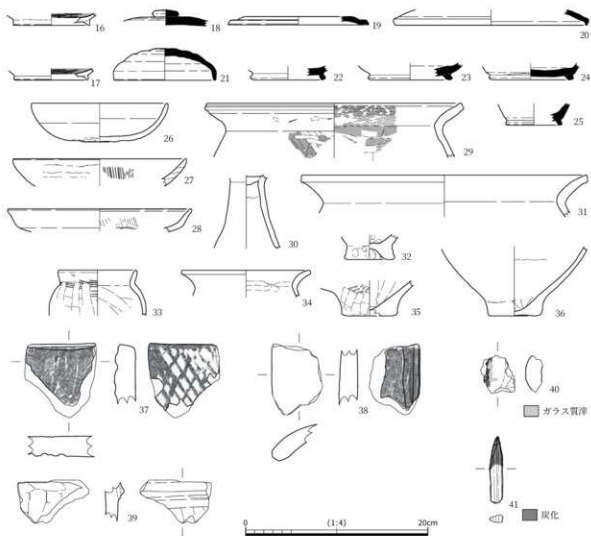


図17 第6-1層 出土遺物

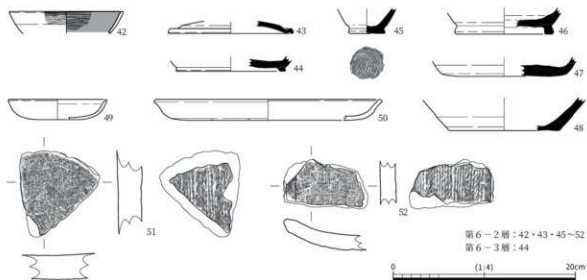


図18 第6-2・3層 出土遺物

より調整不明である。36は内外面剥離により調整不明で内面底部にナデ工具痕が僅かに残存する。30～32・34～36は弥生時代後期に比定される。

37は平瓦、38は丸瓦である。37は硬質で凹面に布目痕、凸面は斜格子タタキ後、端面付近はナデを行う。38は凹面に布目痕、凸面は剥離により調整不明である。いずれも古代の所産である。

39は円筒埴輪体部片である。突帯の段面形状は三角形を呈する。調整は外面が摩滅により不明、内面はナデである。

40は土製品羽口である。孔径 24mm、重量 22.0g である。外面は熱により灰色に変色し、左端にガラス質滓が付着する。

41は木製品火付棒で先端が炭化する。

第6-2層出土遺物(図18、図版23)

第6-2層からは黒色土器椀、須恵器杯・甕、土師器杯・皿・甕・羽釜、瓦、核果が出土した。42は黒色土器椀である。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。9世紀から10世紀前半に比定される。

43・45～48は須恵器である。43は杯蓋である。口縁端部に降灰、天井部と口縁部の境に重ね焼き痕が見られる。43は8世紀後半に比定される。45～48は壺である。45は小形壺で底部外面に糸切痕が残る。47は体部にヘラケズリを行う。

49・50は土師器皿である。49は口縁部は横方向のナデ、体部から底部は摩滅より調整不明である。50は口縁端部が玉縁状を呈し、口縁から体部は横方向のナデ、底部はヘラケズリを行う。いずれも8世紀後半から9世紀初頭に比定される。

51・52は平瓦である。51は硬質で、51・52ともに凹面は布目痕、凸面は縄目タタキを施す。古代の所産である。

第6-3層出土遺物(図18)

第6-3層からは須恵器杯、土師器甕が出土した。44は須恵器杯である。8世紀後半から9世紀初頭に比定される。

第4節 第4面検出の遺構と遺物

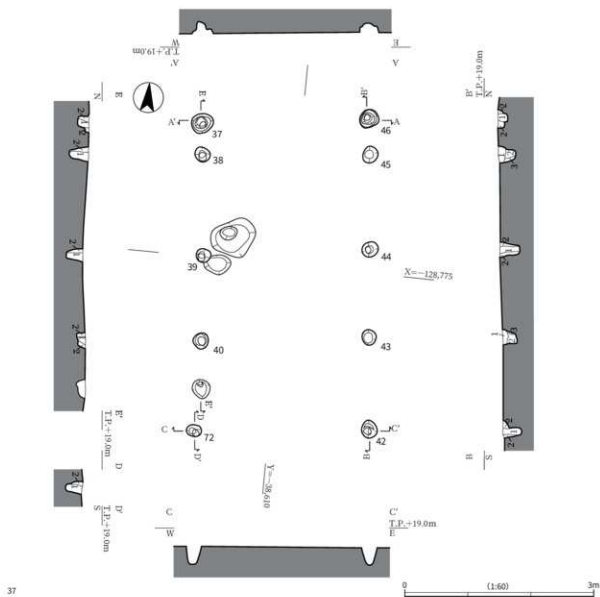
第4面は第6層を掘削除去した面である。東側の段丘崖に近い1区南東端や2区東側と4区南側を中心に基盤層も現代の造成により削平を受けており、それらの箇所では盛土を除去した面で遺構を検出した。調査区全体の微地形は、1区北端から南側へ緩やかに下り、2区北西側から3区北部にかけて低くなり、3区中央部のX=-128,805付近を境に南側は0.4m程高い微高地となる。そして4区中央東端のX=-128,840・Y=-38,590周辺はやや低地になる。4区南側は現代の造成により削平を受けているが、本来は南へ向かって高くなる地形であったと考えられる。

検出した遺構は掘立柱建物1棟、井戸1基、多数の土坑・ピット、溝、礫集中である(付図1)。とくに4区中央東側では土坑105基、ピット43基を集中して検出した(土坑・ピット群1)。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、木製品、核果が出土した。

掘立柱建物1(付図1、図19、図版10)

3区北側端の7M-1・2hで検出した。南北棟の建物で、主軸はN-6°-Wである。建物規模は



- 37
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 2. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
 - SY6/1 灰 シルトブロック (15~20mm) 含む
- 38
1. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
 2. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
 - 10Y5/1 灰 シルトブロック (5~10mm) 多く含む
- 39
1. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
 2. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
 - 10Y5/1 灰 シルトブロック (5~10mm) 含む
- 40
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 - 10Y5/1 灰 シルトブロック (3~10mm) 多く含む
 2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 - 10Y5/1 灰 シルトブロック (3~5mm) 含む
- 42
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト 粗砂含む
 - SY4/1 灰 粘土質シルトブロック (5~10mm) 含む

- 43
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 - SY4/1 灰 粘土質シルトブロック (2~8mm) 含む
 2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 3. 2.5Y3/2 黒 粗砂混粘土質シルト
 - SY4/1 灰 粘土質シルトブロック (5~10mm)
- 44
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 - SY5/1 灰 シルトブロック (5~10mm) 含む
- 45
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 - SY6/1 灰 シルトブロック (2~3mm) 含む
 2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 3. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト SY6/1 灰 シルトブロック (5~15mm) 多く含む
- 46
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
 - SY6/1 灰 シルトブロック (2~3mm) 含む
 2. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト SY6/1 灰 シルトブロック (5~15mm) 多く含む
 - 72
 1. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト SY5/2 灰オリーブ シルトブロック含む (5~10mm)
 2. 2.5Y3/2 オリーブ黒 粘土質シルト
 - SY5/2 灰オリーブ シルトブロック (10mm) 含む

図 19 掘立柱建物 1 平・断面

桁行3間(4.4m)、梁行1間(2.75m)に北面に廂が付く。面積は13.75㎡である。

柱筋は桁行西面が不揃いである。身舎柱間寸法はばらつきがあり、桁行西面が北から1.6m、1.3m、1.45m、東面が北から1.5m、1.4m、1.5mである。南北両妻には妻柱がない。掘方平面形は円形を呈し、規模は直径0.2～0.3m、深さ0.15～0.3mである。43・45柱穴を除き、柱痕跡を検出した。

遺物は37柱穴から弥生土器小形鉢口縁部細片が出土したのみであり、建物の時期を特定するに至らなかった。

316井戸・322溝(付図1、図20、図版11)

2区北東側の7M-7gで検出し、316井戸に322溝が接続する。溝は西に延び、西側は攪乱を受ける。316井戸の平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.82m、短軸1.25m、深さ0.9mである。

埋土は4層に分けられた。埋土4層はオリーブ黒色や黒褐色粘土質シルトに基盤層の砂質シルトブロックや多量な直径10～30cmの大礫、木材片が混じる。3層は井戸西端から322溝に堆積し、黒褐色シルト質砂で中礫から大礫が多く混じる。4・3層は人為的に埋戻されたと考えられる。2層は灰色粘土の水成堆積層と見られる。1層は黒褐色シルト質粘土で木材片が混じる。

322溝の規模は最大幅1.1m、深さ0.2mである。埋土は2層に分けられ、埋土1層は井戸埋土3層の

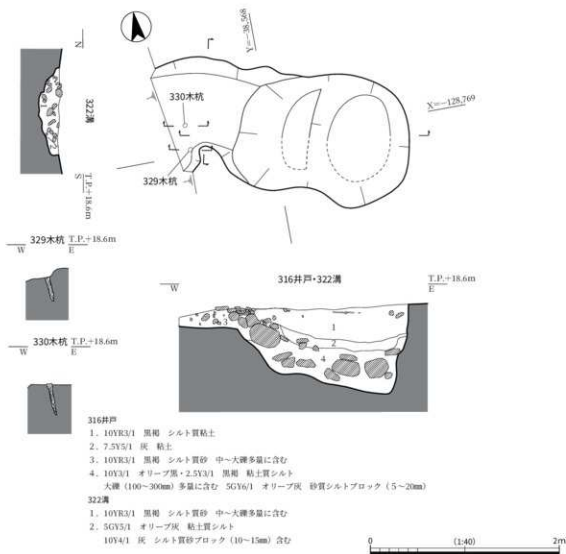
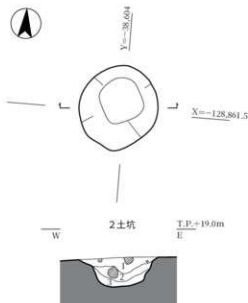
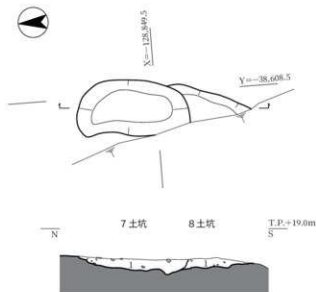


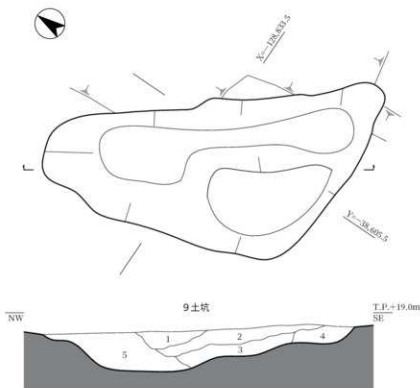
図20 316井戸・322溝 平・断面



- 2土坑
- 7.5YR5/3 にぶい相 細粒混砂質シルト 中〜大礫 (5~150mm) 含む 粗砂少量含む
 - 7.5YR4/2 灰褐色 細粒混シルト 大礫 (100mm) ・中砂少量含む
 - 10YR6/2 灰黄相 砂質シルト 黄褐色シルトブロック含む



- 7土坑 8土坑
- 5Y2/2 オリーブ黒 粗砂〜極粗粒混砂質シルト 中礫 (20~30mm) ・細〜中礫 (5~20mm) 多く含む オリーブ灰 シルトブロック (5~10mm) ・炭粒 (1mm) 含む
- 8土坑
- 2.5Y4/4 オリーブ黒 粗砂〜極粗粒混砂質シルト 中礫 (5~10mm) 含む オリーブ灰 シルトブロック (5~10mm) 含む



- 9土坑
- 10YR2/1 黒 粗砂〜極粗粒混砂質シルト 中礫 (5~30mm) 多く含む シルトブロック (10mm) 含む
 - 10YR2/2 黒相 粗砂〜極粗粒混砂質シルト 細〜中礫 (3~10mm) ・シルトブロック (5mm) 含む
 - 2.5Y3/2 黒相 粗粒混砂質シルト 粗礫 (4~6mm) 含む 中礫 (50mm) 少量含む
 - 10YR3/3 暗黒 粗砂〜極粗粒混砂質シルト 炭粒極少量含む
 - 10YR2/2 黒相 粗砂〜極粗粒混砂質シルト

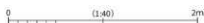


図 21 2・7・8・9土坑 平・断面

埋戻し土にあたり、2層はオリブ灰色粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。溝の2箇所に木杭が打ち込まれる。木杭は残存長25～30cm、直径5cmで先端のみ面取りする。遺物は出土していない。

2土坑(付図1、図21、図版11)

3区南側の7N-1gで検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径0.85m、深さ0.3mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は基盤層のシルトブロックを含む灰黄褐色砂質シルトである。2層は少量の大礫を含む灰褐色細礫混じりシルト、1層はにぶい褐色細礫混じり砂質シルトで直径0.5～1.5cmの中礫から大礫を多く含む、いずれも埋戻し土と見られる。

遺物は図化しえなかったが、土師器高杯片が出土した。

7土坑(付図1、図21)

3区南側の7N-1eに位置し、南西端は攪乱を受け残存しない。8土坑と重複し後出する。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.17m、短軸0.6m、深さ0.15mである。

埋土は基盤層のシルトブロックや細礫から中礫が多く混じるオリブ黒色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

8土坑(付図1、図21)

3区南側の7N-1e・fに位置し、西半は攪乱を受ける。7土坑と重複し先行する。そのため平面形は不明で、残存規模は長軸0.64m、短軸0.35m、深さ0.1mである。

埋土は中礫や基盤層のシルトブロックを含むオリブ褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

9土坑(付図1、図21、図版11)

3区中央の7N-1dで検出した。平面形は三角形を呈し、規模は長軸3.7m、短軸1.7m、深さ0.4mである。

埋土は5層に分けられ、いずれも粗砂から極粗砂混じり砂質シルトを主体とする。埋土3～1層は中礫や基盤層のシルトブロックが混じり、とくに1層は中礫を多く含む。遺物は出土していない。

10土坑(付図1、図22)

3区中央東端の6N-10dで検出し、攪乱を受け南東部のみ残存する。そのため平面形は不明、残存規模は長軸2.6m、短軸0.68m、深さ0.18mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層に似る暗褐色粗砂混じり砂質シルトに細礫を含み、1層は黒褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトに中礫を含む。遺物は出土していない。

11土坑(付図1、図22)

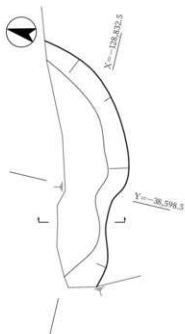
3区中央東端の6N-10cで検出し、攪乱を受け北東部のみ残存する。そのため平面形は不明、残存規模は長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.38mである。

埋土は4層に分けられる。埋土4・2層は暗オリブ褐色粗砂混じり砂質シルトを主体とし、3層は基盤層の第9層に由来する砂質シルトである。1層は黒褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで細礫から中礫を多く含む。遺物は出土していない。

12土坑(付図1、図22)

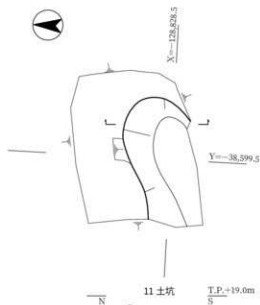
3区中央東端の6N-10cで検出し、攪乱を受け南西部のみ残存する。そのため平面形は不明、残存規模は一辺0.66m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、黒色や黒褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトを主体とし、2層は砂質シル



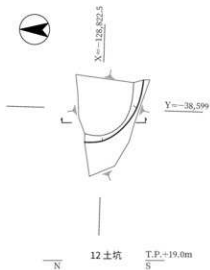
10土坑 T.P. +19.0m

- 10土坑
1. 2.5Y3/2 黒期 粗砂～極粗粒混砂質シルト 中礫 (5～10mm) 少量含む
 2. 10YR3/3 暗期 粗粒混砂質シルト 細礫 (4mm)・炭粒 (1mm) 含む



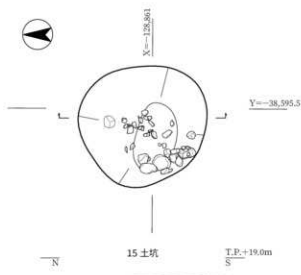
11土坑 T.P. +19.0m

- 11土坑
1. 10YR2/2 黒期 粗砂～極粗粒混砂質シルト 細～中礫 (3～10mm) 多く含む
5Y3/1 オリーブ期 砂質シルトブロック (5mm) 含む
 2. 2.5Y3/3 暗オリーブ期 粗粒混砂質シルト 中礫 (3～8mm) 含む
5Y3/1 オリーブ期 砂質シルトブロック (5mm) 少量含む
 3. 2.5Y5/4 黄期 砂質シルト 2.5Y3/3 暗オリーブ期 砂質シルト含む
 4. 2.5Y3/3 暗オリーブ期 粗粒混砂質シルト 細礫 (4mm) 少量含む



12土坑

1. 10YR2/1 黒 粗砂～極粗粒混砂質シルト
2. 10YR2/3 黒期 粗砂～極粗粒混砂質シルト 中礫 (20～40mm) 含む
10YR2/1 黒 砂質シルトブロック (10～20mm) 含む



15土坑

1. 10YR3/2 黒期 粗粒混砂質シルト 細礫 (2～4mm)・中礫 (50mm) 含む
2. 2.5Y4/1 黄灰 粗粒混砂質シルト 中～大礫 (50～200mm) 含む

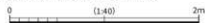


図22 10・11・12・15土坑 平・断面

トブロックや中礫を含む。遺物は出土していない。

15土坑(付図1、図22・24、図版12・23)

3区南東端の6N-10gで検出した。平面形は不整な円形を呈し、規模は長軸1.33m、短軸1.2m、深さ0.4mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも粗砂混じり砂質シルトで礫を含み、埋戻し土と見られる。とくに埋土2層は5～20cmの中礫から大礫が多く混じる。底面付近からは土器片が出土した。

遺物は須恵器甕、弥生土器甕が出土し、1点を図化しえた。54は須恵器甕である。外面は口縁部直下に板状工具によるナデ後、4条の凹線とヘラによる波状文を2条施す。肩部はタタキを行う。

時期は出土遺物から6世紀前半と考えられる。

16土坑(付図1、図23)

3区中央の7N-1cで検出し、東半は攪乱を受け残存しない。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸1.33m、短軸1.1m、深さ0.23mである。

埋土は5層に分けられ、最下層は粗砂から極粗砂混じり粘土質シルト、4～1層は黒褐色粗砂混じり砂質シルトを主体とし、いずれも基盤層のシルトブロックを含む。3層は層全体が暗色化する。遺物は出土していない。

17土坑(付図1、図23)

3区中央の7N-1cで検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸1.17m、短軸0.92m、深さ0.2mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4層は灰黄褐色粘土質シルトに細礫や基盤層のシルトブロックを多く含む。3層は灰黄褐色粗砂混じり粘土質シルト、2層は細礫や基盤層のブロックを含む灰褐色粗砂混じり砂質シルト、1層は礫を含む黒褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

20土坑(付図1、図23、図版12)

3区北側の7M-1iで検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径0.97m、深さ0.47mである。

埋土は3層に分けられた。埋土3層は黒褐色粗砂混じり砂質シルトと基盤層のシルトブロックが混じる。2層はオリーブ褐色粗砂から極粗砂を多く含む砂質シルト、1層は黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。遺物は出土していない。

21土坑(付図1、図23・24)

3区北側の7M-2h・iで検出し、22土坑と重複し後出する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺1.43m、深さ0.13mである。

埋土は2層に分けられ、黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、埋土2層は基盤層である第9層のシルトブロックを含む。

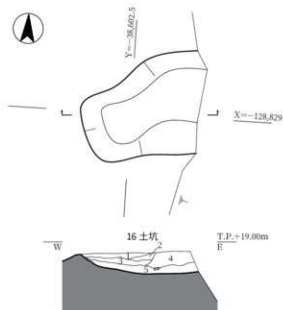
遺物は須恵器杯・甕体部片、土師器甕体部片が出土し、そのうち1点を図化しえた。53は須恵器杯蓋である。天井部外面はヘラケズリを行う。

時期は出土遺物から6世紀後半と考えられる。

22土坑(付図1、図23)

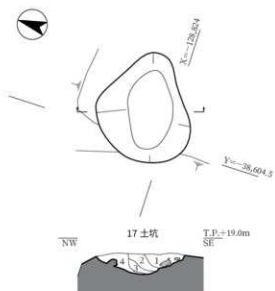
3区北側の7M-2iで検出し、21土坑と重複し先行する。平面形は不整な方形と推定され、残存規模は長軸1.06m、短軸0.4m、深さ0.08mである。

埋土は黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。遺物は出土していない。



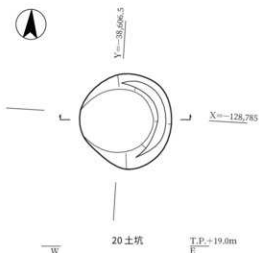
16土坑

1. 10YR2/3 黒濁 粗砂混砂質シルト SY4/2 灰オリーブ シルトブロック (5m) 含む
2. 10YR2/3 黒濁 粗砂混砂質シルト SY4/2 灰オリーブ シルトブロック (5~10m) 含む
3. 10YR2/2 黒濁 粗砂混砂質シルト SY4/2 灰オリーブ シルトブロック (3~5m) 含む
4. 10YR2/3 黒濁 粗砂混砂質シルト SY4/2 灰オリーブ シルトブロック (5~15m) 多く含む
5. 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂~極粗砂混粘土質シルト SY4/2 灰オリーブシルトブロック (5~10m) 含む



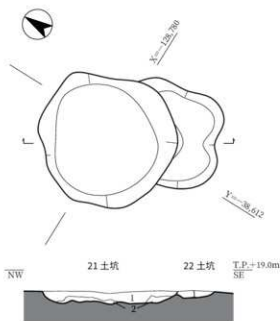
17土坑

1. 7.5YR2/2 黒濁 粗砂~極粗砂混砂質シルト 細礫 (2~3mm)・大礫 (100m) 含む
2. 7.5YR4/2 灰濁 粗砂混砂質シルト 細礫・シルトブロック (2~4mm) 含む
3. 10YR4/2 灰黄濁 粗砂混粘土質シルト
4. 10YR4/2 灰黄濁 粘土質シルト 細礫・シルトブロック (3~10m) 多く含む



20土坑

1. 5Y2/1 黒 粗砂~極粗砂混粘土質シルト
- 5Y5/3 灰オリーブ シルトブロック (5m) 少量含む
2. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂~極粗砂混砂質シルト
- 5Y5/3 灰オリーブ シルトブロック (3m) 少量含む
3. 2.5Y3/1 黒濁 粗砂混砂質シルト
- 2.5Y6/3 ばい色 シルトブロック (3~5m) 含む
- 5Y5/3 灰オリーブ シルトブロック (3m) 少量含む



21土坑

1. 5Y2/1 黒 粗砂~極粗砂混粘土質シルト
2. 5Y2/1 黒 粗砂~極粗砂混粘土質シルト 2.5Y4/2 暗灰黄 シルトブロック (5~10m) 含む

22土坑

1. 2.5Y2/1 黒 粗砂~極粗砂混粘土質シルト

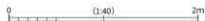


図23 16・17・20・21・22土坑 平・断面



図24 15・21土坑 出土遺物

50土坑(付図1、図25)

3区中央北寄りの7N-2 aで検出し、49ビット・90溝と重複し先行する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.07m、短軸0.8m、深さ0.12mである。

埋土は黒色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含む。遺物は土師器甕口縁部・体部片が出土したが、細片のため図化しえなかった。

56土坑(付図1、図25)

3区北側の7M-2 iで検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.6m、短軸0.53m、深さ0.15mである。

埋土は黒褐色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトに黒色粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

60土坑(付図1、図25)

3区中央北寄りの7N-1 aで検出した。90溝と重複し先行する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.94m、深さ0.08mである。

埋土はオリブ黒色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のシルト質砂ブロックを含む。遺物は出土していない。

61土坑(付図1、図25、図版12・23)

3区中央北寄りの7N-2 aで検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.38mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4層は黒色粘土質シルトに黒褐色粘土質シルトブロックや基盤層の粘土質シルトブロックを含む。3～1層は第6～4層に由来する黒色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、3・2層には基盤層のブロックが混じる。

遺物は弥生土器器台・壺が出土し、そのうち3点を図化しえた。55・56は器台である。55は口縁端部に凹線、口縁部内面に4条の櫛描波状文を施す。56は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。57は壺で外面摩滅により調整不明である。

時期は出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

64土坑(付図1、図26、図版12)

3区北側の7M-1・2 jで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.76m、深さ0.4mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4・3層はオリブ黒～黒色粘土質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。2・1層は黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、2層には黒色粘土質シルトや基盤層のブロックが混じる。遺物は出土していない。

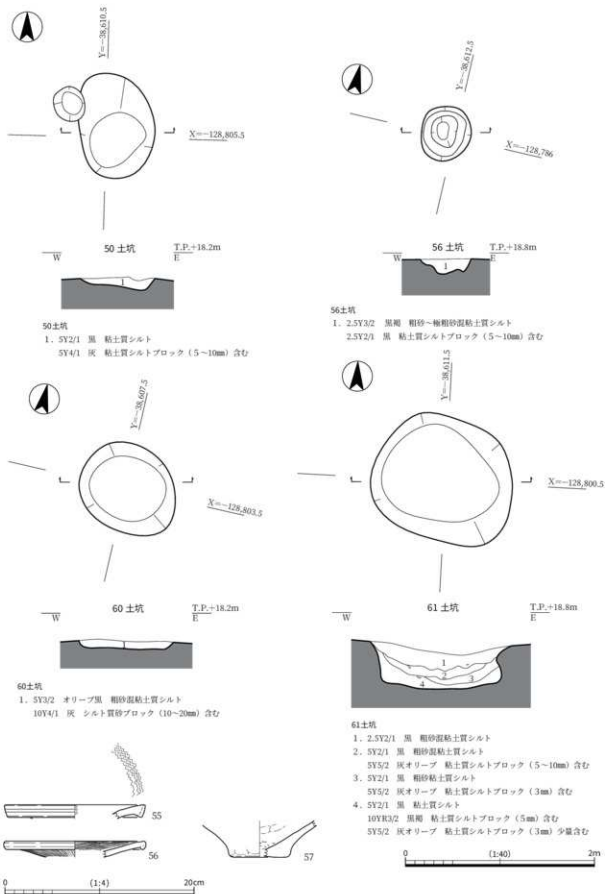
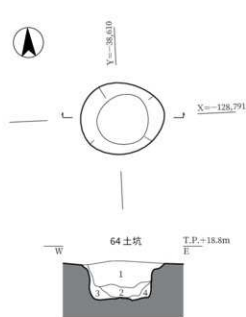
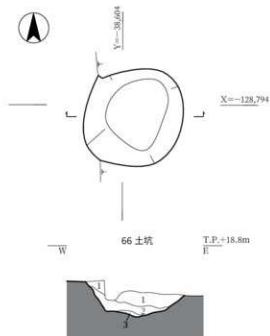


図 25 50・56・60・61 土坑 平・断面及び 61 土坑 出土遺物



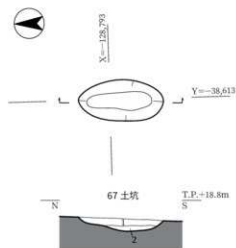
64土坑

- 2.5Y2/1 黒 粗砂～極粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
- 5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト
- 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト



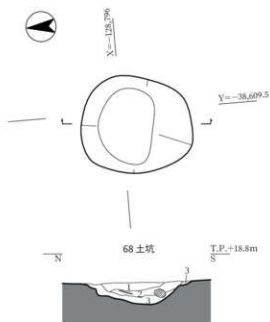
66土坑

- 5Y2/1 黒 シルト質粘土
- 5Y2/1 黒 シルト質粘土
- 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土



67土坑

- 2.5Y2/1 黒 粗砂～極粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y3/1 黒 粗砂混粘土質シルト



68土坑

- 2.5Y2/1 黒 粗砂～極粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト 粗砂少量含む
- 2.5Y2/1 黒 シルト質粘土

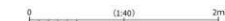
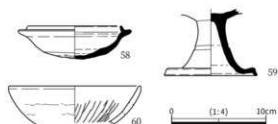


図26 64・66・67・68土坑 平・断面及び68土坑 出土遺物

66土坑(付図1、図26、図版12)

3区北側の7M-1jで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺1.03m、深さ0.37mである。

埋土は3層に分けられ、オリーブ黒～黒色シルト質粘土を主体とし、埋土2層には植物遺体を含む。遺物は出土していない。

67土坑(付図1、図26)

3区北側の7M-2jで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.45m、深さ0.13mである。

埋土は2層に分けられ、黒褐～黒色粗砂や極粗砂混じり粘土質シルトである。埋土2層より1層は砂が多く混じる。遺物は出土していない。

68土坑(付図1、図26、図版12・23)

3区北側の7M-2・1jで検出した。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸1.04m、深さ0.23mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は黒色シルト質粘土の泥層で基盤層のシルトブロックを含み、2層は黒色粘土質シルトで木材片が出土した。1層は黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は須恵器杯・高杯片、土師器杯・高杯・甕片が出土し、そのうち3点を図化した。58の須恵器杯は、

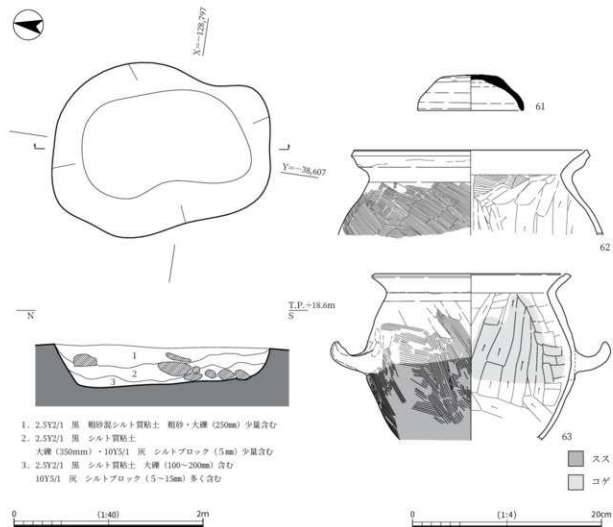


図27 70土坑 平・断面・出土遺物

外面底部付近はヘラケズリ後にナデを施す。59の須恵器高杯は脚部中央に凹線をめぐらす。60の土師器杯は、外面は摩滅のため調整不明、内面は2段の放射状暗文を施す。

時期は出土遺物から7世紀前半と考えられる。

70土坑(付図1、図27、図版13・23)

3区北側の7M-1jで検出した。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸 2.3m、短軸 1.75m、深さ 0.44mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3・2層はいずれも黒色シルト質粘土を主体とし、基盤層のシルトブロックや大礫を含む。とくに3層は基盤層のシルトブロックや大礫を多く含む。1層は黒色粗砂混じりシルト質粘土に大礫を含む。いずれも埋戻し土と見られる。

遺物は須恵器杯、土師器高杯・甕・羽釜片、弥生土器甕片があり、近江系の受口状口縁甕が含まれる。そのうち3点を図化した。61の須恵器杯蓋は天井部にヘラケズリを行う。

62・63は土師器甕である。62は口縁から頸部は横方向のナデ、体部外面は斜方向のハケ、体部内面はハケ、ヘラケズリ後上部に板状工具によるナデを行う。外面に黒斑が見られる。63は把手付きの甕である。口縁から頸部は横方向のナデ、体部は外面がハケ後に上半は板状工具によるナデを行う。下半にスガが付着する。内面はヘラケズリ後一部板状工具によるナデを行う。下半にコゲが付着する。

時期は出土遺物から7世紀後半と考えられる。

71土坑(付図1、図28、図版13)

2区西端から3区の7M-1iにかけて検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長軸 1.56m、短軸 1.17m、深さ 0.36mである。

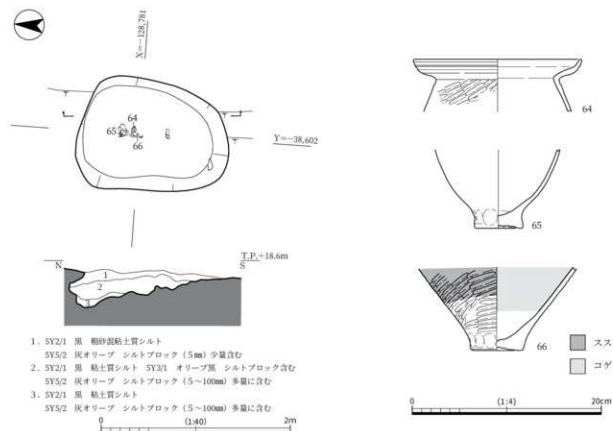
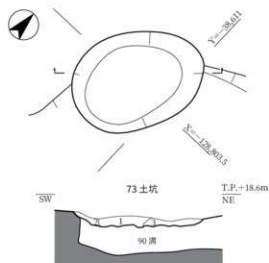
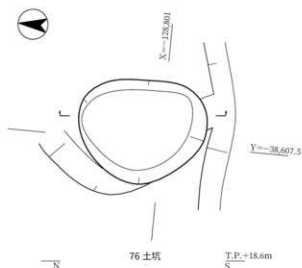


図28 71土坑 平・断面・出土遺物



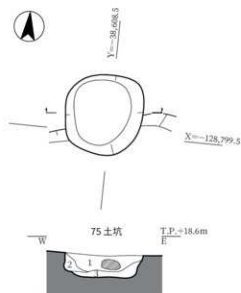
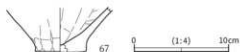
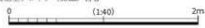
73土坑

1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
- 5Y5/2 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (5~10cm) 少量含む
2. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト 5Y5/2 灰オリーブ 粘土質シルトを含む
3. 5Y5/2 灰オリーブ 粘土質シルト
- 2.5Y5/1 黒 粘土質シルトブロック (5~15cm) 含む



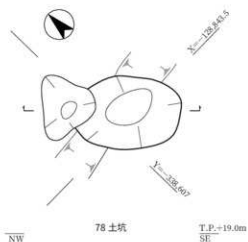
76土坑

1. 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土
- 7.5Y4/1 灰 シルトブロック (50~100mm) 含む
2. 7.5Y4/1 灰 シルト
- 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土ブロック (50mm) 含む



75土坑

1. 2.5Y2/1 黒 シルト質粘土 粗砂少量含む
2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混シルト質粘土
- 5Y5/2 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (10mm) 少量含む
3. 2.5Y2/1 黒 粗砂~極粗砂混シルト質粘土
- 5Y5/2 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (5cm) 含む



78土坑

1. 7.5Y3/2 オリーブ黒 砂質シルト 粗砂含む
- 2.5Y5/4 黄褐 粘土質シルトブロック (10~50mm) 含む
2. 7.5Y3/2 オリーブ黒 砂質シルト
- 2.5Y5/4 黄褐 粘土質シルトブロック (5cm) 含む

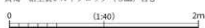


図29 73・75・76・78土坑 平・断面及び76土坑 出土遺物

埋土は3層に分けられる。埋土3・2層は黒色粘土質シルトを主体とし、基盤層のシルトブロックを多く含み、埋戻し土と考えられる。1層は第6-4層に由来する粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は2層から弥生土器甕がまとまって出土し、3点を図化しえた。64～66は甕である。64は口縁部が受口状を呈し、体部外面はタタキである。65は摩滅により調整が不明瞭で図化出来なかったが僅かにタタキ痕が残存する。66は外面がタタキ、外面にスス、内面にコゲが付着し、とくに内面は厚い。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

73土坑(付図1、図29)

3区中央北寄りの7N-2aで検出し、90溝と重複し後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.42m、短軸1.03m、深さ0.11mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層は基盤層の粘土質シルトに黒色粘土質シルトブロックを含む。2層は黒色粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。1層は第6-4層に由来する黒色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のブロックを少量含む。

遺物は、弥生時代後期の弥生土器甕片や受口状口縁甕片が出土したが、細片のため図化しえなかった。

75土坑(付図1、図29、図版13)

3区中央北寄りの7M-1jで検出し、103土坑と重複し後出する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺0.82～0.86m、深さ0.23mである。

埋土は3層に分けられ、黒色粗砂や極粗砂が混じるシルト質粘土を主体とし、埋土2・3層は基盤層の粘土質シルトブロックを含む。

遺物は弥生時代後期の弥生土器甕・壺片が出土したが、図化しえなかった。その他に核果が出土した。

76土坑(付図1、図29)

3区75土坑南側の7N-1aで検出し、90溝と重複し後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.33m、短軸1.1m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層に由来するシルトにオリブ黒色シルト質粘土ブロックを含む。1層はオリブ黒色シルト質粘土に基盤層のブロックを含む。

遺物は弥生土器甕片が出土し、1点を図化した。67は甕底部である。外面体部から底部にかけて黒斑が見られる。弥生時代後期の所産と見られる。

78土坑(付図1、図29)

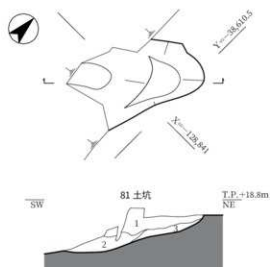
3区南側の7N-1eで検出し、80ピットと重複し先行する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.94m、短軸0.77m、深さ0.33mである。

埋土は2層に分けられ、いずれもオリブ黒色砂質シルトを主体とし、基盤層の粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

81土坑(付図1、図30)

3区南側の7N-2eで検出し、西側は攪乱を受け残存しない。そのため平面形は不明、残存規模は長軸1.33m、短軸0.84m、深さ0.36mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は黒褐色砂質シルトに基盤層のシルトブロックを多く含む。2層は粗砂が多く混じる砂質シルト、1層は第6-3層に由来する中礫を含む粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。遺物は出土していない。



81土坑

1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～極粗砂混粘土質シルト 中礫（5～10mm）含む
2. 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂混砂質シルト
3. 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
- 2.5Y5/4 黄褐色 シルトブロック（3～5mm）多量に含む

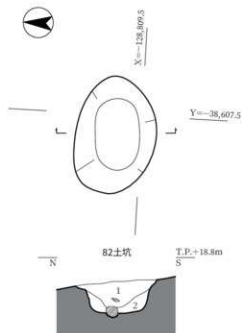


83土坑

1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～極粗砂混粘土質シルト 中礫（5～15mm）含む
2. 2.5Y2/1 黒 シルト質粘土
3. 10Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土 中礫（10～30mm）多く含む
4. 10Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土 中礫（20～30mm）
- 2.5Y5/4 黄褐色 粘土質シルトブロック（10～15mm）含む

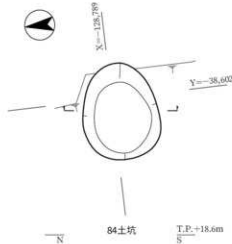


0 (1:4) 10cm



82土坑

1. 7.5Y2/1 黒 粗砂混シルト質粘土 中礫（3～20mm）多く含む
2. 10Y3/1 オリーブ黒 粗砂混粘土質シルト 中礫（5～20mm）含む 大礫（200mm）少量含む



84土坑

1. 5Y2/1 黒 シルト質粘土 粗砂含む
2. 5Y2/1 黒 シルト質粘土
- 5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルト粒含む
3. 5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト
- 5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック（10mm）含む
- 5Y4/1 灰 砂質シルト混じる
4. 5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト
- 5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック（5mm）含む

0 (1:40) 2m

図30 81・82・83・84土坑 平・断面及び83土坑 出土遺物

82土坑(付図1、図30)

3区中央北寄りの7N-1 aで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.23m、短軸0.84m、深さ0.34mである。

埋土は2層に分けられる。埋土2層はオリーブ黒色粗砂混じり粘土質シルト、1層は第6-3層に由来する黒色粗砂混じりシルト質粘土でいずれも中礫を含む。とくに埋土1層は層上部に中礫が多い。遺物は弥生土器甕底部片が出土したが、図化しえなかった。

83土坑(付図1、図30)

3区82土坑西側の7N-2 aで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.19m、短軸0.97m、深さ0.4mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4・3層は第8層に由来する中礫を含むシルト質粘土を主体とし、4層は第9層のブロックを含む。2層は黒色シルト質粘土、1層は第6-3層に由来する黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は弥生土器壺・甕片が出土し、1点を図化しえた。68は甕で内外面ともに摩滅により調整不明である。

時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

84土坑(付図1、図30)

3区北東側の7M-1 iで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.03m、短軸0.8m、深さ0.2mである。

埋土は4層に分けられ、埋土3・4層はオリーブ黒色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロック

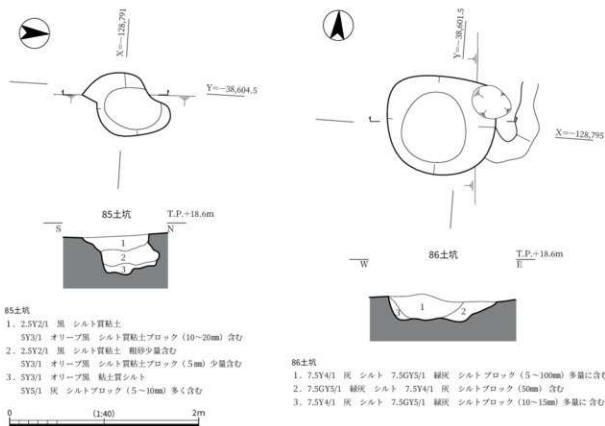


図31 85・86土坑 平・断面

を含む。1・2層は3・4層に比べ粘土が強いシルト質粘土である。遺物は出土していない。

85土坑(付図1、図31、図版13)

3区北側の7M-1 jで検出した。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸 0.9m、短軸 0.63m、深さ 0.4mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層はオリーブ黒色粘土質シルトと基盤層のシルトブロックが混じる。2・1層は黒色シルト質粘土を主体とする。1層は第7-1層に由来するオリーブ黒色シルト質粘土ブロックを多く含む。いずれも埋戻し土と考えられる。遺物は出土していない。

86土坑(付図1、図31)

3区北側の7M-1 jで検出し、90溝と重複し後出する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.14m、短軸 1.03m、深さ 0.28mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3・1層は灰色シルトに基盤層の緑灰色シルトブロックを多く含む。2層は基盤層に由来するシルトに灰色シルトブロックを含む。いずれも埋戻し土と考えられる。遺物は出土していない。

87土坑(付図1、図32、図版13・23)

2区西端から3区の7M-1 iで検出した。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸 2.01m、短軸 1.85m、深さ 0.46mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3・1層は黒色粗砂混じりシルト質粘土に第7-1層に由来する灰オリーブ粘土質シルトブロックを含む。1層中には木材片が混じる。2層は黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は弥生土器高杯・壺・鉢・甕片が出土し、そのうち3点を図化しえた。69は高杯で脚部に円形透

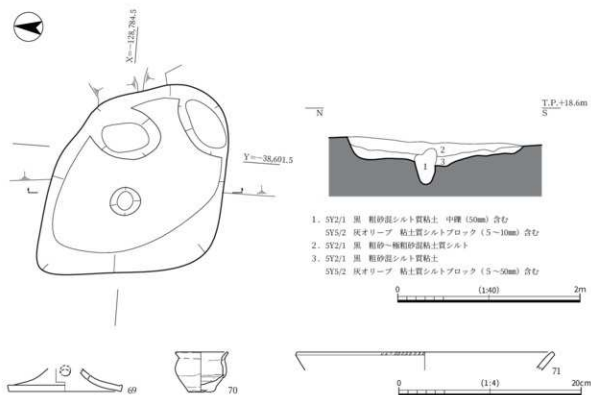


図32 87土坑 平・断面・出土遺物

孔を穿つ。70・71は鉢である。70は小形鉢で体部下半に黒斑が見られる。71は大形のもので口縁端部にキザミを施す。

時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

88土坑(付図1、図33)

3区北側の7M-2jで検出し、西端は攪乱を受け残存しない。下層確認トレンチ調査の際に検出したため、遺構東半は検出できていない。平面形は不明で、残存規模は長軸2.26m、短軸0.83m、深さ0.45mである。

埋土は6層に分けられ、埋土6・5層は黒褐色砂質シルトを主体とし、6層は第7-1層や第9層のブロックが多く混じる。4層は黒褐色シルト質粘土に第7-1層に由来するブロックを含む。3層は黒褐色シルト質砂に第6-4層に由来するブロックやシルトブロックを含む。2層は黒褐色シルト質粘土と第7-1層のブロックが混じる。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

89土坑(付図1、図33)

3区北東端から4区にかけての7M-1jで検出し、90溝と重複し後出する。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層のシルトに黒色粘土質シルトブロックを多く含み、1層は第6-4層の黒色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のブロックを多く含む。いずれも埋戻し土と考えられる。遺物は出土していない。

92土坑(付図1、図33)

4区南西端の7N-1hで検出し、西端は調査区外に続く。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸2.34m、短軸1.1m、深さ0.22mである。

埋土は2層に分けられ、いずれもシルト質砂を主体とし、大礫が多く混じる埋戻し土と見られる。とくに埋土2層は大礫で充填されている。遺物は出土していない。

93土坑(付図1、図34)

3区北側の7M-1jで検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径0.71m、深さ0.28mである。

埋土は黒色粘土質シルトに第7-1層や第9層の基盤層ブロックを非常に多く含み、埋戻し土と見られる。遺物は弥生土器細片が出土したが、図化しえなかった。

94土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図34)

4区中央東端の6N-9fで検出し、攪乱を受け北東部のみ残存する。平面形は不明、残存規模は長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.16mである。

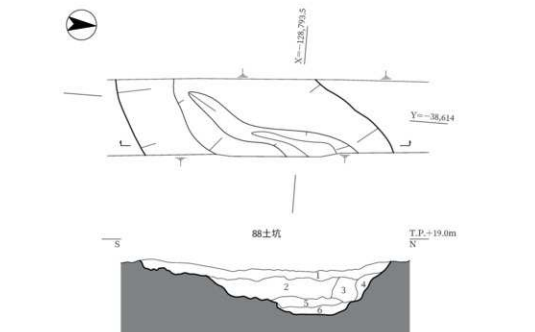
埋土は第7-2層に由来する暗灰黄色砂質シルトに大礫や黒色粘土質シルトブロック、基盤層の粘土質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

95土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図34)

4区6N-9fの94土坑北側で検出し、南西端は攪乱を受け残存しない。東半は190土坑と重複し先行する。平面形は不明、残存規模は一辺1.4m、深さ0.24mである。

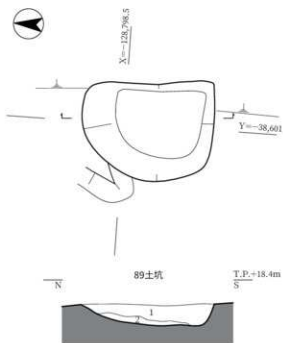
埋土は3層に分けられ、第7-1層に相当する灰オリブ色粘土質シルトを主体とし、基盤層の粘土質シルトブロックを含む。2層は大礫が多く含まれ、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生時代後期の弥生土器壺体部片が出土したが、図化しえなかった。



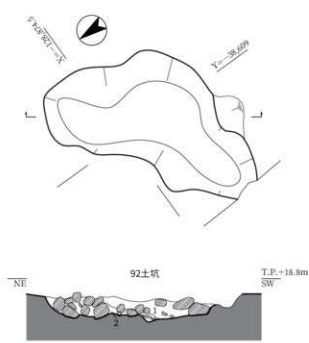
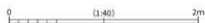
88土坑

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質砂 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (5mm) 含む
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土ブロック (5~50mm) ・粗砂含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質砂 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (5mm) ・2.5Y5/2 暗灰黄 シルト含む
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 10YR4/3 濃い黄褐色 シルト質粘土ブロック (5mm) 含む
5. 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (3mm) ・10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土ブロック (5~10mm) 含む
6. 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土ブロック (5~10mm) ・2.5Y5/4 黄褐色 粘土質シルトブロック (5~10mm) 含む



89土坑

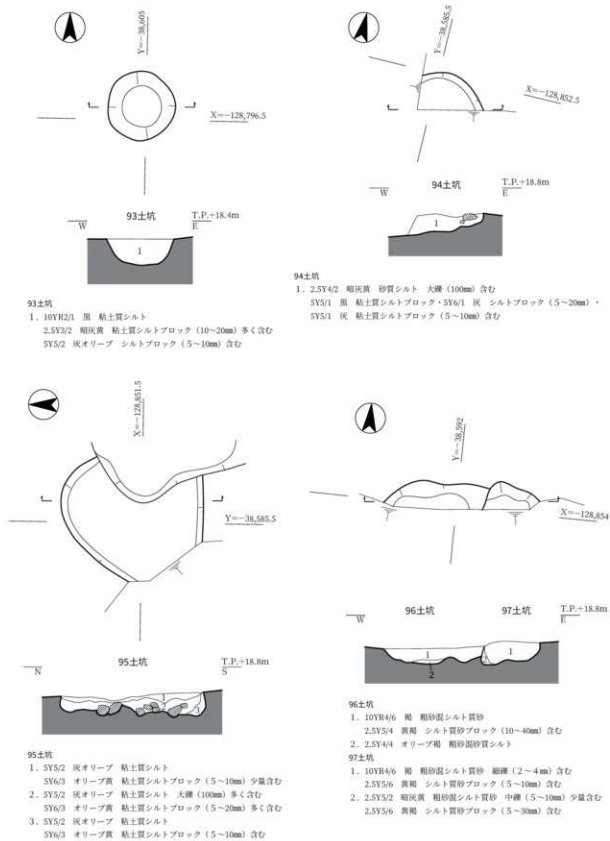
1. 5Y2/1 黒 粗砂質粘土質シルト
- 5Y3/2 灰オリーブ シルトブロック (5~15mm) 含む
2. 5Y5/2 灰オリーブ シルト 5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック含む



92土坑

1. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質砂 大礫 (100~200mm) 含む
10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック含む
2. 10YR5/1 暗灰 シルト質砂 粗砂少量含む
大礫 (100~150mm) 多量に含む

図 33 88・89・92土坑 平・断面



0 (1:40) 2m

図34 93・94・95・96・97土坑 平・断面

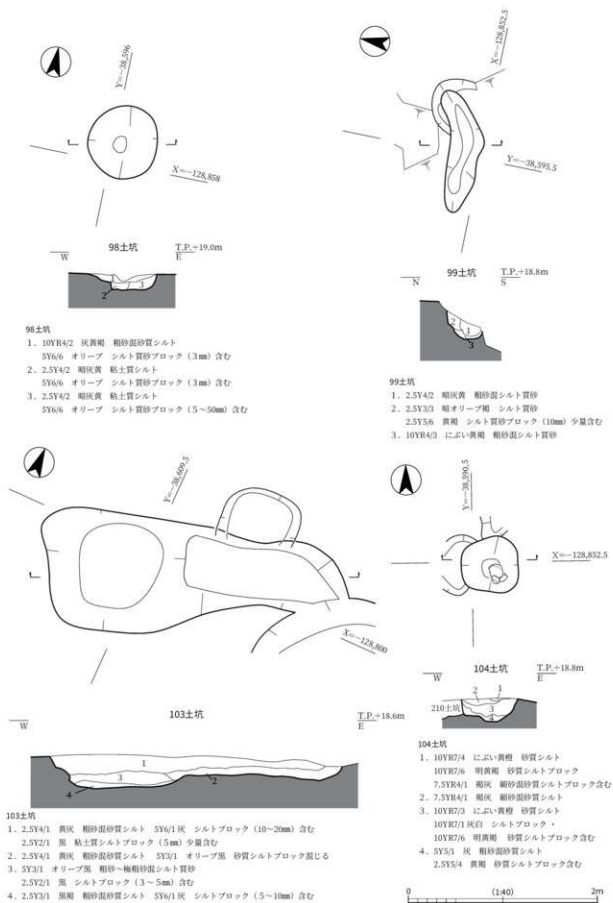


図35 98・99・103・104土坑 平・断面

96土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図34)

4区中央の6N-10fで検出し、南半は攪乱を受け残存しない。97土坑と重複し先行する。平面形は不明、残存規模は長軸1.05m、短軸0.25m、深さ0.15mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層はオリーブ褐色粗砂混じり砂質シルト、1層は褐色粗砂混じりシルト質砂に基盤層のシルト質砂ブロックを含む。遺物は出土していない。

97土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図34)

4区中央の6N-10fで検出し、南半は攪乱を受け残存しない。96土坑と重複し後出する。平面形は不明、残存規模は長軸0.47m、短軸0.27m、深さ0.19mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は暗灰黄色粗砂混じりシルト質砂、1層は褐色粗砂混じりシルト質砂でいずれも基盤層のシルト質砂ブロックを含む。遺物は出土していない。

98土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図35)

4区中央の6N-10fで検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径0.75m、深さ0.15mである。

埋土は3層に分けられる。埋土2・3層は暗灰黄色粘土質シルトに基盤層のシルト質砂ブロックを含み、3層は2層に比べブロックが大きく多量である。1層は灰黄褐色粗砂混じり砂質シルトに2層と同様の基盤層ブロックを含む。

遺物は弥生土器細片が出土したが、図化しえなかった。

99土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図35)

4区中央の6N-10fで検出し、244土坑と重複し後出する。平面形は不整な長楕円形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸0.36m、深さ0.19mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層はにぶい黄褐色粗砂混じりシルト質砂、2層は暗オリーブ褐色シルト質砂に基盤層のシルト質砂ブロックを含む。1層は暗灰黄色粗砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

103土坑(付図1、図35)

3区中央北寄りの7M・N-1・2j・aで検出し、90溝に接続する土坑である。75土坑と重複し先行する。規模は長さ3.1m、幅1.25m、深さ0.15~0.36mである。西側が約10cm深くなる。

埋土は4層に分けられ、埋土4層は黒褐色粗砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。3層はオリーブ黒色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂に黒色シルトブロックを含む。2・1層は黄灰色粗砂混じり砂質シルトを主体とする。

遺物は出土していないが、90溝の埋没時期から弥生時代後期後半と考えられる。

104土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図35、図版13)

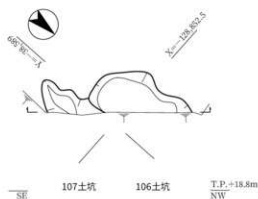
4区中央の6N-10fで検出し、210・227土坑と重複し後出する。平面形は方形を呈し、規模は一辺0.6m、深さ0.24mである。

埋土は4層に分けられる。埋土4層は灰色粗砂混じり砂質シルトに基盤層の砂質シルトブロックを含む。3層はにぶい黄褐色砂質シルトに灰白色シルトと基盤層ブロックを含む。2層は褐色灰色細砂混じり砂質シルト、1層はにぶい黄褐色砂質シルトに2層と基盤層ブロックを含む。

遺物は3層から弥生土器壺体部片が出土したが、図化しえなかった。

106土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図36)

4区中央の6N-9fで検出し、北側は攪乱を受け残存しない。107土坑と重複し後出する。平面形

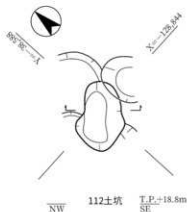


107土坑 106土坑 T.P.+18.8m
NW



- 107土坑
1. 10YR6/1 褐灰 細砂混砂質シルト 粗砂ごく少量含む
2. 7.5YR6/1 褐灰 砂質シルト

- 106土坑
1. 7.5YR6/1 褐灰 砂質シルト
10YR8/1 灰白・10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック含む
炭化物ごく少量含む

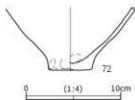


112土坑 T.P.+18.8m
SE

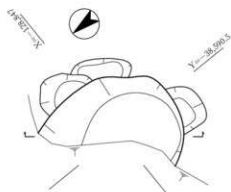


- 112土坑
1. 2.5Y4/2 黄灰黄 粗砂混～極粗砂混粘土質シルト
10YR5/6 黄褐色 粘土質シルトブロック(5～20mm)多量に含む
2. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混粘土質シルト
10YR5/6 黄褐色 粘土質シルトブロック(5～10mm)含む

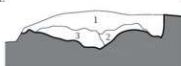
0 (1:40) 2m



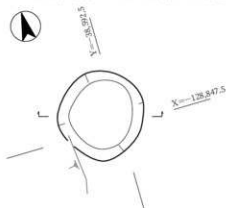
0 (1:4) 10cm



119土坑 T.P.+18.8m
SW



- 119土坑
1. 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト
10YR7/6 明黄褐色・7.5YR6/1 褐灰
シルトブロック(10～20mm)少量含む
2. 10YR5/1 褐灰 砂質シルト
10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック(10～30mm)多量に含む
7.5YR4/1 褐灰 シルトブロック(10mm)含む
3. 10YR6/3 に近い黄褐色 砂質シルト
10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック(20～40mm)多量に含む



120土坑 T.P.+18.8m
W E



- 120土坑
1. 10YR5/1 褐灰 砂質シルト
10YR7/6 明黄褐色・7.5YR4/1 褐灰
シルトブロック(5～10mm)少量含む
2. 10YR6/1 褐灰 極細砂混シルト質砂
10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック(5～10mm)少量含む
3. 10YR7/6 明黄褐色 シルト
10YR6/1 褐灰 極細砂混シルト質砂ブロック(30～40mm)含む

0 (1:40) 2m

図 36 106・107・112・119・120 土坑 平・断面及び 112 土坑 出土遺物

は不明、残存規模は長軸 1.05m、短軸 0.45m、深さ 0.1m である。

埋土は褐灰色砂質シルトに基盤層のシルトブロックや炭化物を僅かに含む。遺物は出土していない。

107土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図36)

4区中央の6 N-9 fで検出し、北側は攪乱を受け残存しない。106土坑と重複し先行する。平面形は不明、残存規模は長軸 0.5m、短軸 0.35m、深さ 0.2m である。

埋土は2層に分けられ、いずれも褐灰色砂質シルトであるが1層は細砂が混じり、1層に比べ2層はシルトが強い。

遺物は弥生土器甕口縁部細片が出土したが、図化しえなかった。

112土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図36)

4区中央の6 N-9 eで検出した。111・136・255土坑と重複し、111・255土坑より後出し、136土坑に先行する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 0.75m、短軸 0.4m、深さ 0.24m である。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は黄灰色粗砂混じり粘土質シルト、1層は暗灰色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトでいずれも基盤層の粘土質シルトブロックを含み、埋戻し土と考えられる。

遺物は弥生土器甕片が出土し、1点を図化しえた。72は甕である。内外面ともに摩滅により調整不明。

時期は出土遺物から弥生時代後期と見られる。

119土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図36、図版13)

4区中央の6 N-10 eで検出し、北半は攪乱を受け残存しない。118ピット、191・195・254土坑と重複し、いずれの遺構より後出する。平面形は不明、残存規模は長軸 1.0m、短軸 1.15m、深さ 0.4m である。

埋土は3層に分けられ、いずれも砂質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。埋土3・2層は大きなブロックを多く含み、埋戻し土と考えられる。遺物は出土していない。

120土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図36)

4区中央の6 N-10 eで検出した。平面形は円形を呈し、規模は一辺 0.93m、深さ 0.18m である。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は基盤層のシルトと極細砂混じりシルト質砂ブロックが混じり、埋戻し土と見られる。2層は褐灰色極細砂混じりシルト質砂、1層は褐灰色砂質シルトが主体とし、基盤層ブロックを少量含む。

遺物は弥生土器細片が出土したが、図化しえなかった。

121土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図37)

4区中央の6 N-10 eで検出し、110ピットと重複し先行する。平面形は不整な長方形を呈し、残存規模は長軸 0.75m、短軸 0.5m、深さ 0.15m である。

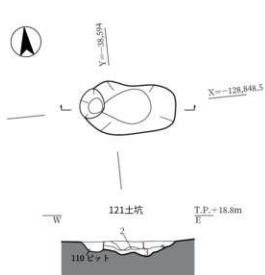
埋土は3層に分けられ、埋土3層はにぶい黄橙色砂質シルトに基盤層のシルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。2・1層は細砂混じり砂質シルトを主体とし、2層は基盤層のブロックを含む。

遺物は弥生土器甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

122土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図37)

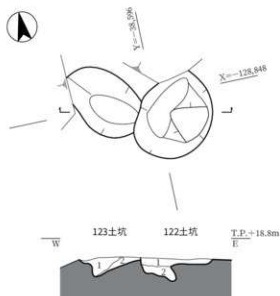
4区中央の6 N-10 eで検出し、北端は攪乱を受け残存しない。123土坑と重複し後出する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 0.95m、短軸 0.77m、深さ 0.23m である。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は褐灰色細砂から中砂混じりシルト質砂に中礫を含む。1層は灰黄褐色砂質シルトに細礫から中礫を少量含む。遺物は出土していない。



121 土坑

1. 10YR6/1 褐色 細砂混砂質シルト
2. 10YR7/1 灰白 細砂混砂質シルト
- 10YR7/2 明黄褐色 シルトブロック含む
3. 10YR7/2 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック含む

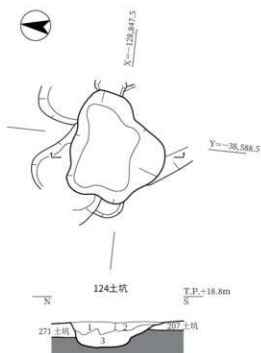


122 土坑

1. 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト
細～中粒少量含む
2. 7.5YR5/1 褐色 細～中粒混シルト質砂
中粒含む

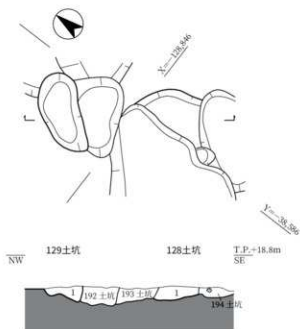
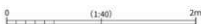
123 土坑

1. 7.5YR6/1 褐色 砂質シルト
- 10YR8/4 浅黄褐色 シルトブロック少量含む
2. 10YR6/1 褐色 極細砂混シルト質砂
- 10YR7/6 明黄褐色 シルトブロック少量含む



124 土坑

1. 7.5YR6/1 褐色 細砂混砂質シルト
2. 10YR6/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
3. 2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト
- 2.5Y6/2 灰黄・10YR7/6 明黄褐色
シルトブロック含む



128 土坑

1. 5Y4/1 灰 細砂混粘土質シルト
- 5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (5～40mm) 多量に含む

129 土坑

1. 5Y4/1 灰 細砂混粘土質シルト
- 5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (5～20mm) 多量に含む

図 37 121・122・123・124・128・129 土坑 平・断面

123土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図37)

4区中央の6N-10eで検出し、西端は攪乱を受け残存しない。122土坑と重複し先行する。平面形は不整な楕円形を呈し、残存規模は長軸0.86m、短軸0.6m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は褐灰色極細砂混じりシルト質砂、1層は褐灰色砂質シルトでいずれも基盤層のシルトブロックを少量含む。遺物は出土していない。

124土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図37)

4区中央東側の6N-9eで検出した。207・246・271土坑、267・268ピットと重複し、いずれの遺構より後出する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.26mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層は黄灰色粘土質シルトに基盤層のシルトブロックを含み、埋戻し土と見られる。2層はにぶい黄橙色砂質シルト、1層は褐灰色細砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

128土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図37)

4区中央東端の6N-9eで検出した。193・194・231土坑、248ピットと重複し、231土坑に後出し、それ以外の遺構に先行する。平面形は不明、残存規模は長軸0.67m、短軸0.38m、深さ0.1mである。

埋土は灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

129土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図37)

4区中央東側の6N-9eで検出した。192・231土坑と重複し後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.87m、短軸0.4m、深さ0.15mである。

埋土は灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

131土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図38)

4区北東端の6N-9dで検出し、調査区外に続く。172ピット・279溝と重複し、279溝に先行し、172ピットに後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.05m、短軸0.32m、深さ0.67mである。

埋土は6層に分けられる。埋土6層は基盤層のシルト質粘土ブロックの間に灰色シルト質粘土が混じり、5層は黄灰色シルト質粘土に基盤層のブロックを多く含む。いずれも埋戻し土と見られる。4層は黄灰色シルト質粘土である。断面観察から6～4層は3層堆積後に掘り込まれており、掘り直しもしくは2基の土坑が重複する可能性が考えられる。3・2層はオリーブ黒色粘土質シルトに基盤層のブロックを含み、3層はブロックが多い。1層は基盤層のブロックの間に粗砂混じりシルトが混じる。3～1層は埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

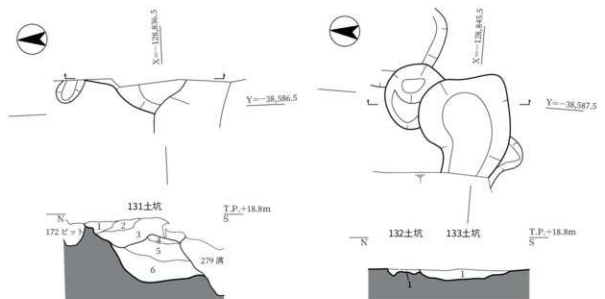
132土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図38)

4区中央東側の6N-9eで検出した。133・240土坑と重複し、133土坑に先行し、240土坑に後出する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.67m、深さ0.05mである。

埋土は灰色粗砂混じり粘土質シルトである。遺物は弥生土器壺体部片が出土したが、図化しえなかった。

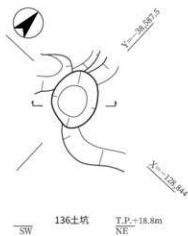
133土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図38)

4区中央東側の6N-9eで検出し、西端は攪乱を受け残存しない。132土坑、250ピットと重複し、いずれの遺構より後出する。平面形は不整な長方形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.0m、短軸



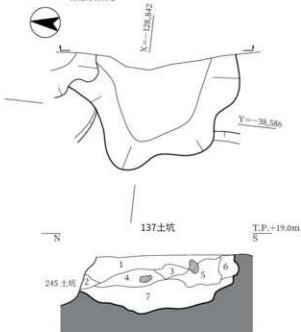
- 131土坑
- 2.5Y4/1 黄灰 シルト質粘土ブロック (20～30mm)
 - 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混シルトを含む
 - 5Y3/1 オリーブ黄 粗砂混粘土質シルト
 - 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルトブロック (10～20mm) 含む
 - 5Y3/1 オリーブ黄 粘土質シルト
 - 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混砂質シルトブロック (10～30mm) 多量に含む
 - 2.5Y4/1 黄灰 シルト質粘土
 - 2.5Y4/1 黄灰 シルト質粘土
 - 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト質粘土ブロック (10～30mm) 多量に含む
 - 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト質粘土ブロック (10～30mm)
 - 2.5Y4/1 灰 シルト質粘土を含む

- 132土坑
- 5Y5/1 灰 粗砂混粘土質シルト 炭化物粒を含む
- 133土坑
- 5Y5/1 灰 粗砂～極粗砂混砂質シルト
 - 2.5Y6/4 にぶい黄 シルトブロック (5～20mm) 多量に含む 炭化物粒を含む



- 136土坑
- 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質粘土 極粗砂を含む
 - 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト質粘土ブロック (5～10mm) 含む
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質粘土と
 - 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト質粘土ブロック (10～15mm) 混じる

0 (1:40) 2m



- 137土坑
- 2.5Y5/1 黄灰 シルト質粘土 大礫(100mm) 少量含む
 - 2.5Y7/2 灰黄 シルトブロック (5mm) 多量に含む
 - 5Y6/4 オリーブ黄 シルト質粘土ブロック 2.5Y5/1 黄灰 シルト質粘土を含む
 - 5Y6/4 オリーブ黄 シルト質粘土
 - 2.5Y5/1 黄灰 シルト質粘土 2.5Y7/2 灰黄 シルトブロック (20～30mm) 含む 大礫(100mm) 少量含む
 - 2.5Y3/2 黒剛 粘土質シルト 2.5Y7/2 灰黄 シルトブロック (30～50mm) 含む
 - 10YR5/1 暗灰 粘土質シルト
 - 2.5Y7/2 灰黄 シルトブロック (5～15mm) 含む
 - 2.5Y5/1 黄灰 シルト質粘土ブロック (30～50mm)・
 - 2.5Y3/2 黒剛 粘土質シルトブロック (20～30mm)・
 - 5Y6/4 オリーブ黄 シルト質粘土ブロック (30～100mm)・
 - 10YR5/1 暗灰 粘土質シルトが混じる

図38 131・132・133・136・137土坑 平・断面

0.95m、深さ0.1mである。

埋土は灰色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

136土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図38)

4区中央東側の6 N-9 eで検出し、111・112・146土坑と重複する。いずれの遺構より後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.62m、短軸0.48m、深さ0.17mである。

埋土は2層に分けられ、オリーブ褐色シルト質粘土に基盤層のにぶい黄色シルト質粘土ブロックが含まれ、とくに2層はブロックが多い。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

137土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図38、図版13)

4区中央東端の6 N-9 eで検出し、調査区外に続く。184・245・253・269土坑と重複し、245土坑に先行し、それ以外の土坑より後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.75m、短軸0.96m、深さ0.6mである。

埋土は7層に分けられる。埋土7層は褐灰色粘土質シルトと基盤層のシルト質粘土ブロックが混じり、

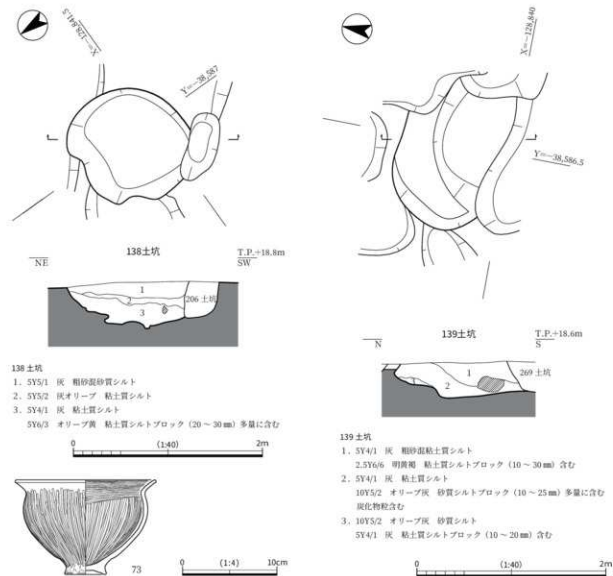


図39 138・139土坑 平・断面及び138土坑 出土遺物

6層は褐灰色粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。5層は黒褐色粘土質シルト、4層は黄灰色シルト質粘土で基盤層のブロックを含む。3層は基盤層に由来するシルト質粘土、2層は基盤層のブロックの間に黄灰色シルト質粘土を含む。1層は黄灰色シルト質粘土に基盤層のブロックを多く含む。いずれも埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器甕体部細片が出土したが、図化しえなかった。

138土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図39、図版14・23)

4区中央東側の6 N-9 eで検出した。184・206・242・269土坑と重複し、206土坑に先行し、それ以外の土坑より後出する。平面形は不整な方形を呈し、規模は一辺1.2m、深さ0.45mである。底面は凹凸が著しい。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は灰色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。2層は灰オリーブ色粘土質シルト、1層は灰色粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は3層から73の弥生土器鉢が出土した。小形の鉢で、内外面ともに細かいヘラミガキを行う。外面体部に黒斑が残る。

出土遺物から弥生時代後期末と考えられる。

139土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図39、図版14)

4区中央北東側の6 N-9 dで検出し、調査区外に続く。224・237・269・277・278土坑と重複し、224・237・269土坑に先行し、277・278土坑に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.45m、短軸1.04m、深さ0.37mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は基盤層の砂質シルトに灰色粘土質シルトブロックを含む。2層は灰色粘土質シルト、1層は灰色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、共に基盤層のブロックを含む。いずれの層も埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

141土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図40)

4区中央東側の6 N-9 eで検出し、西端は攪乱を受け残存しない。252土坑と重複し、後出する。平面形は楕円形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.6m、短軸0.82m、深さ0.2mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3・2層は暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。2層は基盤層の粘土質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。1層は黄灰色粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は埋土2層から同一個体と見られる弥生土器甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

142土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図40)

4区中央東端の6 N-9 e・fで検出し、調査区外に続く。143・178土坑と重複し後出する。平面形は不明、残存規模は一辺0.63m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも粘土質シルトを主体とし基盤層の砂質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

143土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図40)

4区中央東側の6 N-9 e・fで検出した。142・175・178・179・204・207・230土坑、180・260ピットと重複し、204・230土坑、180・260ピットより後出し、これら以外の遺構に先行する。平面形は不明、残存規模は長軸2.28m、短軸1.1m、深さ0.1mである。

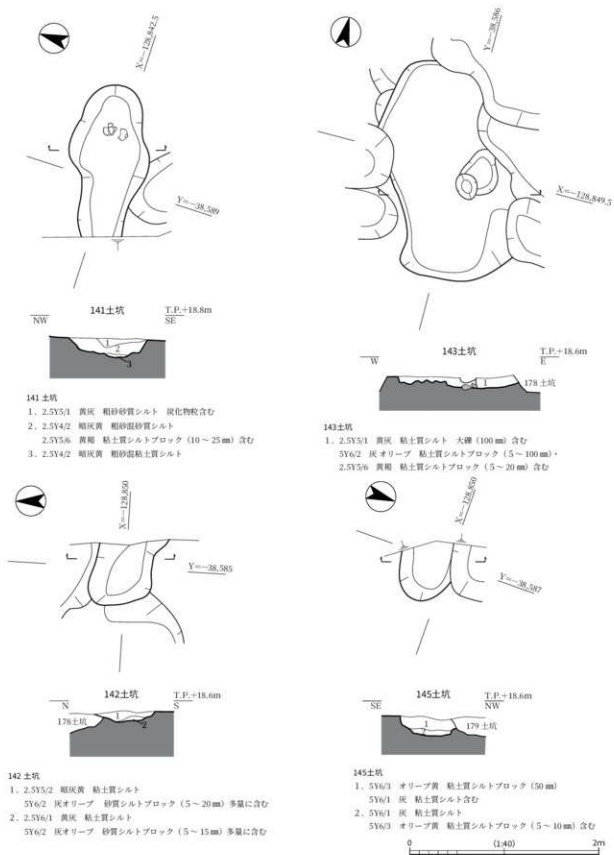
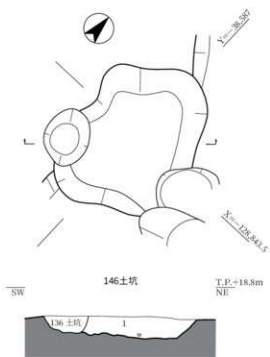
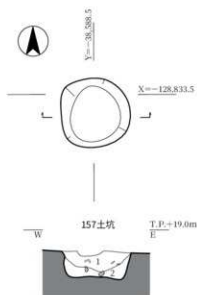


図40 141・142・143・145土坑 平・断面



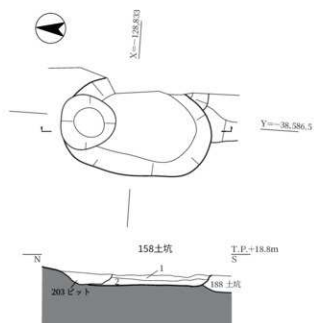
146 土坑

- 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混シルト質粘土
- 2.5Y6/4 により黄 シルト質粘土ブロック (10~80mm) 多量に含む



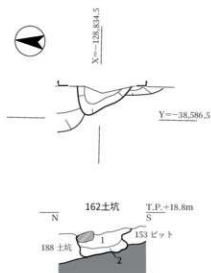
157 土坑

- 5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト 細~中礫 (10~25mm) 多量に含む
5Y4/3 明オリブ シルト質砂ブロック (5~10mm) 含む
- 10YR2/1 黒 粗砂混粘土質シルト 中礫 (20~25mm) 少量含む
5Y4/3 明オリブ シルトブロック (5mm)・2.5Y4/4 オリブ層
粘土質シルトブロック (5mm) 少量含む 炭化物粒含む



158 土坑

- 10YR4/1 褐灰 粘土質シルト
- 10YR4/1 褐灰 粘土質シルト
10YR5/6 黄褐 シルト質粘土ブロック (5~50mm) 多量に含む



162 土坑

- 10YR4/1 褐灰 粗砂混粘土質シルト
10YR5/6 黄褐 シルト質粘土ブロック (30~100mm) 多量に含む
- 10Y4/1 灰 粗砂混粘土質シルト
10YR5/6 黄褐 シルト質粘土ブロック (10~20mm) 含む

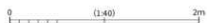


図 41 146・157・158・162 土坑 平・断面

埋土は黄灰色粘土質シルトに第7-2層の灰オリーブ色粘土質シルトブロックや基盤層の粘土質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器器種不明細片が出土したが、図化しえなかった。

145土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図40)

4区中央東側の6N-9e・fで検出し、西半は攪乱を受け残存しない。179土坑と重複し先行する。平面形は不明で、残存規模は長軸0.62m、短軸0.56m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は灰色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含む。1層は2層よりブロックが多く、基盤層のブロックの間に灰色粘土質シルトが混じる。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

146土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図41)

4区中央東側の6N-9eで検出した。136・184・196・197・240土坑と重複し、136・196・197土坑に先行し、184・240土坑に後出する。平面形は不整な方形を呈し、規模は一辺1.5m、深さ0.2mである。

埋土は黄灰色粗砂混じりシルト質粘土に基盤層のシルト質粘土ブロックを含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

157土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図41、図版14)

4区北東側の6N-9dで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺0.74m、深さ0.3mである。

埋土は2層に分けられ、黒色粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。1層は細礫から中礫を多く含み、埋戻し土と見られる。

遺物は同一個体の弥生土器壺体部片が出土したが、図化しえなかった。

158土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図41)

4区中央北東端の6N-9dで検出し、調査区外に続く。188土坑、130・203ピットと重複し、203ピットに先行し、188土坑・130ピットに後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.86m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも褐灰色粘土質シルトを主体とする。2層は基盤層のシルト質粘土ブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器器種不明細片が出土したが、図化しえなかった。

162土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図41)

4区中央北東端の6N-9dで検出し、調査区外に続く。171・188土坑、153ピットと重複し、いずれの遺構より後出する。平面形は不明、検出規模は長軸0.55m、短軸0.28m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられる。いずれも粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、基盤層のシルト質粘土ブロックを含む。1層は2層よりブロックが多い。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

164土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図42、図版14)

4区中央北東寄りの6N-9・10dで検出した。232土坑・276ピット・279溝と重複し、232土坑・279溝に先行し、276ピットに後出する。平面形は不明、残存規模は長軸2.1m、短軸1.3m、深さ0.6mである。

埋土は4層に分けられる。埋土4層は基盤層の粘土質シルトに暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトブロックを含む。3層は暗灰黄色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルト、2層は褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、いずれも基盤層のブロックを含む。4~2層は埋戻し土と見られる。1層は暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトである。主に3層から遺物が出土した。

遺物は甕片が出土し、2点を図化した。74・75は甕である。74は全体にシャープなつくりで、外面部はタキ後、細かいハケを行う。外面にススが附着し、とくに口縁部は厚い。

時期は出土遺物から庄内式期と考えられる。

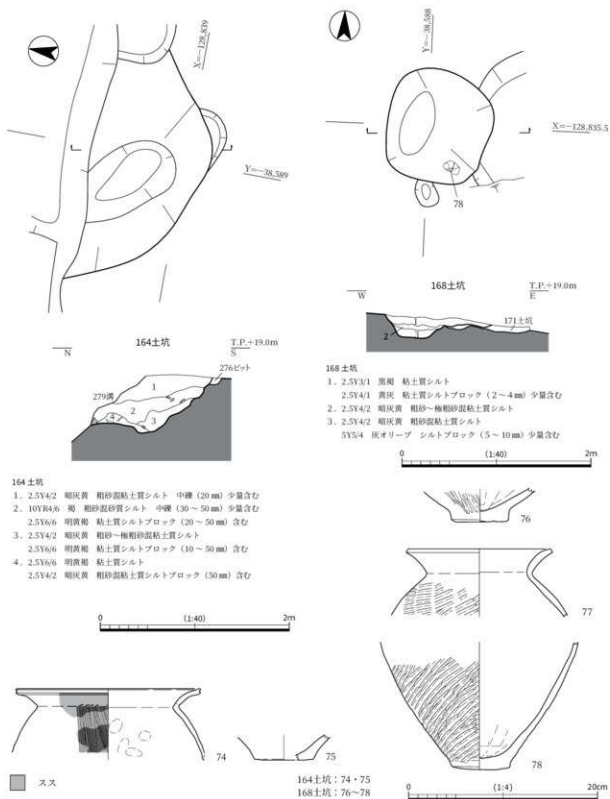


図42 164・168土坑 平・断面・出土遺物

168土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図42、図版23)

4区中央北東端の6 N-9 dで検出し、171土坑・165ピットと重複し、後出する。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.2mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層は暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のシルトブロックを少量含む。2層は粗砂から極粗砂混じり粘土質シルト、1層は黒褐色粘土質シルトに黄灰色粘土質シルトブロックを少量含む。

遺物は底面付近から弥生土器壺・甕片が出土し、3点を図化しえた。76は壺底部で内外面ともに摩滅するが、外面にミガキ痕が残存する。外面体部から底部にかけて黒斑が見られる。77・78は甕である。77は摩滅により調整不明瞭であるが、体部にタタキ痕が僅かに残存する。78は外面はタタキ後に上部はナデを行う。外面底部から体部にかけて黒斑が見られる。

時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

171土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図43)

4区中央北東端の6 N-9 dで検出し、南端は攪乱を受ける。162・168・188土坑、153・172・183ピットと重複し、いずれの遺構にも先行する。平面形は不明、残存規模は長軸1.3m、短軸1.26m、深さ0.17mである。

埋土は暗灰黄色粗砂混じり砂質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを少量含む。

遺物は弥生時代後期の甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

175土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図43)

4区中央東端の6 N-9 eで検出し、調査区外に続く。127・143・178・194・204土坑、181ピットと重複し、いずれの遺構より後出する。平面形は不明、検出した規模は長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.25mである。

埋土は2層に分けられる。埋土2層は暗灰黄色粘土質シルトと黄灰色シルト質砂が混じり、基盤層の粘土質シルトブロックが含まれ、埋戻し土と見られる。1層は黄灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

178土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図43)

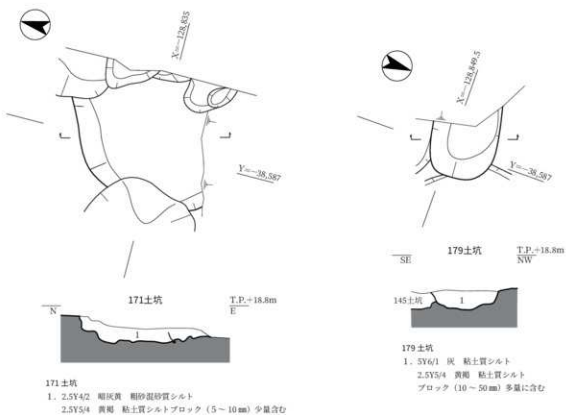
4区中央東端の6 N-9 eで検出し、調査区外に続く。142・143・175・230土坑と重複し、142・175土坑に先行し、143・230土坑に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.05m、短軸0.8m、深さ0.22mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3層は暗灰黄～黄灰色粘土質シルトと基盤層の粘土質シルトや灰オリーブ色砂質シルトブロックが混じる。2・1層は暗灰黄色粘土質シルトを主体とし、基盤層のブロックを含む。2層は基盤層や黒色粘土質シルトのブロックが多く混じる。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

179土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図43)

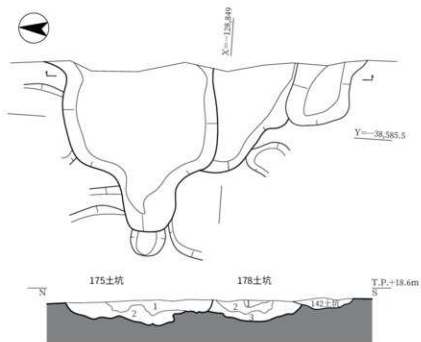
4区中央東側の6 N-9 eで検出し、西側は攪乱を受け残存しない。143・145・207土坑と重複し後出する。平面形は長方形を呈すると推定され、残存規模は長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.2mである。

埋土は灰色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含まれ、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。



171土坑

- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混砂質シルト
- 2.5Y5/4 黄褐色 粘土質シルトブロック (5～10mm) 少量含む



175土坑

- 2.5Y4/1 黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y5/2 暗灰黄 粘土質シルトと2.5Y4/1 黄褐色シルト質砂が混じる
- 2.5Y6/4 に近い黄 粘土質シルトブロック (10～80mm) 含む

178土坑

- 2.5Y4/2 暗灰黄 粘土質シルト 大礫 (80mm) 少量含む
5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルトブロック (5～40mm) 含む
- 2.5Y5/2 暗灰黄 粘土質シルト 5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルトブロック (5～40mm) 含む 炭化物粒少量含む
- 2.5Y5/2 暗灰黄～2.5Y4/1 黄褐色 粘土質シルト
5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルトブロック (5～40mm)・2.5Y6/6 明黄褐色 粘土質シルトブロック含む

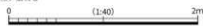


図43 171・175・178・179土坑 平・断面

185土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図44)

4区北側中央の6 N-10cで検出し、東側は攪乱を受け残存しない。平面形は不整な楕円形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.37m、短軸0.7m、深さ0.27mである。

埋土は4層に分けられる。埋土4・3層は暗灰黄色砂質シルトに基盤層のシルトブロックを含み、4層はブロックが多い。2層は黒褐色砂質シルト、1層は黒褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

187土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図44)

4区北側中央の6 N-10cで検出した。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.72m、短軸0.92m、深さ0.22mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は灰オリーブ色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。1層は暗オリーブ色粗砂混じりシルト質砂に基盤層のシルトブロックが多く含まれ、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

188土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図45)

4区中央北東端の6 N-9dで検出し、調査区外に続く。158・162・171土坑、130ピットと重複し、いずれの遺構より先行する。平面形は不明、残存規模は一辺0.5m、深さ0.32mである。

埋土は2層に分けられ、2層は基盤層のブロックでほぼ充填される。1層は褐灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のシルト質粘土ブロックが多量に含まれる。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土

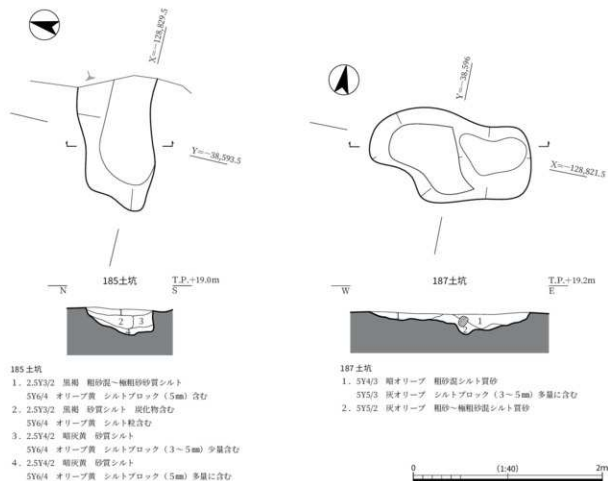


図44 185・187土坑 平・断面

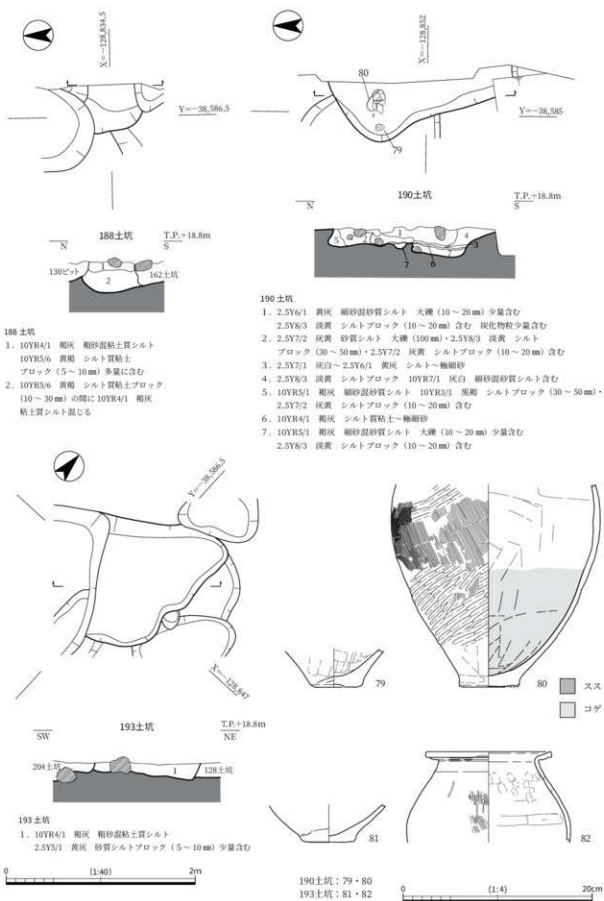


図45 188・190・193土坑 平・断面及び190・193土坑 出土遺物

していない。

190土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図45、図版14・24)

4区中央東端の6N-9fで検出し、南西端は攪乱を受け、調査区外に続く。95・281土坑と重複し、281土坑に先行し、95土坑に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.8m、短軸0.6m、深さ0.3mである。

埋土は7層に分けられる。埋土7層は褐灰色細砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。6層は褐灰色シルト質粘土と極細砂のラミナが見られる水成層である。5層は褐灰色細砂混じり砂質シルトと黒褐色シルトブロックや基盤層ブロックが混じり合い、4層は基盤層のブロックと灰白色細砂混じり砂質シルトが混じる。3層は灰白色から黄灰色シルトと極細砂のラミナが見られる水成層である。2層は灰黄色砂質シルトを主体とし、大礫や基盤層のブロックを多く含み、1層は黄灰色細砂混じり砂質シルトに基盤層のブロックを含む。埋土は埋戻し土と見られるが、6・3層の水成層を挟むことから、連続して埋戻されていないと考えられる。

遺物は弥生土器壺・壺片が出土し、2点を図化した。79・80は埋土2層から出土した壺である。79は外面タタキ後ナデ、内面はナデを行う。80は外面がタタキ後、上半にハケ後全体にナデを行う。内面は板状工具によるナデを行う。外面体部中位にスス、内面体部下半全体にコゲが付着する。

時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

193土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図45、図版24)

4区中央東側の6N-9eで検出した。127・128・129・192・194・204土坑、248ピットと重複し、192・204土坑に先行し、それ以外の遺構に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.38m、短軸1.3m、深さ0.15mである。

埋土は褐灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層の砂質シルトブロックを僅かに含む。

遺物は壺・壺片が出土し、2点を図化した。81は弥生土器壺底部で摩滅により調整不明である。82は壺である。口縁部は鋭角に「く」の字状に外反し、端部をややつまみ上げる。体部は倒卵形を呈する。調整は、剥離のため残存する箇所は僅かではあるが、外面はハケ、内面は上部がユビオサエ、下部はヘラケズリを施す。外面口縁部の一部にススが付着する。このような形態・調整は讃岐型壺の特徴と一致する。胎土からは識別できないが讃岐東部産、播磨産、もしくは在地での忠実な模倣の可能性が考えられる。

時期は出土遺物から庄内式期新段階と考えられる。

194土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図46)

4区中央東端の6N-9eで検出した。128・175・193・231土坑、248ピットと重複し、128・231土坑に後出し、それ以外の遺構に先行する。平面形は楕円形を呈すると推定され、規模は長軸1.1m、短軸0.75m、深さ0.1mである。

埋土は灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックが多く含まれ、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

195土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図46)

4区中央東側の6N-9eで検出した。119・254土坑と重複し、119土坑に先行し、254土坑に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸0.6m、短軸0.36m、深さ0.24mである。

埋土は5層に分けられる。埋土5・4層は砂質シルト、3層は褐灰色細砂混じり砂質シルトを主体とし、

いずれも基盤層のシルトブロック含む。2層にはぶい黄橙色砂質シルトに基盤層のシルトブロックや灰白色砂質シルトブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。1層にはぶい黄橙色細砂混じりシルト質砂に基盤層のブロックを少量含む。遺物は出土していない。

196土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図46)

4区中央東側の6 N-9 eで検出した。146・184・197・253土坑と重複し、197土坑に先行し、それ以外の土坑に後出する。平面形は長方形を呈し、規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.23mである。

埋土は灰黄褐色粗砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックが多く混じり、埋戻し土と見られる。

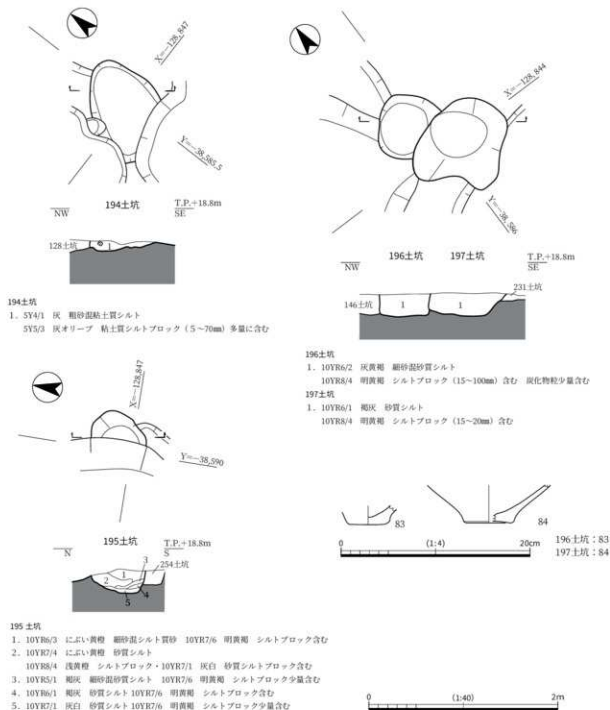


図46 194・195・196・197土坑 平・断面及び196・197土坑 出土遺物

遺物は弥生土器甕体部・底部片が出土し、1点を図化しえた。83は甕底部で摩滅により調整不明である。時期は出土遺物から弥生時代後期と見られる。

197土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図46)

4区中央東側の6N-9eで検出した。146・196・231・240・253土坑と重複し後出する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.85m、深さ0.23mである。

埋土は褐灰色砂質シルトに基盤層のシルトブロックが多く混じり、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器壺・甕片が出土し、1点を図化しえた。84は壺底部で内外面ともに摩滅により調整不明である。時期は弥生時代後期と見られる。

198土坑(付図1、図47、図版14)

4区中央北寄りの6N-10dで検出した。199土坑・279溝と重複し、199土坑・198土坑・279溝の順に掘削される。平面形は楕円形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.25m、短軸1.0m、深さ0.15mである。

埋土は灰オリブ色砂質シルトを主体とし、礫や黒色粘土質シルトブロック、基盤層のシルトブロッ

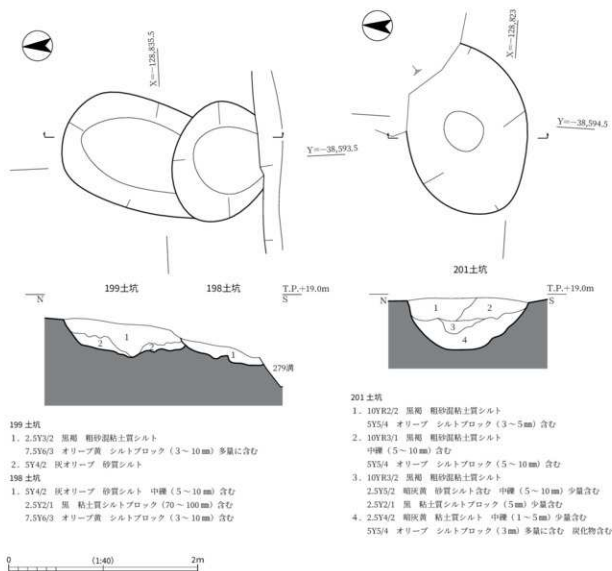


図47 198・199・201土坑 平・断面

クを含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

199土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図47、図版14)

4区中央北寄りの6N-10dで検出し、198土坑と重複し先行する。平面形は長方形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.2m、短軸1.15m、深さ0.35mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は灰オリーブ砂質シルト、1層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のシルトブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

201土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図47、図版14)

4区北側中央の6N-10cで検出し、北東端は攪乱を受ける。平面形は楕円形を呈すると推定され、規模は長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.54mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4層は暗灰黄色粘土質シルトに中礫や基盤層のシルトブロックを含む。3～1層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、基盤層のシルトブロックや中礫を含む。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

202土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図48)

4区北側中央の6N-10cで検出し、西側は攪乱を受ける。平面形は方形または長方形を呈すると推定され、検出規模は長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.42mである。

埋土は灰オリーブ色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂で礫を多量に含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

204土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図48)

4区中央東側の6N-9eで検出した。127・143・175・193・207・246土坑、181・182・205・260・261ピットと重複する。143・175・181・182・205・207・260土坑に先行し、これら以外の遺構に後出する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸2.2m、短軸1.2m、深さ0.21mである。

埋土は褐灰色粗砂混じり砂質シルトに大礫や基盤層の砂質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器壺体部片が出土したが、図化しえなかった。

206土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図48)

4区中央東側の6N-9eで検出した。138・184土坑と重複し後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.75m、短軸0.3m、深さ0.37mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層は灰色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを極少量含む。1・2層は灰オリーブ色粘土質シルトで1層は粗砂から極粗砂が混じる。遺物は出土していない。

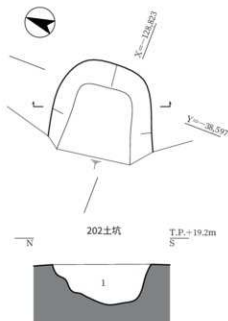
207土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図48)

4区中央東側の6N-9eで検出し、南西隅は攪乱を受ける。124・179・204・260土坑、182・268ピットと重複し、204土坑に後出し、それ以外の遺構に先行する。平面形は不明、残存規模は長軸1.9m、短軸1.05m、深さ0.1mである。

埋土は基盤層の砂質シルトに多量に褐灰色粗砂混じり砂質シルトブロックや大礫を含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

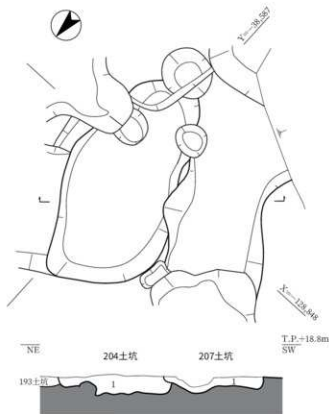
211土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図48)

4区中央の6N-10fで検出した。216土坑、209・218ピットと重複し209ピットに先行し、これ以外の遺構に後出する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸1.03m、深さ0.15mである。



202土坑

1. 5Y4/2 灰オリブ 粗砂～極粗砂質シルト質砂
中～大粒 (30～80mm) 多量に含む

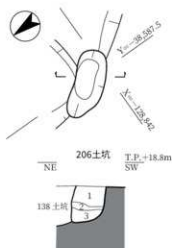


204土坑

1. 10YR4/1 褐灰 粗砂混砂質シルト 大粒 (200～300mm) 含む
2. 5Y5/6 黄褐 砂質シルトブロック (10～30mm) 多量に含む

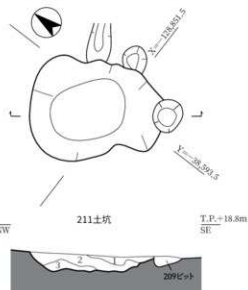
207土坑

1. 2.5Y5/6 黄褐 砂質シルト 大粒 (200～300mm) 含む
- 10YR4/1 褐灰 粗砂混砂質シルトブロック (30～50mm) 多量に含む



206土坑

1. 5Y4/2 灰オリブ 粗砂～極粗砂混粘土質シルト
2. 5Y5/2 灰オリブ 粘土質シルト
3. 5Y5/1 灰 粘土質シルト
- 5Y6/3 オリブ黄 粘土質シルトブロック (5mm) ごく少量含む



211土坑

1. 5Y5/1 灰 粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y5/6 黄褐 シルトブロック (3～5mm) 含む
2. 5Y4/2 オリブ褐 粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y5/6 黄褐 シルトブロック (5～15mm) 多量に含む
3. 5Y5/1 灰 粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y5/6 黄褐 シルトブロック (3～20mm) 多量に含む



図48 202・204・206・207・211土坑 平・断面

埋土は3層に分けられ、灰色やオリーブ褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし、基盤層のシルトブロックを含み、とくに3・2層はブロックが多い。埋戻し土と見られる。

遺物は弥生時代後期の同一個体と見られる甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

212土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図49)

4区中央の6 N-10 fで検出した。101・226ピットと重複し、101ピットに先行し、226ピットに後出する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸1.57m、短軸0.85m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のシルト質粘土ブロックを含み、1層は黄褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質粘土に基盤層のこぶし大のブロックを多く含む。いずれも埋戻し土と見られる。

遺物は弥生時代後期の甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

224土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図49)

4区中央北東端の6 N-9 d・eで検出し、調査区外に続く。139・237・245・269土坑と重複し、237土坑に先行し、その他の土坑に後出する。平面形は不明、検出した規模は長軸0.9m、短軸0.25m、深さ0.56mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4・3層はオリーブ黒色シルト質粘土に黒色粘土質シルトブロックや基盤層のシルト質粘土ブロックを含む。2層は黒褐色粗砂混じりシルト質粘土に基盤層のブロックを多量に含む。4～2層は埋戻し土と見られる。1層は褐灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のブロックを極少量含む。遺物は出土していない。

232土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図49)

4区中央北東側の6 N-9 dで検出した。164・235・277土坑、225・279溝と重複し、225・279溝に先行し、他の土坑に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸0.8m、短軸0.65m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層のシルトブロックの間に褐灰色細砂混じり砂質シルトが混じり、1層は褐灰色細砂混じり砂質シルトに基盤層のブロックを多量に含む。ともに埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

235土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図49)

4区中央北東側の6 N-9 dで検出した。232・236・277土坑、225溝と重複し、232土坑・225溝に先行し、236・277土坑に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸0.48m、短軸0.33m、深さ0.22mである。

埋土は黒褐色粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含み、とくに下部にブロックが多い。遺物は出土していない。

236土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図49)

4区中央北東側の6 N-9 dで検出した。235・237・277土坑、225溝と重複し、277土坑に後出し、それ以外の遺構に先行する。平面形は方形を呈すると推定され、残存規模は長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.13mである。

埋土は黒褐色粘土質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。遺物は出土していない。

237土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図50)

4区中央北東端の6 N-9 dで検出し、調査区外に続く。139・224・236土坑、225・279溝と重複し、225・279溝に先行し、これ以外の遺構に後出する。平面形は不明、残存規模は長軸1.3m、短軸0.46m、

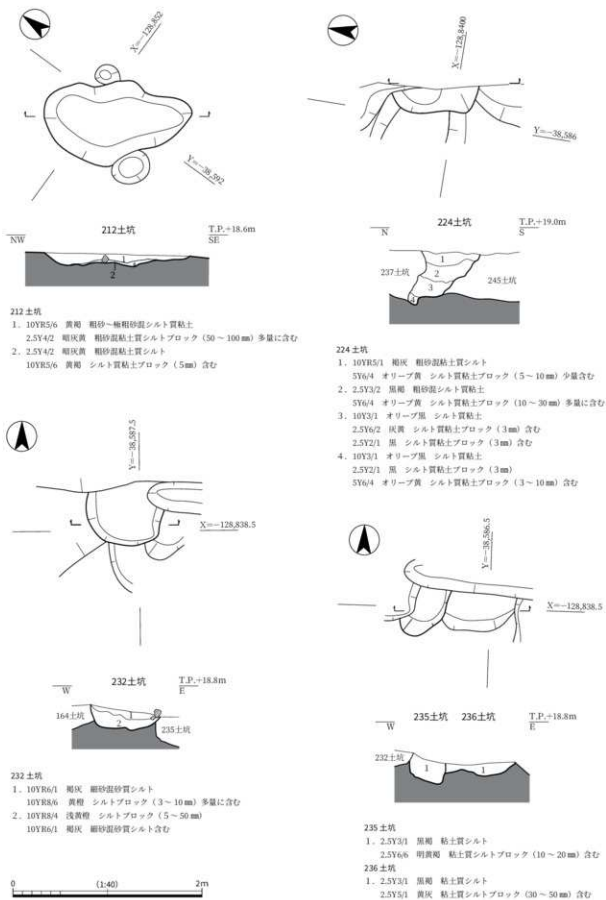
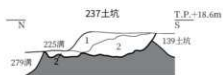
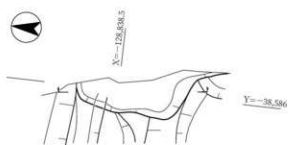


図49 212・224・232・235・236土坑 平・断面



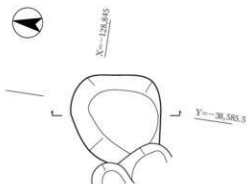
237 土坑

1. 10YR4/1 褐灰 細砂混砂質シルト 炭化物粒含む
10YR8/1 灰白 シルトブロックを少量含む
2. 7.5YR6/1 褐灰 細砂混砂質シルト
10YR8/2 灰白 シルトブロック (10~50mm) 含む



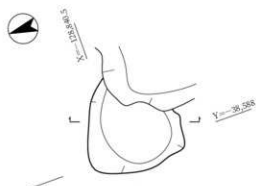
240 土坑

1. 2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト
2.5Y6/2 灰黄 粗砂混シルト質粘土ブロック (5~50mm) 含む
2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質粘土ブロック (10~60mm) と
2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト混じる



241 土坑

1. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混粘土質シルト 大礫 (100~150mm) 少量含む
2.5Y6/1 灰黄 粘土質シルトブロック (3~20mm) 多量に含む 炭化物粒含む
2. 5Y6/3 オリーブ黄 粗砂~極粗砂混シルト質砂ブロック
2.5Y4/1 黄灰 粗砂混粘土質シルト含む



242 土坑

1. 5Y4/1 灰 粗砂混シルト質粘土
5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (5~20mm) 多量に含む
2. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂~極粗砂混粘土質シルト
5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック (10mm) 多量に含む

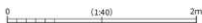


図 50 237・240・241・242 土坑 平・断面

深さ 0.25mである。底面は凹凸が見られる。

埋土は2層に分けられ、いずれも褐灰色細砂混じり砂質シルトを主体とする。2層は基盤層のブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生時代後期の甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

240土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図50、図版15)

4区中央北東側の6 N-9 eで検出した。132・146・197・231土坑と重複し、231土坑に後出し、これ以外の遺構に先行する。平面形は不明、残存規模は長軸1.18m、短軸0.67m、深さ0.18mである。

埋土は2層に分けられ、黄灰色粘土質シルトに基盤層のシルト質粘土ブロックを多く含み、2層は1層よりブロックをより多く含む。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

241土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図50、図版15)

4区中央北東側の6 N-9 eで検出した。129・192・231土坑と重複し、231土坑に後出し、それ以外の土坑に先行する。平面形は不整な方形を呈し、検出規模は一辺0.95m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層の粗砂から極粗砂混じりシルト質砂ブロックの間に黄灰色粗砂混じり粘土質シルトが混じる。1層は黄灰色粗砂混じり粘土質シルトに黄灰色粘土質シルトブロックを多量に含む。ともに埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

242土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図50、図版15)

4区中央北東側の6 N-9 eで検出し、138土坑と重複し先行する。平面形は不整な方形を呈すると推定され、規模は一辺1.0m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は黄灰色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルト、1層は灰色粗砂混じりシルト質粘土で、いずれも基盤層の粘土質シルトブロックを多量に含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器壺・甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

251土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図51)

4区中央北東側の6 N-9 eで検出し、111・252土坑と重複し後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.63m、短軸0.45m、深さ0.12mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層の粗砂混じり粘土質シルトに黒褐色粗砂混じり粘土質シルトブロックを含む。1層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

252土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図51)

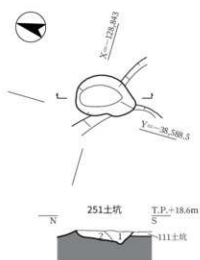
4区中央北東側の6 N-9 eで検出した。111・141・251・255土坑と重複する。141・251土坑に先行し、それ以外の遺構に後出する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.67m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は黄灰色粗砂混じり粘土質シルト、1層は黒褐色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトと褐色粗砂混じり粘土質シルトブロックが混じる。いずれも埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器器種不明細片が出土したが、図化しえなかった

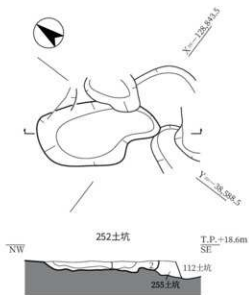
269土坑(土坑・ピット群1) (付図1、図51)

4区中央北東側の6 N-9 d・eで検出した。137・138・139・184・224・245土坑と重複する。139・184土坑に後出し、それ以外の遺構に先行する。平面形は楕円形を呈すると推定され、残存規模は長軸2.04m、短軸0.97m、深さ0.3mである。



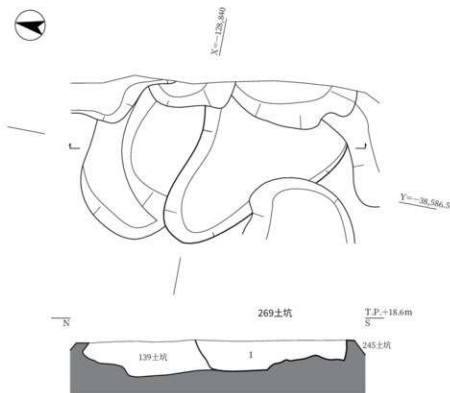
251土坑

- 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y6/6 明黄褐色 粗砂混粘土質シルトブロック (10~20mm) 含む
- 2.5Y6/6 明黄褐色 粗砂混粘土質シルト
- 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂混粘土質シルト・
- 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混粘土質シルトブロック含む



252土坑

- 10YR3/1 黒褐色 粗砂~極粗砂混粘土質シルトと
10YR4/6 褐色 粗砂混粘土質シルトブロック散じる
- 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混粘土質シルト



269土坑

- 5Y4/1 灰 粗砂混粘土質シルト
- 5Y6/4 オリーブ黄 粘土質シルトブロック (10~30mm) 多量に含む

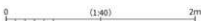
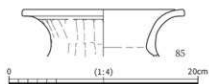


図51 251・252・269土坑 平・断面及び269土坑 出土遺物

埋土は灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器壺が出土し、1点を図化しえた。85は広口壺である。頸部は短く、大きく外反し、口縁端部に面をもつ。調整は摩滅により不明である。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

270土坑(土坑・ピット群1)(付図1、図52)

4区中央南東側の6N-9gで検出し、北半は攪乱を受け残存しない。平面形は不明、残存規模は長軸1.35m、短軸0.6m、深さ0.26mである。

埋土は4層に分けられ、埋土4層は基盤層の砂質シルトを主体とし、褐灰色砂質シルトや基盤層のシルトのブロックを含む。3層は褐灰色中砂混じり砂質シルトに基盤層のブロックを少量含む。2層は基盤層を主体とし、にぶい黄褐色砂質シルトブロックを含む。1層はにぶい黄褐色中砂混じり砂質シルトに灰白色極細砂ブロックを含む。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

280土坑(付図1、図52、図版15)

4区中央北西側の6N-10dで検出し、北側は攪乱を受け残存しない。平面形は不明、残存規模は長軸1.0m、短軸0.4m、深さ0.33mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも黄灰色粗砂混じり砂質シルトを主体とする。埋土1層は基盤層の砂質シルトや黒褐色ブロックを含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

286土坑(付図1、図52)

1区北側中央の6L-8iで検出した。平面形は不整な方形を呈し、規模は一辺1.2m、深さ0.07mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂、1層は黒色粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

297土坑(付図1、図52)

2区南西側の6N-9aで検出し、北側は攪乱を受け残存しない。平面形は方形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.2m、短軸0.3m、深さ0.12mである。

埋土は暗オリーブ色砂質シルトに大礫や基盤層のシルトブロックを含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

298土坑(付図1、図53、図版15)

2区南西側の6N-9・10bで検出し、北端の上部は攪乱を受ける。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.5m、短軸0.85m、深さ0.17mである。

埋土は2層に分けられる。埋土2層はオリーブ黒色粗砂混じり粘土質シルトに大礫や暗オリーブ褐色粗砂混じり砂質シルトを含み、1層は暗オリーブ褐色粗砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックを多く含む。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

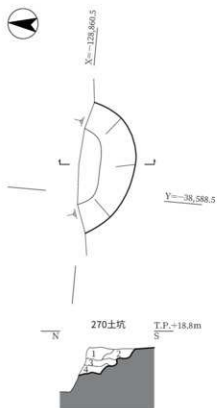
301土坑(付図1、図53、図版15)

2区南東側の6N-8bで検出し、攪乱を受け南西部のみ残存する。平面形は不明、残存規模は一辺0.7m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられる。いずれも粗砂混じりシルト質砂に礫を多く含む。遺物は出土していない。

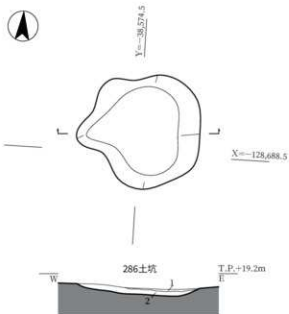
302土坑(付図1、図53)

2区南東側の6N-8aで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.02m、短軸0.7m、深さ0.1



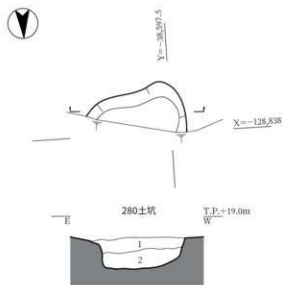
270土坑

1. 10YR7/2 におい黄橙 中砂混砂質シルト 10YR8/1 灰白 極細砂ブロック含む
2. 10YR8/4 浅黄橙 細砂混砂質シルト
3. 10YR7/2 におい黄橙 砂質シルトブロック含む
4. 7.5YR5/1 褐灰 中砂混砂質シルト
5. 10YR8/1 灰白 シルトブロック少量含む
6. 2.5Y7/3 浅黄 砂質シルト
7. 7.5YR6/1 褐灰 砂質シルトブロック・10YR8/4 浅黄橙 シルトブロック含む



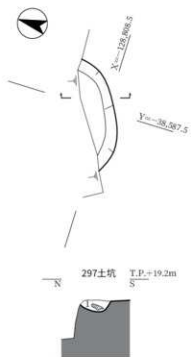
286土坑

1. 10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂〜極粗砂混シルト質砂



280土坑

1. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混シルト質砂
2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質砂含む
3. 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルトブロック (30mm) 含む
4. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混砂質シルト
5. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質砂ブロック (5〜10mm) 含む

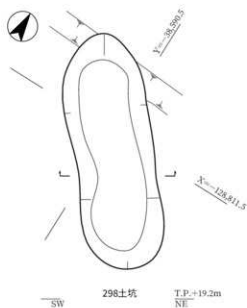


297土坑

1. 5Y4/3 暗オリーブ 砂質シルト 大塊含む
2. 5Y6/4 オリーブ黄 シルトブロック (3〜5mm) 含む



図 52 270・280・286・297 土坑 平・断面

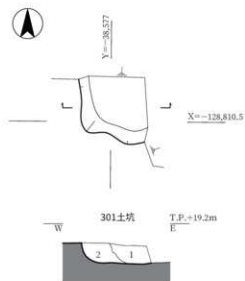


298土坑 T.P.+19.2m



298土坑

- 2.5Y3/3 暗オリーブ黒 粗砂混砂質シルト
- 5Y6/4 オリーブ黄 シルトブロック(2~4mm)多量を含む
- 7.5Y3/2 オリーブ黒 粗砂混粘土質シルト 大塊含む
- 2.5Y3/3 暗オリーブ黒 粗砂混砂質シルト含む

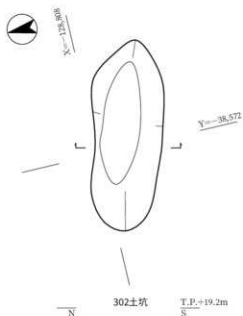


301土坑 T.P.+19.2m



301土坑

- 2.5Y4/3 灰黄 粗砂混シルト質砂 細~中粒(4~15mm)多量を含む
- 5Y4/3 暗オリーブ黒 粗砂混シルト質砂 中粒(10~30mm)多量を含む 炭化物極少量含む

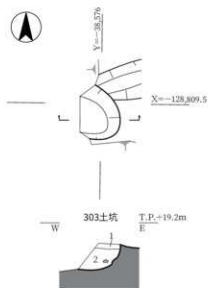


302土坑 T.P.+19.2m



302土坑

- 5Y4/2 灰オリーブ シルト混中~粗砂 中~大塊(60~100mm)含む



303土坑 T.P.+19.2m



303土坑

- 2.5Y2/1 黒 粗砂混シルト質砂 細粒(2~4mm)多量を含む
- 2.5Y3/1 黒黒 粗砂混シルト質砂 細~中粒(3~20mm)多量を含む



図53 298・301・302・303土坑 平・断面

mである。

埋土は灰オリーブ色シルト混じり中砂から粗砂で中礫や大礫を含む。遺物は出土していない。

303土坑(付図1、図53)

2区南東側の6 N-8 aで検出し、西側は攪乱を受け残存しない。307溝と重複し、後出する。平面形は不明、残存規模は長軸0.57m、短軸0.42m、深さ0.27mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも粗砂混じりシルト質砂を主体とし、2層は細礫から中礫、1層は細礫を多く含む。遺物は出土していない。

304土坑(付図1、図54、図版15)

2区南東側の6 N-8 bで検出した。平面形はややいびつな円形を呈し、規模は長軸1.37m、短軸1.18

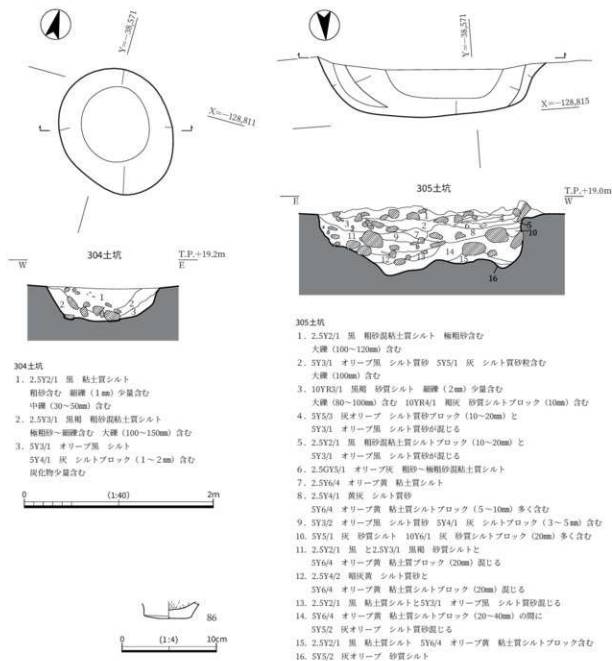


図54 304・305土坑 平・断面及び305土坑 出土遺物

m、深さ0.35mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層はオリブ黒色シルトに灰色シルトブロックを含む。上部の一部には灰色シルトとオリブ黒色シルトの薄層が互層に堆積する。2層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトに極粗砂から細礫や大礫を多く含む。1層は黒色粘土質シルトで粗砂や細礫を含む。3層堆積後、放置された期間があったと考えられ、その後2・1層で埋戻される。

遺物は須恵器甕体部片・土師器甕片が出土したが、図化しえなかった。

305土坑(付図1、図54、図版15)

2区南東隅の6N-7・8bで検出し、調査区外に続く。平面形は不明、検出規模は長軸2.33m、短軸0.5m、深さ0.7mである。

埋土は16層に分けられ、全体に10～20cmの大礫が多く含まれる。下部の埋土16～4層は主にブロック土が多く混じる層が主体となる。14・11・8層は灰・黒色砂質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含む。13・5層は第6～4層に由来するブロックとオリブ黒色シルト質砂ブロックが混じる。6・7層は基盤層のブロック層である。上部の3～1層は、3層が黒褐色砂質シルト、2層がオリブ黒色シルト質砂、1層が第6～4層に由来する黒色粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。

遺物は弥生土器壺・甕片が出土し、1点を図化しえた。86は甕底部である。外面はナデ、内面はユビオサエ後ナデである。

時期は弥生時代後期と考えられる。

308土坑(付図1、図55)

2区北西側の7M-1hで検出し、西側は攪乱を受け残存しない。313土坑と重複し後出する。平面形は不明、残存規模は長軸0.93m、短軸0.43m、深さ0.1mである。

埋土は第6～4層に由来する黒色中砂混じり粘土質シルトに黒褐色粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

309土坑(付図1、図55)

2区北西側の7M-1hで検出し、西側は攪乱を受け残存しない。310土坑と重複し後出する。平面形は長方形を呈すると推定され、残存規模は長軸0.92m、短軸0.82m、深さ0.1mである。

埋土は第6～4層に由来する黒色粗砂混じり粘土質シルトに黒色粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

310土坑(付図1、図55)

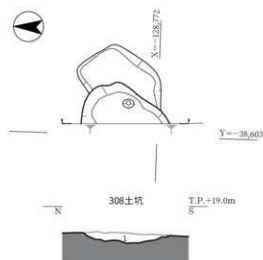
2区北西側の7M-1hで検出し、南・西側は攪乱を受け残存しない。309土坑と重複し先行する。平面形は不明、残存規模は一辺0.98m、深さ0.07mである。

埋土は2層に分けられ、いずれもオリブ黒色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし第6～4層に由来するブロックを含む。遺物は出土していない。

311土坑(付図1、図55・56、図版16・24)

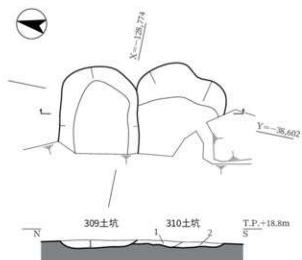
2区北西側の6・7M-10・1iで検出し、東側は攪乱を受け残存しない。平面形は不明、残存規模は長軸2.8m、短軸2.3m、深さ0.35mである。底面は凹凸が見られる。

埋土は5層に分けられる。埋土5層はオリブ黒色砂質シルトを主体とし、第7～1層や基盤層の粘土質シルトブロックが混じる。4～2層は第6～4層に由来する黒色粘土質シルトを主体とし、3層には基盤層のブロックを含む。1層は暗灰黄色シルト質砂に第6～4層に由来するブロックを含む。いず



308土坑

1. 2.5V2/1 黒 中砂混粘土質シルト
- 2.5Y3/1 黒褐 粘土質シルトブロック (5~15mm) 含む

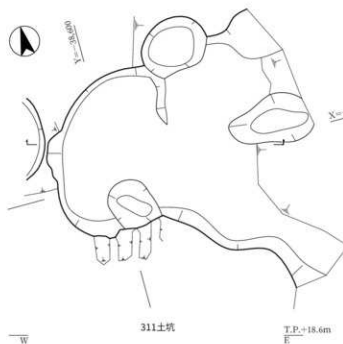


309土坑

1. 5Y2/1 黒 粗砂混粘土質シルト
- 7.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (5~10mm) 含む

310土坑

1. 5Y3/1 オリーブ色 粗砂混シルト質砂
- 7.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (5mm) 含む
2. 5Y3/1 オリーブ色 粗砂混シルト質砂
- 7.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (3mm) 少量含む



311土坑

T.P.+18.6m

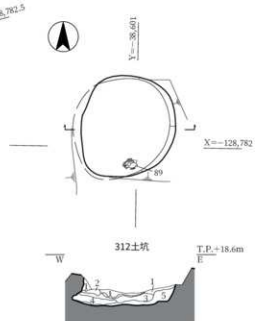
312土坑



311土坑

1. 2.5V5/2 暗灰黄 シルト質砂
- 2.5V2/1 黒 粘土質シルトブロック (5mm) 含む
2. 2.5V3/1 黒 中砂混粘土質シルト
3. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
- 10Y6/1 灰 粘土質シルトブロック (10~20mm) 含む
4. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
5. 7.5Y3/1 オリーブ色 砂質シルト
- 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (20~30mm) と
- 10Y6/1 灰 粘土質シルトブロック (10~30mm) と
- 2.5V4/1 黄灰 粘土質シルトブロック (30~50mm) が混じる

0 (1:40) 2m



312土坑

T.P.+18.6m

312土坑

1. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
- 5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルトブロック (10mm) 含む
2. 5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルト
3. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
- 10YR4/1 褐灰 粘土質シルトブロック (20~30mm) 多量に含む
4. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
- 5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルトブロック (20~30mm) 少量含む
- 10YR4/1 褐灰 粘土質シルトブロック (30mm) ごく少量含む
5. 7.5Y6/1 灰オリーブ 粘土質シルト
- 5Y6/1 灰 砂質シルトブロック (20~30mm) 多量に含む

図55 308・309・310・311・312土坑 平・断面

れも埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器壺・高杯・甕片が出土し、2点を図化しえた。87は高杯脚部である。外面はハケ後ヘラミガキ、端面は強い横方向のナデ、内面はしぼり痕が残る。88は甕で外面はタタキ後、口縁部は横方向のナデを行う。

時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

312土坑(付図1、図55・56、図版16・24)

2区北西側の7M-1 i で検出し、71・311土坑に隣接する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺1.0～1.07m、深さ0.28mである。

埋土は5層に分けられ、埋土5層は基盤層の粘土質シルトに灰色砂質シルトブロックを多く含む。4・3・1層は第6-4層に由来する黒色粘土質シルトを主体とし、基盤層のブロックを含む。とくに3層はブロックを多量に含む。2層は基盤層に由来する砂質シルトである。すべて埋戻し土と見られる。

遺物は3層中から89の弥生土器甕が出土した。小形の甕で外面体部はハケ後ナデ、内面はナデ。外面体部下半から底部にかけて黒斑が見られる。

時期は出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

313土坑(付図1、図57)

2区北西側の7M-1 h で検出し、308土坑と重複し先行する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも砂質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

314土坑(付図1、図57、図版16)

2区北西側の7M-1 i で検出し、東半は攪乱を受け残存しない。平面形は不明、残存規模は長軸0.75m、短軸0.55m、深さ0.22mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層は灰色シルト質砂を主体とし、第6-4層に由来する黒色粘土質シルトと基盤層の粘土質シルトブロックを含み、2層は黒色粘土質シルトを主体とし基盤層のブロックを含む。1層は極細砂と粘土質シルトの薄層がラミナ状に堆積する水成層である。3・2層で埋戻した後放置された期間があると考えられる。遺物は出土していない。

315土坑(付図1、図57、図版16)

2区西側中央の6・7M-10・1 i で検出した。324土坑・90溝と重複し、いずれの遺構より後出する。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.23m、短軸1.13m、深さ0.25mである。

埋土は4層に分けられる。埋土4層は褐灰色シルト質砂を主体とし、基盤層のシルト質砂ブロックを含み、3層は褐灰色粘土質シルトを主体とし、黒褐色粘土質シルトブロックを含む。4・3層は埋戻し土と見られ、その上層の黄灰色シルトの水成層を挟み、1層の褐灰色粘土質シルトで埋まる。

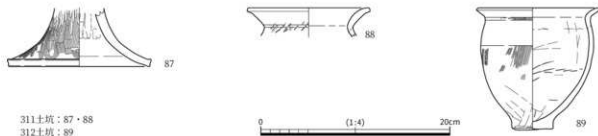
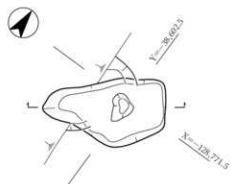


図56 311・312土坑 出土遺物

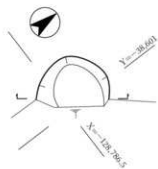


313 土坑 T.P.+19.0m
E



313 土坑

1. 2.5Y2/1 黒 砂質シルト
2. 2.5Y3/2 暗褐色 砂質シルト
- 2.5Y2/1 黒 砂質シルトブロック (3mm) 含む

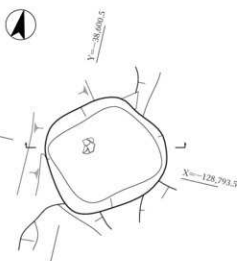


314 土坑 T.P.+18.4m
E



314 土坑

1. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト 7.5Y6/1 灰 極細砂
2. 2.5Y2/1 黒 粘土質シルト
- 7.5GY 緑灰 粘土質シルトブロック (5~20mm) 含む
3. 7.5Y6/1 灰 シルト質砂
- 7.5GY 緑灰 粘土質シルトブロック (10~20mm) 含む
- 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック (5~15mm) 少量含む

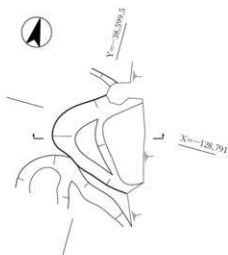


315 土坑 T.P.+18.4m
E



315 土坑

1. 10YR4/1 暗灰 粘土質シルト
2. 2.5Y4/1 黄灰 シルト
3. 10Y4/1 暗灰 粘土質シルト
- 10YR3/1 紫褐色 粘土質シルトブロック (20~30mm) 含む
4. 10YR4/1 暗灰 シルト質砂
- 5GY6/1 オリーブ灰 シルト質砂ブロック (5~20mm) 含む



317 土坑 T.P.+18.4m
E



317 土坑

1. 10YR4/1 暗灰 粘土+10YR5/1 暗灰 シルト+
10YR5/1 暗灰 極細砂
2. 5Y4/1 灰 砂質シルト
- 10Y6/1 灰 粘土質シルトブロック (10~20mm) 含む



図 57 313・314・315・317 土坑 平・断面

遺物は弥生土器壺・甕の体部片が出土したが、図化しえなかった。

317土坑(付図1、図57、図版16)

2区中央西側の6M-10j、90溝底面で検出し、東半は攪乱を受ける。平面形は不明、残存規模は長軸0.97m、短軸0.87m、深さ0.3mである。底面は西から東へ段状に削割されている。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は灰色砂質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含む。1層は90溝に堆積した層と同様の粘土・シルト・極細砂の薄層が互層に堆積する水成層である。そのため溝と土坑は同時併存したと考えられる。

遺物は出土していないが、90溝の埋没時期から弥生時代後期後半と考えられる。

318土坑(付図1、図58)

2区中央西側の6・7N-10・1aで検出し、西半は攪乱を受け残存しない。319・325土坑、90溝と重複し先行する。平面形は不明、残存規模は長軸1.95m、短軸0.65m、深さ0.23mである。

埋土は2層に分けられ、灰色シルト質砂を主体とする。埋土2層は基盤層の粘土質シルトブロックが多く混じり、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

319土坑(付図1、図58)

2区中央西側の6・7N-10・1aで検出した。318・320・325土坑と重複し、325土坑に先行し、318・320土坑に後出する。平面形は不整な長方形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.26mである。

埋土は灰色シルト質砂に中礫や基盤層の粘土質シルトブロックが多く混じる埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

320土坑(付図1、図58)

2区中央西側の6M-10j、6N-1aで検出し、319土坑と重複し先行する。平面形は不整な長方形を呈し、残存規模は長軸1.6m、短軸1.15m、深さ0.14mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3・2層はシルト質砂に基盤層の粘土質シルトブロックや中礫を多く含み、1層は灰オリーブ色粘土質シルトに中礫を含む。いずれも埋戻し土と見られる。

遺物は弥生土器甕体部・底部片が出土し、そのうち1点を図化しえた。90は甕底部で摩擦のため調整不明である。

時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

324土坑(付図1、図58)

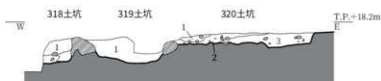
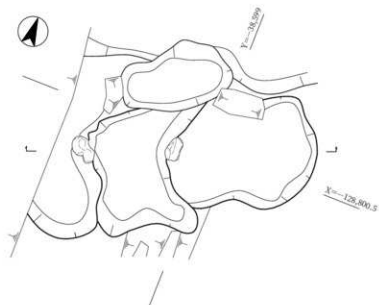
2区中央西側の6M-10jで検出した。315土坑・90溝と重複し、315土坑に先行し90溝に後出する。平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸0.75m、短軸0.7m、深さ0.25mである。

埋土は2層に分けられる。埋土2層は灰色砂質シルトを主体とし、基盤層の粘土質シルトブロックやオリーブ黒色砂質シルトブロックを多く含み、埋戻し土と見られる。1層は灰色粗砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

325土坑(付図1、図58、図版16)

2区中央西側の6M-10j・6N-1aで検出し、西・南東端の一部は攪乱を受ける。318・319土坑、90溝と重複し後出する。平面形は不整な長方形を呈し、残存規模は長軸1.18m、短軸0.65m、深さ0.37mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層の粘土質シルトブロックの間にオリーブ黒色砂質シルトや



318土坑

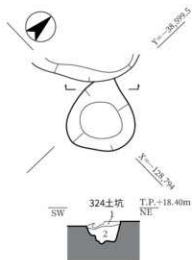
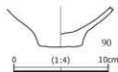
1. 5Y4/1 灰 シルト質砂 SGY6/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック (5mm) 少量含む
5Y2/1 黒 シルトブロック (3~5mm) 含む
2. 5Y4/1 灰 シルト質砂 SGY6/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック (20~30mm) 多量に含む

319土坑

1. 10Y4/1・5Y3/1 灰 シルト質砂 SGY5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック・中礫 (20~25mm) 含む

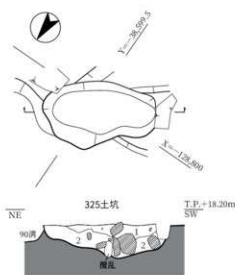
320土坑

1. 5Y5/2 灰オリーブ 粘土質シルト 5Y6/1 灰 シルト粒・中礫 (30mm) 含む
2. 2.5Y2/1 黒・5Y4/1 灰 シルト質砂 中礫 (20~30mm) ・SGY5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック (10~15mm) 含む
3. 5Y5/1 灰 シルト質砂 中礫 (20~30mm) ・SGY5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック (10~15mm) 含む



324土坑

1. 5Y5/1 灰 粗砂質シルト質砂 10Y5/1 灰 砂質シルト粒含む
2. 7.5Y4/1 灰 砂質シルト
5Y3/1 オリーブ黒 砂質シルトブロック (5mm) ・10Y5/1 灰 砂質シルトブロック (20~30mm) ・SGY5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック (10~20mm) 多量に含む



325土坑

1. 10YR4/1 黒灰 砂質シルト 大礫 (100mm) 含む
2.5Y2/1 黒 砂質シルトブロック含む
2. SGY5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック (10~20mm) の間に 5Y3/1 オリーブ黒 砂質シルトブロック混じる 大礫 (100~200mm) 含む

図 58 318 ~ 320・324・325 土坑 平・断面及び 320 土坑 出土遺物

大礫を含む。1層は褐灰色砂質シルトに黒色砂質シルトブロックや大礫を含む。いずれも埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

327土坑(付図1、図59)

2区南東側の6N-8bで検出し、上部は攪乱により削平される。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.53m、深さ0.15mである。

埋土は灰色粘土質シルトと基盤層の粘土質シルトブロックが混じる。

遺物は弥生土器細片が出土したが、図化しえなかった。

328土坑(付図1、図59、図版16)

2区南東側の6N-8bで検出し、北西側は攪乱を受け残存しない。平面形は長方形を呈すると推定され、残存規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.1mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3層はオリーブ黒色砂質シルト、2層は灰色シルト質砂、1層は黄灰色砂質シルトである。いずれの層にも基盤層の粘土質シルトブロックを含み、埋戻し土と見られる。遺物は出土していない。

52ピット(付図1、図60)

3区北側の7M-1i、20土坑に隣接し検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径0.25m、深さ0.1mである。

埋土は黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。遺物は出土していない。

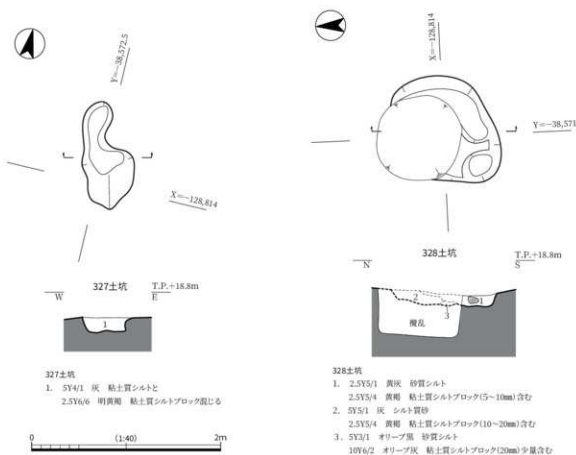


図59 327・328土坑 平・断面

54ピット(付図1、図60)

3区北西端の7M-2 i で検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 0.42m、短軸 0.25m、深さ 0.12mである。

埋土は2層に分けられ、いずれもオリープ黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。1層は黒色粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

79ピット(付図1、図60)

3区南側中央付近の7N-1 e で検出し、上部を攪乱により削平される。平面形は楕円形を呈し、規

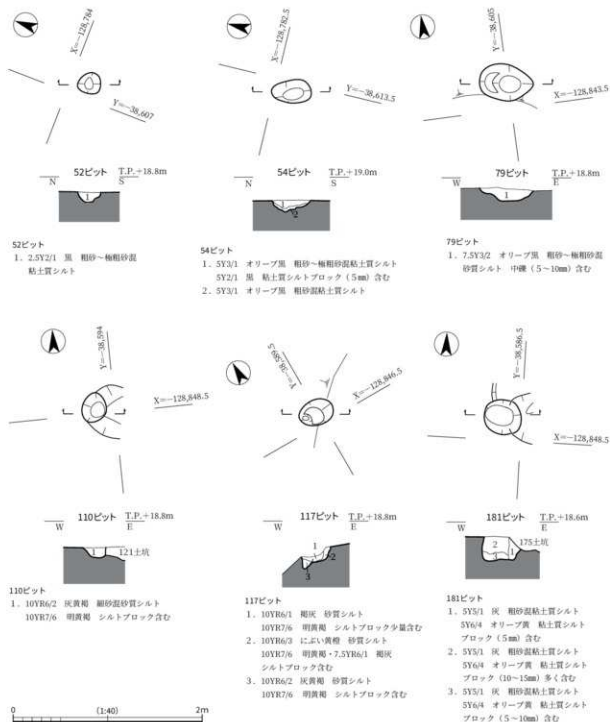


図60 52・54・79・110・117・181ピット 平・断面

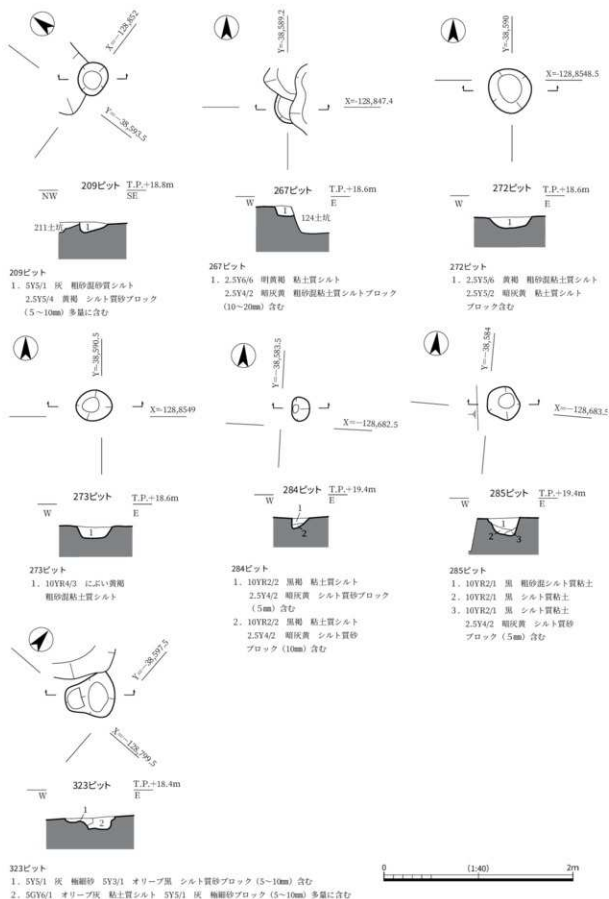


図 61 209・267・272・273・284・285・323 ピット 平・断面

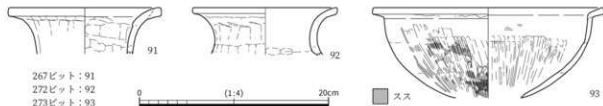


図 62 267・272・273 ピット 出土遺物

横は長軸 0.56m、短軸 0.4m、深さ 0.12m である。

埋土はオリブ黒色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで中礫を含む。遺物は出土していない。

110ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図60)

4区中央の6N-10eで検出し、121土坑と重複し後出する。平面形はいびつな円形を呈し、規模は直径0.25~0.32m、深さ0.1mである。

埋土は灰黄褐色細砂混じり砂質シルトに基盤層のシルトブロックを含む。遺物は出土していない。

117ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図60)

4区中央の6N-9eで検出し、上部は攪乱を受ける。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.37m、短軸0.27m、深さ0.23mである。

埋土は3層に分けられる。埋土3・2層は灰黄褐色やにぶい黄褐色砂質シルト、1層は褐灰色砂質シルトでいずれも基盤層のシルトブロックを含む。

遺物は同一個体と見られる弥生土器甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

181ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図60)

4区中央東端の6N-9eで検出した。127・175・204土坑と重複し、175土坑に先行し、その他の土坑に後出する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺0.36~0.38m、深さ0.25mである。

埋土は3層に分けられ、いずれも灰色粗砂混じり粘土質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

209ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図61)

4区中央の6N-10fで検出し、211土坑と重複し後出する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.3~0.35m、深さ0.12mである。

埋土は灰色粗砂混じり砂質シルトに基盤層のシルト質砂ブロックを多量に含む。

遺物は弥生土器甕体部片が出土したが、図化しえなかった。

267ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図61・62、図版24)

4区中央東側の6N-9eで検出した。124・271土坑と重複し、先行する。平面形は不明、残存規模は長軸0.27m、短軸0.2m、深さ0.1mである。

埋土は基盤層の粘土質シルトに暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトブロックを含む。

遺物は弥生土器壺口縁部・甕体部片が出土し、1点を図化しえた。91は広口壺である。口縁部は横方向のナデ、頭部は剥離のため調整不明であるが、一部工具痕が残る。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

272ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図61、図版24)

4区中央の6N-9・10eで検出した。平面形はやや不整な円形を呈し、規模は直径0.45~0.5m、深さ0.1mである。埋土は基盤層に由来する粗砂混じり粘土質シルトに暗灰黄色粘土質シルトブロック

を含む。

遺物は弥生土器壺・甕体部片が出土し、1点を図化した。92は広口壺である。内外面ともに摩滅により調整不明瞭だが、外面に工具によるナデ痕が残存する。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

273ピット(土坑・ピット群1)(付図1、図61、図版24)

4区中央の6N-10eで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.4m、短軸0.3m、深さ0.1mである。埋土はふい黄褐色粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は弥生土器鉢が出土した。93は鉢である。口縁部は「く」字状に外反する。調整は内外面ともに摩滅し、不明瞭な箇所が多いが、ヘラミガキを行う。外面に一部ススが附着する。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

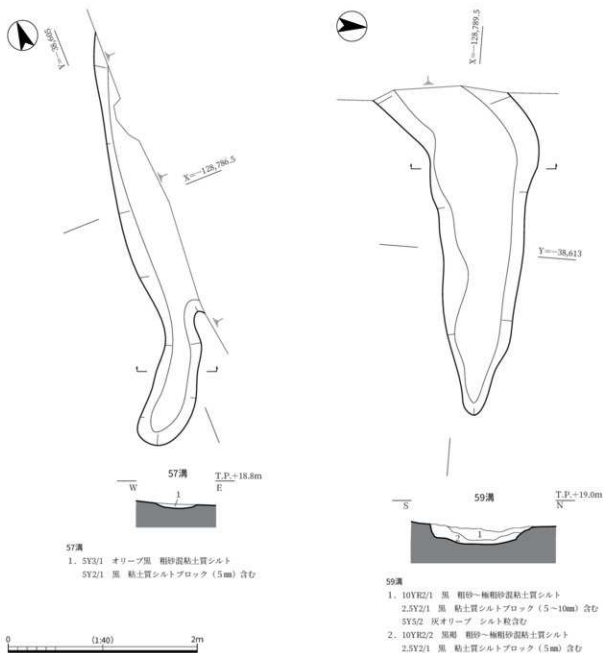


図63 57・59溝 平・断面

284ピット(付図1、図61)

1区北西側の6L-9 iで検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長軸0.25m、短軸0.2m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも黒褐色粘土質シルトに第7-2層に由来する暗灰黄色シルト質砂ブロックを含む。遺物は出土していない。

285ピット(付図1、図61)

1区北西側の6L-9 iで検出した。平面形は不整な方形を呈し、規模は一辺0.35m、深さ0.18mである。

埋土は3層に分けられ、埋土3-2層は黒色シルト質粘土を主体とし、3層は基盤層のシルト質砂ブロックを含む。1層は黒色粗砂混じりシルト質粘土である。遺物は出土していない。

323ピット(付図1、図61)

2区南西側の6M-10 jで検出され、90溝と重複し先行する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.1mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層の粘土質シルトに灰色極細砂ブロックを多く含む。1層は灰色極細砂にオリブ黒色シルト質砂ブロックを含む。遺物は出土していない。

57溝(付図1、図63)

3区北側の7M-1 iで検出した。北東から南西方向に延び、北東側は攪乱を受け残存しない。残存規模は幅0.32~0.55m、深さ0.08~0.15mである。

埋土は第6-4層に由来するオリブ黒色粗砂混じり粘土質シルトに黒色粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

59溝(付図1、図63)

3区北西端の7M-2 i・jで検出した。西から東方向に延び、南に屈曲するが、その延長は攪乱を受け残存しない。残存規模は幅0.22~1.25m、深さ0.11~0.15mである。

埋土は2層に分けられ、いずれも第6-1層の粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトを主体とし粘土質シルトブロックを含む。2層より1層はブロックが大きい。遺物は出土していない。

90溝(付図1、図64~67、図版17・24・25)

90溝は2・3区の6M-10 j、7M-1・2 j・aで検出した。調査区中央の窪地に沿って、北東から南西方向に延びる。西側は調査区外に続き、東側は攪乱を受ける。50・60・73・76・86・89・315・318・324・325土坑、49ピットと重複する。50・60・318土坑、49ピットに後出し、これら以外の遺構に先行する。

規模は幅4~9m、深さ0.3~0.74mである。底面の高さは標高17.9m前後で、東西で高低差は見られない。底面は凹凸がある。

埋土は8層に分けられる。埋土8層は黒褐色粗砂混じりシルト質砂に中礫から大礫が多く含む。7層は黒褐色シルト質砂を主体とし、基盤層の粘土質シルトブロックや黒褐色粘土質シルトブロック、中礫から大礫を含み、北端ほど黒褐色粘土質シルトブロックが多く含まれる。この層から多くの土器が出土した。6層は黒褐色粘土質シルトに黒色粘土質シルトブロックを含み、北側の一部に黄灰色粘土質シルトの薄層がラミナ状に堆積する。5層は暗灰黄色粘土質シルト、4層は黒褐色粗砂から極粗砂、3層は黒褐色粘土質シルトである。2・1層は第6-4層に由来する中砂や粗砂が混じる黒色粘土質シルトで

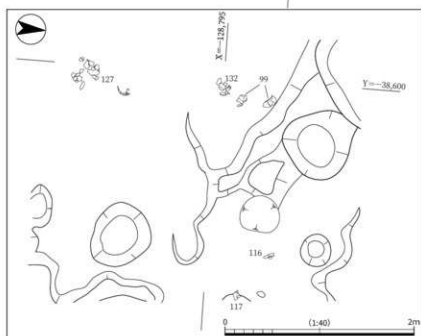
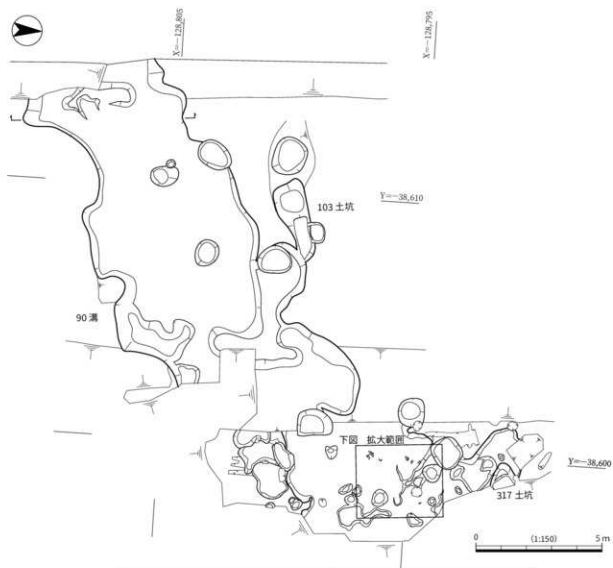


図 64 90 溝 平面及び遺物出土状況

ある。8・7層で埋戻された後徐々に埋没したと考えられる。

遺物は弥生土器壺・鉢・高杯・甕が出土した。94～106は壺である。94の長頸壺は外面ハケ後、口縁部付近は横方向のナデを行う。95～100の広口壺は摩滅のため調整不明なものが多い。99は、外面は口縁部から頸部にかけて横方向のナデ、体部はハケ後ヘラミガキを行う。内面体部は指オサエ後ナデを行うが、粘土帯接合痕が顕著に残る。100は口縁端部を下方に拡張し、3条の凹線文に円形浮文を貼り付ける。103は外面がヘラミガキ、内面がハケ後板状工具によるナデを行う。体部下端から底部にかけて



1. 2.5Y2/1 黒 粗砂質粘土質シルト
2. 2.5Y2/1 黒 中砂質粘土質シルト
3. 7.5YR2/2 黒褐 粘土質シルト
4. 7.5YR2/2 黒褐 粗砂～極粗砂 中礫(5～15mm)含む
5. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘土質シルト
6. 10YR3/1 黒褐 2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト 2.5Y2/1 黒 粘土質シルトブロック(5～10mm)含む
7. 10YR3/1 黒褐 シルト質砂 SY5/3 灰オリーブ 粘土質シルトブロック(10～20mm)・10YR3/1 黒褐 粘土質シルト含む 中～大礫含む
8. 10YR3/1 黒褐 粗砂質シルト質砂 中～大礫(50～100mm)多量に含む

図65 90溝断面

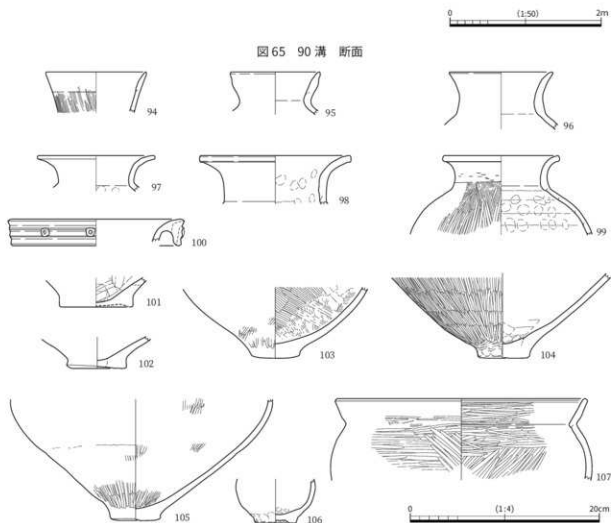


図66 90溝出土遺物(1)

黒斑が見られる。104は外面のヘラミガキが細かい。105は内外面ともにヘラミガキを行う。106の小形壺は内外面ともに摩滅のため調整不明である。

107は鉢である。内外面はヘラミガキ、口縁端部内面に1条の沈線を施す。

108～113は高杯である。108は口縁部が外反し、口縁部高が体部高をしのぐ。内外面ともに剝離部分が多いが、ヘラミガキを施す。109は口縁部が外反し、外面口縁部は横方向のナデ後、下端に1条の沈線、内面にヘラミガキを施す。110～113は脚部である。110は内外面ともに横方向のナデである。112は上部に2条の沈線を施す。摩滅のため調整不明瞭だが、僅かにヘラミガキの痕跡が残存する。113は円形透孔が1箇所残存する。

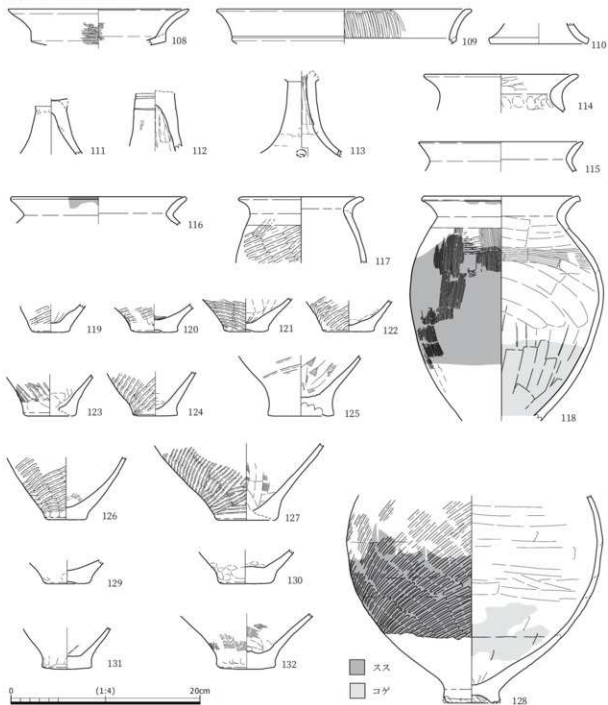


図 67 90 溝出土遺物 (2)

114～128は甕である。116は外面口縁部にススが薄く付着する。117～128はタタキの甕で、内面はナデが大半を占める。118は口縁部内外面が横方向のナデ、体部外面はタタキ後上半にハケ、下半はナデ、内面はハケ後ナデを行う。外面口縁端部の一部と体部中央を中心にスス、内面下半にコゲが付着する。120は内面にハケを行う。123は外面がタタキ後ナデ、内面はヘラケズリを行う。128は体部が球体化し、外面タタキ後、体部中央を除きナデを行い、とくに下部は丁寧なナデである。内面は板状工具によるナデである。外面は中央に帯状にスス、内面は下部にコゲが付着する。底部は上げ底で端部は欠けており、人為的に打ち欠いた可能性がある。

溝の埋没時期は108・109の高坪から弥生時代後期後半と考えられる。

186溝(付図1、図68)

4区北側中央の6N-10cで検出し、東・西側は攪乱を受け残存しない。東から西方向に延びる。

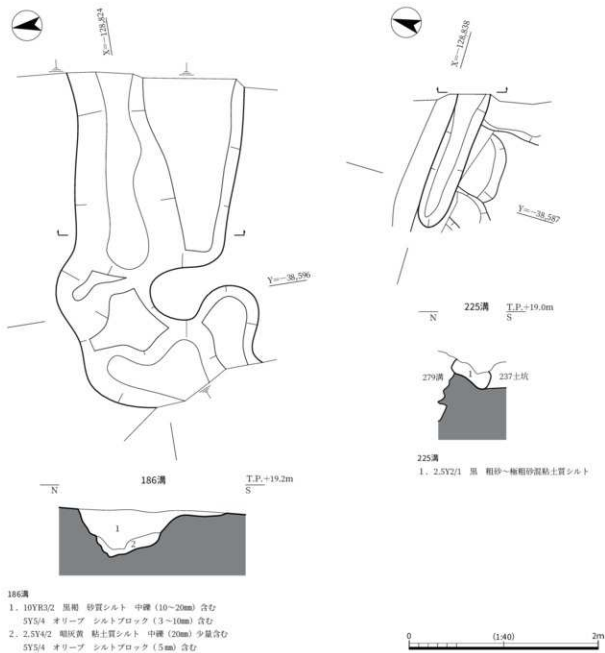


図68 186・225溝 平・断面

検出した規模は幅0.95～1.8m、深さ0.14～0.5mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は暗灰黄色粘土質シルト、1層は黒褐色砂質シルトを主体とし、いずれも基盤層のシルトブロックや中礫を含む。遺物は出土していない。

225溝(付図1、図68)

4区中央北寄りの6N-9dで検出し、調査区外東側に続く。232・235・236・237土坑、279溝と重複し、いずれの遺構より後出する。東から西方向に伸び、279溝と並行する。規模は幅0.3m、深さ0.15～0.17mである。

埋土は第6-1層の黒色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトである。遺物は出土していない。

228溝(付図1、図69)

4区北側の6N-10dで検出し、東側は攪乱を受け残存しない。北東から南西方向に伸び、西端はT字形に分かれる。規模は幅1.0～3.4m、深さ0.19～0.42mである。

埋土は2層に分けられ、埋土2層は基盤層に由来する中礫を多く含む灰オリーブ色砂質シルトを主体とし、シルトや砂質シルトのブロックを含む。1層は暗灰黄色砂質シルトにオリーブ灰色シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

279溝(付図1、図70)

4区北側の6N-9・10dで検出し、西側は攪乱を受け残存しない。東から西方向に伸び、調査区外東側に続く。131・164・170・198・232・237土坑、225溝と重複し、いずれの遺構より後出する。規模は幅1.15～2.05m、深さ0.38～0.78mである。

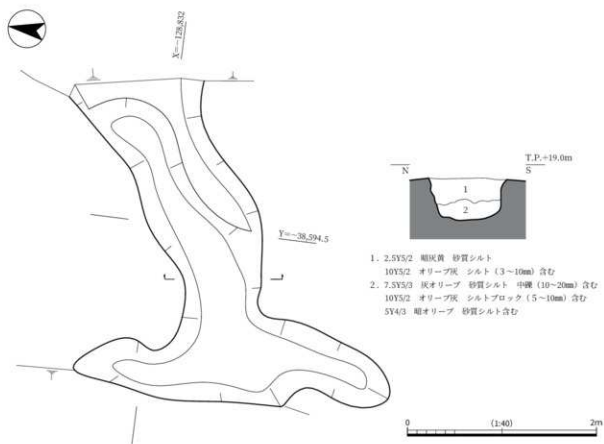


図69 228溝 平・断面

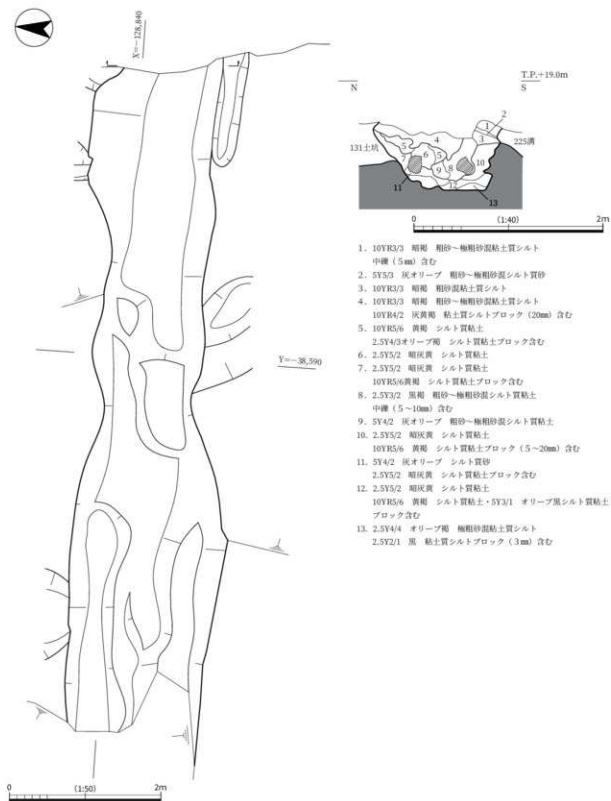


図70 279溝 平・断面

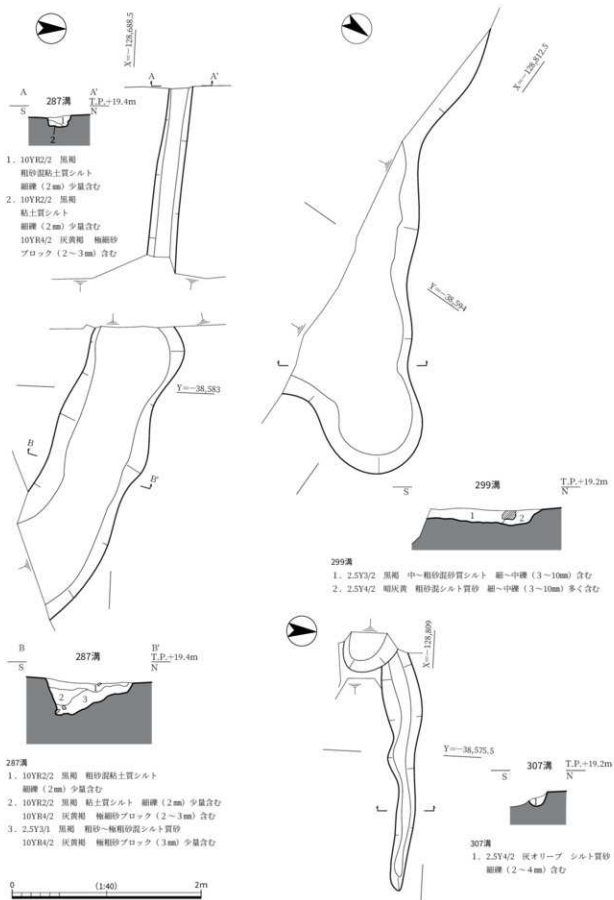


図 71 287・299・307 溝 平・断面

埋土は13層に分けられる。埋土13・12層は基盤層を主体とし黒色シルト質粘土や粘土質シルトブロックを含む。11層は灰オリーブ色シルト質砂、10層は暗灰黄色シルト質粘土を主体とし、いずれも基盤層のブロックを含む。断面観察から10層堆積後に掘り直しが行われ8・9層が堆積する。8・9層は黒褐色や灰オリーブ色の粗砂から極粗砂混じりシルト質粘土を主体とし、8層は中礫が含まれる。8層堆積後再び掘り直しが行われ、7～5層が堆積する。7・6層は暗灰黄色シルト質粘土を主体とし、7層は基盤層のブロックを含む。5層堆積後再び掘り直され、暗褐色粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトを主体とする4～1層が堆積する。少なくとも3度の掘り直しが行われていると見られる。遺物は出土していない。

287溝(付図1、図71)

1区北側の6L-9jで検出し、南東側は攪乱を受け残存しない。北西から南東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅0.25～1.0m、深さ0.1～0.35mである。底面高は西から東へと低くなり、高低差は0.29mである。

埋土は西側で2層、東側で3層に分けられた。埋土3層は黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂に基盤層の極粗砂ブロックを少量含む。2層は黒褐色粘土質シルトに3層と同様の基盤層ブロックを含む。1層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトに細礫を少量含む。遺物は出土していない。

299溝(付図1、図71)

2区南西側の6N-10bで検出し、南側は攪乱を受け残存しない。北東から南西方向に延びる。残存規模は幅0.9～1.5m、深さ0.13～0.18mである。埋土は2層に分けられ、2層は暗灰黄色粗砂混じりシルト質砂に細礫から中礫を多く含む。1層は黒褐色中砂から粗砂混じり砂質シルトに細礫から中礫を含む。遺物は出土していない。

307溝(付図1、図71)

2区南東側の6N-8aで検出し、溝西側は攪乱を受け残存しない。303土坑と重複し先行する。東から西方向に延びる。規模は幅0.15～0.4m、深さ0.1～0.13mである。

埋土は灰オリーブ色シルト質砂に細礫を含む。遺物は出土していない。

283礫集中(付図1～3、図72～77、表2、図版19～21・25)

1区南半の6M-7・8a、6M-7・8d～fの2箇所検出した。これは平成20年度に茨木市教委により実施された発掘調査の第1次調査区(以下OT 08-1とする)で検出されている石敷遺構に連なるものである。OT 08-1調査成果から、石敷遺構は道路状遺構内の版築の一部である可能性が想定された。礫集中の上部に堆積する地層を確認するため第6-1層を掘削除去後、断面観察のベルトを2箇所を設定し調査を行った。

検出規模は、北側の6M-7・8aは長さ7m、最大幅2m、高さは最大0.3mである。これより北側の調査区東端付近には礫が散乱しており、礫集中は調査区外北東方向にさらに延びていると推定される。南側の6M-7・8d～fは長さ19m、最大幅8m、高さは最大0.32mである。さらに南へ続くと見られるが、攪乱により残存しなかった。礫集中上面の高低差は南北・東西方向ともに地形に沿って、北から南へ0.4m、東から西へ0.2m低く、緩やかに傾斜する。

礫集中の構築に際しては、礫が基盤層上に据え置かれていることから第6-4層や第7層の土壤層を加工し、平坦化したと見られる。構築方法は、北側は15～40cmの礫を並べ、粗砂混じりシルト質砂を礫間に充填しながら若干小振りな礫を3～4段積み重ねる。南側は、西端から幅約3mは15～

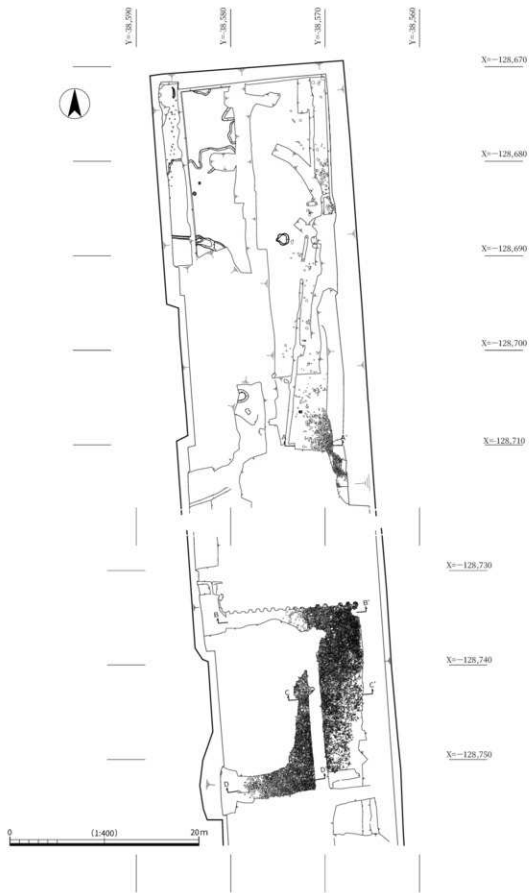
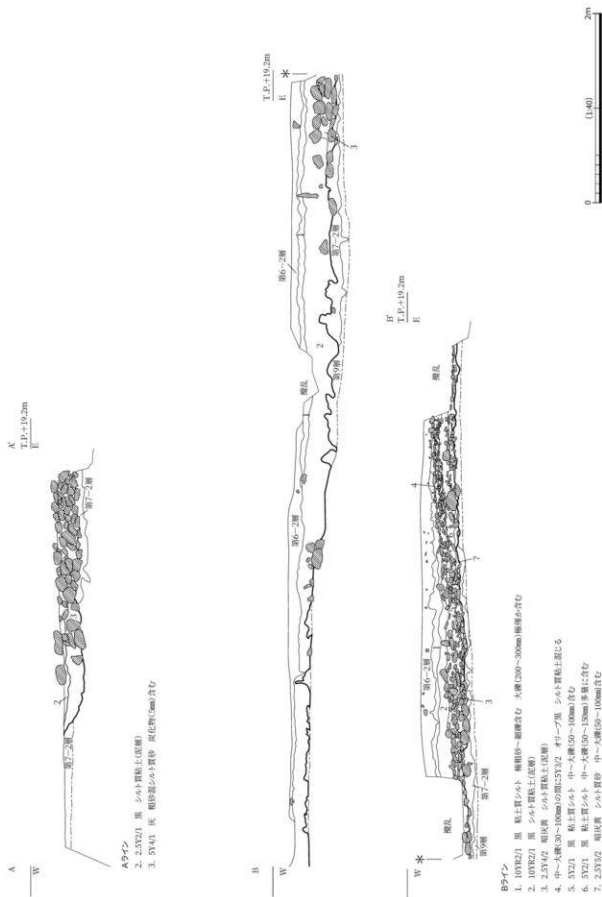


图 72 283 碑集中 最上段平面



- Aライン**
1. 2.5Y2/1 黒 シルト質粘土(底層)
 2. 5Y4/3 灰 粗砂混シルト質砂 炭化層(5mm)含む

- Bライン**
1. 10YR2/1 黒 粘土質シルト 粗粒砂—細粒砂含む 大礫(200—300mm)稀薄を含む
 2. 10YR2/1 黒 シルト質粘土(底層)
 3. 2.5Y4/2 粗灰濁 シルト質粘土(底層)
 4. 中—大礫(30—100mm)の間は5Y3/2 オリーブ色 シルト質粘土層に於ける
 5. 5Y2/1 黒 粘土質シルト 中—大礫(50—100mm)含む
 6. 5Y2/1 黒 粘土質シルト 中—大礫(50—100mm)多量を含む
 7. 2.5Y5/2 粗灰濁 シルト質砂 中—大礫(50—100mm)含む

図73 283礫集中 A・B断面

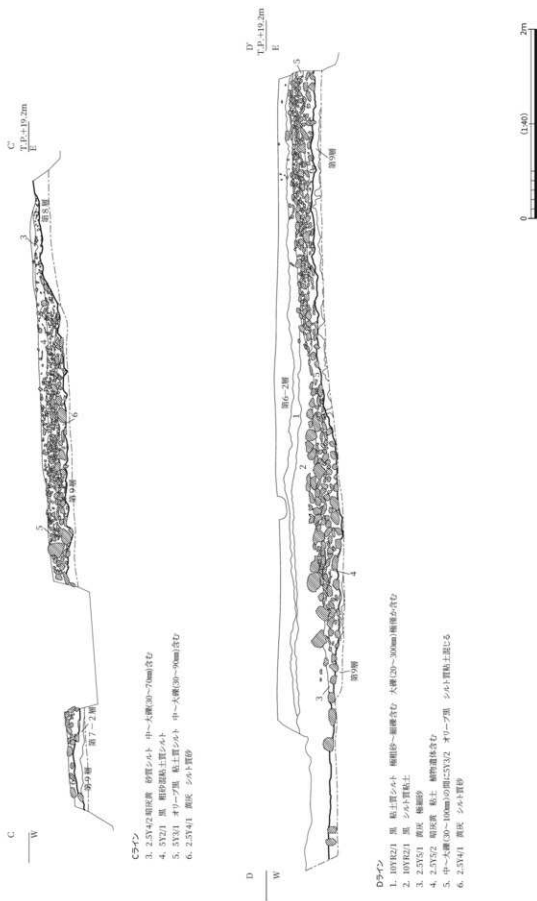


図 74 283 礫集中 C・D断面



図 75 283 礫集中 断面オルソ

表2 283 礫集中 礫計測表

番号	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (kg)	岩種
1	20	10	6	1.0	チャート
2	30	14	7	5.0	ホルンフェルス
3	21	13	7	2.0	チャート
4	16	10	8	1.0	チャート
5	18	14	9	4.0	チャート
6	14	10	4	1.0	ホルンフェルス
7	15	10	6	1.0	ホルンフェルス
8	12	9	6	1.4	ホルンフェルス
9	17	12	18	5.6	泥質ホルンフェルス
10	15	7	5	0.8	砂岩
11	17	7	3	1.5	砂岩
12	13	8	5	0.8	細粒花崗閃緑岩
13	18	9	9	3.3	ホルンフェルス
14	16	11	7	1.7	ホルンフェルス
15	14	13	5	1.7	砂岩
16	15	14	7	2.6	シルト質ホルンフェルス
17	16	12	6	1.6	ホルンフェルス
18	13	13	10	3.4	ホルンフェルス
19	28	14	12	8.0	凝灰岩ホルンフェルス
20	18	6	6	1.1	シルト質ホルンフェルス
21	16	7	6	1.1	ホルンフェルス
22	16	13	10	4.0	ホルンフェルス
23	18	18	9	4.0	ホルンフェルス
24	22	12	7	3.3	泥質ホルンフェルス
25	16	10	7	2.5	凝灰岩ホルンフェルス
26	24	24	8	8.8	シルト質ホルンフェルス
27	19	13	5	1.8	泥質ホルンフェルス
28	13	8	5	1.1	砂質ホルンフェルス

40cmの礫を並べる。上段は最下段より若干小振りな礫を用いて3～5段積み、北側と異なり礫間に土を充填せず礫のみで構築する。これより東側は西端より小振りの礫を並べるが、礫間に5 cm前後の細かい礫を隙間なく詰める傾向が窺える(図版 21-4)。礫の積み重ね時には西端と異なり、礫間に土を充填する。東端は中間に礫をあまり含まない粘土質シルト層を挟み、上部は細かい礫とシルト質砂で整地する。

礫集中上面の堆積状況は、礫集中西半からさらに西側周辺に黒色シルト質粘土(2層)の泥層が広がり、調査区北東端の礫が散乱した周辺にも見られた。東半は極細砂から細礫を含む黒色粘土質シルト(1層)である。また礫集中南西端の礫間は植物遺体を含む粘土の水成層が堆積した。このことから礫集中は、道路状遺構のような版築の一部ではなく礫が露出した状態にあり、且つ礫集中西側は周辺よりやや低く、滞水しやすい状態であったと考えられる。

検出した礫のうち 28点をサンプリングし、肉眼による石材鑑定を行った。岩種は泥質・シルト質・凝灰岩・砂質ホルンフェルス、チャート、砂岩、細粒花崗閃緑岩と判明した。そのうちホルンフェルスが70%を占める。検出状況のオルソ画像の検討からも泥質岩のホルンフェルスが圧倒的に多く、火成岩起源である花崗閃緑岩～石英閃緑岩の垂角形の礫は確実なものが2点だけであった。分析から礫は、地質学的には超丹波帯高槻層の砂岩・頁岩及び砂岩頁岩互層、丹波帯Ⅱ型地層群・田能コンプレックスの頁岩(砂岩・チャートのレンズを含む)及び層状頁岩(一部珪質)であるとされる。堆積岩が安威川右岸に分布する茨木複合花崗岩体を形成したマグマによって接触変成作用を受けてホルンフェルスになっている。ホルンフェルスであるために、もともと堆積岩を構成していた鉱物の再結晶・変質、細かい石英脈の発達、マグマからの流体による交代作用などによって岩質は硬化している。また、礫の形態には多角形のものが多くことから、接触変成作用によって高温で焼かれた堆積岩が冷却するときでできた節理面が礫の表面に残っているものと考えられるとの見解を得た。

遺物は、礫集中内からは須恵器平瓶体部片・甕口縁部細片、土師器甕片、弥生土器高杯脚部片、木製品が出土し、そのうち3点を図化した。134は須恵器平瓶体部で上面に自然釉がかかる。

135は土師器甕口縁部である。137の火付棒は短冊形に割り出し、先端は圭頭形に削る。先端は被火

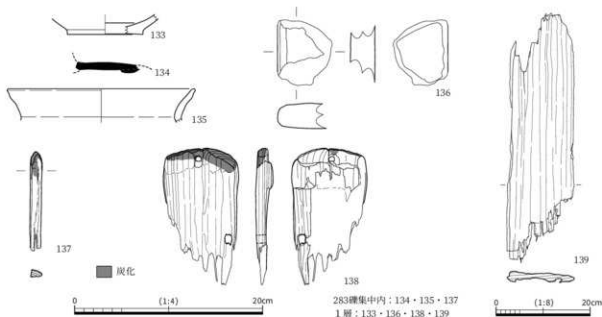


図 76 283 礫集中 出土遺物

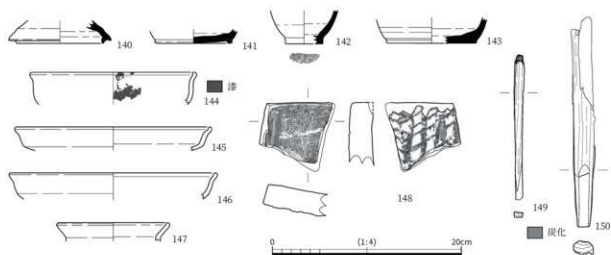


図 77 283 礫集中周辺 2層 出土遺物

により炭化する。135・137は礫集中最下段から出土した。

礫集中1層から緑釉陶器皿、黒色土器椀、須恵器杯細片・甕体部片、土師器鍋または甕把手・甕体部片、平瓦、木製品が出土し、そのうち4点を図化しえた。133は緑釉陶器皿である。軟陶で釉調は淡緑色を呈し、全面に施釉される。底部内面に1条の圈線がめぐる。高台は削り出し手法による蛇の目高台である。

136は平瓦である。端部は面取り、両面ともにナデを行う。凸面に粗砂の離れ砂が付着する。138は下駄、139は板材である。138は連歯下駄で先端部は被熱により炭化する。前緒穴周辺に圧痕が見られ、歯は摩滅が著しい。

2層からは黒色土器椀細片、須恵器杯体部片、土師器甕片が出土したが、図化しえなかった。礫集中の周囲に堆積した2層からは、黒色土器椀体部片、須恵器杯体部・壺底部片、土師器杯・皿・甕・鍋または甕把手片、弥生土器甕片、瓦、木製品、核果片が出土し、11点を図化しえた。140～143は須恵器で140は杯蓋、141は杯、142・143は壺である。142は底部外面に糸切痕が残存する。143は平底で体部の底部近くはヘラケズリを行う。

144～147は土師器である。144の杯は、口縁端部を内側に巻き込み肥厚する。調整は内外面ともに横方向のナデである。内面に漆が付着する。145・146の皿は、口縁端部を内側に巻き込み肥厚する。147は甕である。

148は平瓦で凹面に布目痕、凸面に斜格子タタキを施す。

149は火付棒、150は棒状木製品である。149は短冊形に割り出し、先端は被火により炭化する。150は先端を面取りする。

時期は礫集中内からの出土遺物は僅少ではあるが、134から8～9世紀に構築されたと考えられる。

第5章 総括

本調査では時期不詳の掘立柱建物1棟、弥生時代後期から古墳時代初頭の土坑や溝、古墳時代後期から飛鳥時代の土坑、奈良時代から平安時代の礎集中、中世の溝など弥生時代後期から中世に至る遺構・遺物を検出した。

ここでは今回の調査成果とともに既往の調査成果と合わせて周辺の土地利用の変遷を見ていく。

1. 弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代後期中葉以降、古墳時代初頭にかけての時期が最も遺構・遺物が多く、段丘崖近くまで遺構が広がっていたことを確認した。調査区中央で90溝、その周囲に61・71・76・81・83・87・305土坑、南側東端で土坑105基・ピット43基の土坑・ピット群を検出した(図78)。

90溝は調査地の中で最も低い T.P.+ 18.5mの窪地に沿って北東から南西方向に延びる。溝の東側は攪乱により不明であるが、1区で検出されていないことから北西方向に向きを変えて延びる可能性も考えられる。西側は調査区外に続いているが、隣接する太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1-1区では検出されていない。太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1-1区は西から東に向けて緩やかに下降する地形であることから、今回の調査区との間を南下すると推定される。溝は甕などの土器が廃棄され、後期後半に埋没する。

土坑・ピット群は、調査区南東側の礎を含まないシルトからシルト質粘土の基盤層が広がる南北24m、東西10mの範囲に集中しており、とくに調査区東壁際は遺構の重複が著しい。その周囲の基盤層に礎を含む箇所や同様の基盤層が広がる調査区北側のどちらも遺構は少なく、ある程度限定された場所に掘削されたことが看取できる。

土坑の特徴は、重複が著しいことがまず挙げられる(付図1)。形状や規模は重複により判明しないものも多いが、不整形なものが多く、方形・長方形・円形・楕円形・長楕円形と様々で最も多いのは楕円形である。規模は長軸0.4～2.28m、短軸0.25～1.5mでかなりばらつきが見られる。埋土は、大半の土坑に基盤層のブロックが見られ、そのうち60基余りの土坑にはとくに多量のブロックが含まれ、人為的な埋戻しがされたと考えられる。土坑内から出土した遺物は少なく、焼土や炭、土器などがまとまって捨てられた状況は見られない。約半数の土坑から壺・鉢・甕片が出土しているが、そのほとんどが体部片で埋土に混入した可能性が高く、完形に近い土器はなかった。

このような土坑・ピット群の性格は、これまで粘土採掘坑ととらえる考え方と土坑墓ととらえる考え方とで議論がされてきた(京嶋 1995)。大阪府池田市柳原遺跡では弥生時代後期前葉から中葉に属する粘土採掘坑と考えられる密集土坑が検出されている(大阪府教委 2014)。土坑群について詳細な検討がされており、特徴として土坑の重複が少ないこと、精良な粘土を掘削し砂混じりの基盤層が底面となることを挙げている。埋土は下半に粘土ブロックを含む層もしくは滞水状態での流入土、上半に土壌が堆積する場合や下層のブロック土と上層の中間に滞水状態での流入土が見られる土坑が多い。これらの状況から掘削後放置され、降雨時に泥層が流入もしくは周囲の土坑掘削の際に人為的に掘削土が投入される。その後は放置され、雨水による土の流入による埋積が進み、さらに周囲の土壌が埋没したと想定される。これらから掘削後に明確な意図による人為的な埋戻しを行っていないとされ、粘土採掘坑と考えることが妥当と結論づけられている。

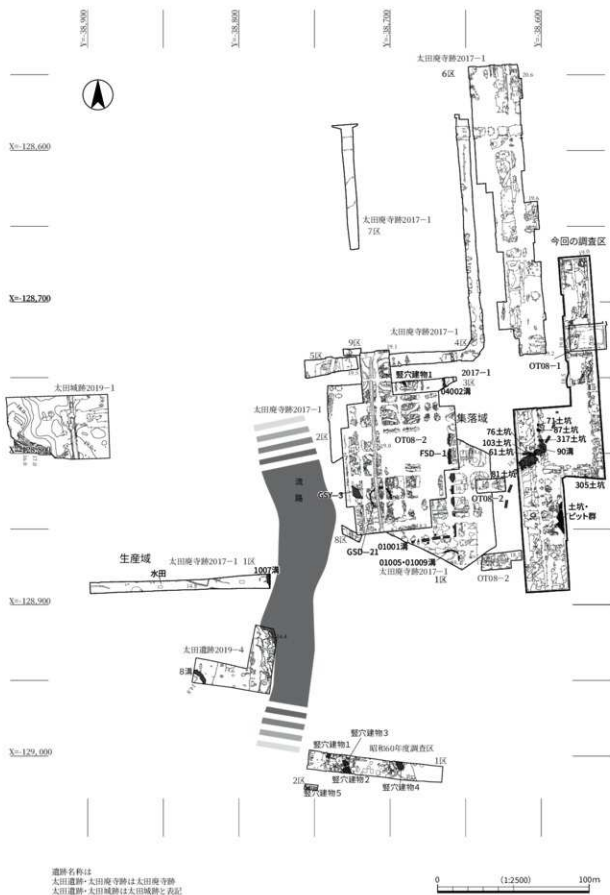


図78 今回の調査と周辺既往調査成果 弥生時代後期から古墳時代前期



図 79 弥生時代後期から古墳時代前期の地形模式

一方、大阪府堺市大庭寺・伏尾遺跡では約 6,600m²に 2,660基余りの古墳時代から奈良時代の土坑が密集して検出されている。土坑は重複し、平面形態は隅丸長方形を代表とするが、長楕円形など多様である。埋土は基盤層の粘土ブロックが入るものが多く、一度に埋戻されたものと考えられている。遺物の特徴として完形に近い特異な器種が出土していることが挙げられている。以上のことから土坑墓の可能性が示唆されている。

本調査で検出した土坑・ピット群は前述したように重複が著しく、基盤層がシルトからシルト質粘土である箇所に集中しているが、この基盤層を掘り抜いてはいない。埋土は滯水状態で流入土が堆積する土坑は僅かで、多くは基盤層のブロックを多く含む人為的な埋戻し土と見られる。これらのことから粘土採掘坑とは異なると考えられる。では土坑墓の可能性を考えると、人為的に埋戻されてはいるが土坑内から人骨は検出されておらず、副葬されたと考えられる遺物も出土していない。これらのことから土坑墓と判断はできず、先の2例いずれも当てはまらず遺構の性格を特定することは難しい。

次に周辺の景観を隣接する既往調査成果とともに復元すると、西側の OT08-2、太田遺跡・太田庵寺跡 2017-1-1~3区では標高 19mの周囲よりやや高い箇所に竪穴建物や土坑などが検出されており、集落の中心部と言える。対して本調査区の 90溝より東側に建物はなく土坑・ピット群のみであることから、集落の縁辺部と考えられる。さらに南に 150mの昭和 60年度調査地点では竪穴建物 5棟が検出されており、集落域であったことが伺える

これらの集落の西側は北から南へ流路が流れ、対岸の太田遺跡・太田城跡 2017-1-1区では当該

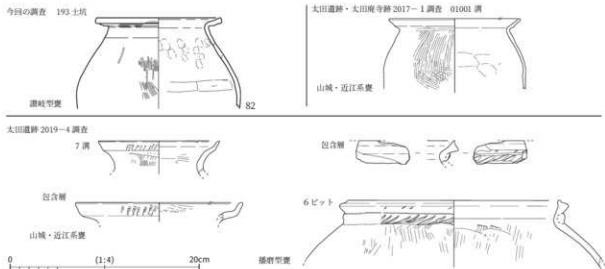


図 80 太田遺跡・太田庵寺跡出土外来系土器

期の水路(1007溝)とそれに伴う水田が検出された。水田は標高15m前後で集落とは流路を挟み3m程も低く、現在の平坦な地形からは想像できない高低差のある景観であった(図79)。

出土した遺物で注目されるのは、193土坑から庄内式期新段階の搬入品もしくは在地で忠実に模倣したものと見られる溝岐型甕である(図80)。太田遺跡・太田廃寺跡での既往調査では、弥生時代中期後葉の播磨型甕や庄内式期の山城・近江系甕が出土しているが、より広範囲な地域と人や物の交流があったことが伺える資料を得ることができた。

2. 古墳時代中期から後期

古墳時代中期の遺構は検出されなかった(図81)。既往調査からも弥生時代後期から続いた集落は古墳時代中期には廃絶したと考えられる。

古墳時代中期後半にはO T 08-2区・太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1調査区で円墳6基、方墳7基、墳形不明1基の計14基の古墳群が確認されている。今回の調査地で古墳が検出されなかったことから、古墳群は弥生時代後期から古墳時代前期に集落の中心であった箇所にも築かれ、そこから東の丘陵崖面下までは空閑地であったと推定される。

3. 古墳時代後期から古代

古墳時代後期は調査区南側で15・21土坑を検出した。古代になると調査区中央西側で68・70・93土坑、調査区北側で283礫集中を検出した(図83)。

283礫集中は段丘崖の裾部に位置し、規模は長さ26m、最大幅8mの帯状に広がる。O T 08-1で検出された石敷遺構と連なり、本調査と合わせると長さ37.8m、面積142.88㎡、礫の総量は換算すると18トン以上になる。この遺構は西側の低い部分と東側では異なる大きさの礫を3~4段積み上げており、計画的に構築している様相が伺える。礫の調達先については、礫集中南側の基盤層にはホルンフェルスやチャートの大礫が含まれ、東側の段丘崖面にかけて礫が露出していた箇所があった可能性もあるがこれだけの量を掘り出したとは考え難い。石材分析では、円磨度の少ない面をもつ多角形の大礫が多く、安威川周辺の竜王山から桑原にかけての岩石露頭から安威川にもたらされた。とくに阿武山西方から桑原にかけての安威川左岸の地質は、花崗岩による接触変成作用を受けて硬化が著しく、冷却節理面で囲まれた多面体の岩塊が安威川にもたらされ、運搬された。現在の太田遺跡付近の河原までの距離が近いことから、礫はほとんど円磨されることなく調達地点まで運搬されてきたため、安威川上流からの円礫に混じて円磨度の少ない大きな礫も多かったと考察されている。これらから調査地から西に500m離れた安威川から運ばれたと考えるのが妥当であろう。

礫種は茨木市の山地を構成する岩石であるチャート・ホルンフェルス・花崗閃緑岩・砂岩であるがホルンフェルスが大半を占め、偏りが見られた。調査地から南東に400mの総持寺遺跡発掘調査での低位段丘基盤層中の礫種分析(センター1998)では基盤層中に含まれた礫にはチャート・砂岩・ホルンフェルス・頁岩が見られたが、ホルンフェルスの割合は10%であった。おそらく遺構を構築するのに適した大きさや、割れにくさなどから礫を選別し運んだと考えられる。

当初、礫集中は道路状遺構内の版築の一部の可能性が想定されたが、堆積状況から礫は露出しており、構築後は滞水しやすい状態にあったことから、それとは異なることが判明した。では何のために構築されたと考えられるか、類例を調査した。河内長野市日野観音寺遺跡で中世の石敷遺構が検出されている(河内長野市教委2005)(図83)。石敷きは天日山観音寺と明治まで存在した神社が立地する段丘下に位置し、南側の崖面と北側の湿地帯との間に長さ10m、幅12~13mの範囲に広がる。湿地帯に近い北



図 81 今回の調査と周辺既往調査成果 古墳時代中期

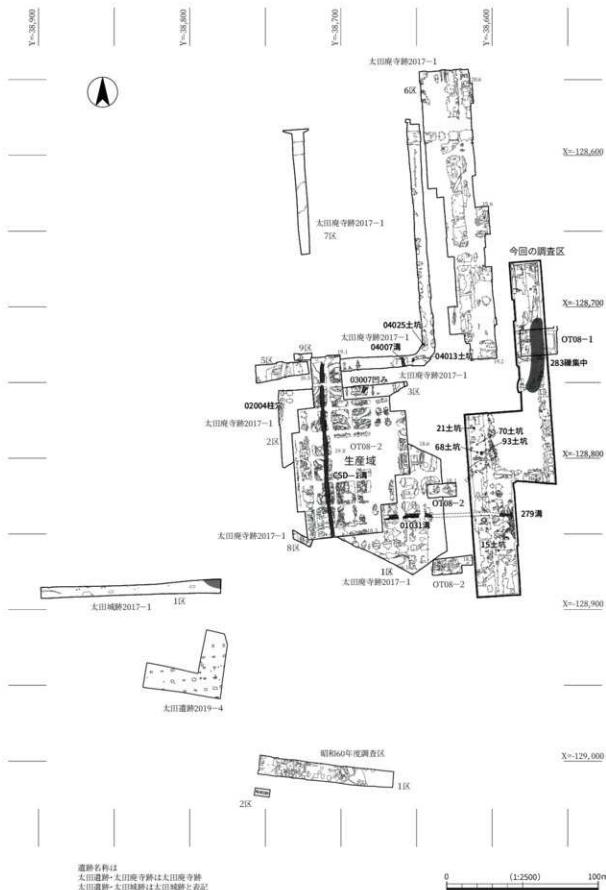
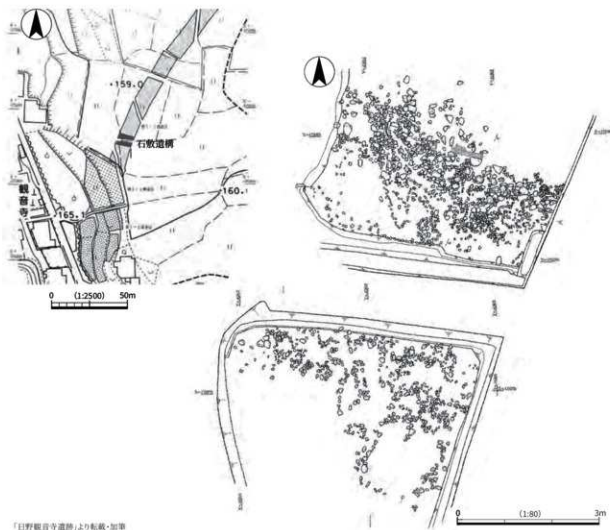


図 2 今回の調査と周辺既往調査成果 古墳時代後期から古代

側は杭を所々に打ち込み軟弱地盤を補強した後に 30～50cmの大きな礫を敷き、南側は2～3cmの細かい礫を敷き詰めている。段丘と湿地帯間の護岸施設として機能したと考えられているが、寺社域を示す可能性も指摘されている。この遺構は時代がかなり下るものの、石敷きによる造成工事が行われた一例といえる。本調査で検出した礫集中も段丘崖裾部の造成に伴い構築されたとも考えられるが、目的は判然としない。

調査区南側では東西方向に延びる 279溝を検出した。この溝は太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1-1 区で検出されている O1031溝の延長上に位置し、つながると推測される。溝から遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、O1031溝は奈良時代から平安時代に開削された CSD-1 溝と同時期の可能性が指摘されていることから当該期とした。

周辺の景観を見ると(図 84)、本調査や隣接する既往調査地は溝が開削され、古墳群を含め生産域に変わる。北東 150mの段丘上には飛鳥時代に建立され奈良時代に存続したとされる太田廃寺跡が位置する。この太田廃寺跡は舍利容器一具を納めた花崗岩製塔心礎が見られているが、発掘調査でこれまで明確な遺構は検出されておらず実態は不明である。しかしその南東の総持寺北遺跡発掘調査においては飛鳥時代の遺構群や奈良時代末から平安時代の建物群が検出され、また太田廃寺所用と見られる単弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦も出土しており、同寺に関連する施設があった可能性も推定されている。本



「日野観音寺遺跡」より転載・加筆

図 83 日野観音寺遺跡で検出された石敷遺構

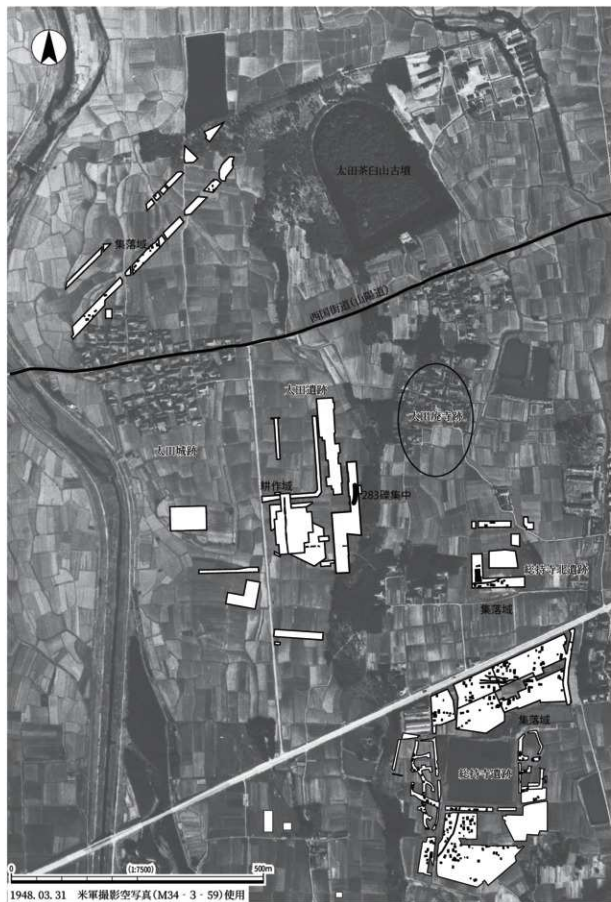


図 84 古代の太田遺跡・太田麻寺跡及び周辺遺跡状況

調査でも平・丸瓦片が出土し、そのほとんどが太田廃寺跡に最も近接する1区からであった。さらに南の総持寺遺跡では飛鳥時代から平安時代前期に属すると見られる建物だけで200棟以上が検出されており、段丘上の広範囲に屋敷地が広がっていたと見られる。

4. 中世

中世は調査区南側で1土坑・6溝を検出し、古代から引き続き生産域として利用される。調査区南側では天地返しが行われたことを確認し、耕地開発の一端を伺うことができた。

【引用・参考文献】

- 市本芳三 1994「大庭寺遺跡検出の『密集型土壌群』について」『大阪文化財研究』第6号財団法人大阪文化財センター
- 茨木市教育委員会 1997『平成8年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2002『平成13年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2005『平成17年度発掘調査概報』
- 大阪府教育委員会 2014『柳原遺跡—府営池田城南住宅建て替えに伴う発掘調査—』大阪府埋蔵文化財調査報告 2013—7
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998『大庭寺・伏尾遺跡—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財調査研究センター第27集
- 大阪府教育委員会 2007『総持寺遺跡II』大阪府埋蔵文化財調査報告 2006—5
- 河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会 2005『日野観音寺遺跡』河内長野市遺跡報告XXXI
- 京嶋 覚 1995「群集土壌の再評価」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998『総持寺遺跡—住宅都市整備公団仮称茨木・三島丘地区住宅建設事業に伴う発掘調査—』財団法人大阪府文化財調査研究センター第30集

遺物 觀察 表

遺物観察表凡例

本一覧表は本報告書に図面を掲載した遺物を対象としたものであり、文章の記述および写真のみの掲載となる遺物は含まない。

法量は、土器の完形もしくは復元資料にあっては口径、底径、高さを、土器や埴輪の破片資料および木製品にあっては長さ、幅、厚みを示している。口径、底径における復元値は（）を付して表記し、長さ、幅、高さならびに厚みは現存する最大値を示している。

法量の表記は小数点第一位までを有効とし、小数点第二位以下は切り捨てる。単位はcmである。残存率は約を省略し、5%単位で表記している。なお、5%未満についても5%としている。

神田遺物 番号	写真 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期	
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚					
14	1	22	3	7N-1f	第3層	須恵器	杯	(18.4)	(10.8)	6.1	10	外面: N5/ 灰 内面: N6/ 灰 断面: N6/ 灰	内・外面: 回転ナデ後ミガキ 外面底部回転ナデ	8世紀前半
14	2	22	3	7N-1f	第3層	須恵器	直口 甕	(9.9)	—	(4.6)	5	外面: N5/ 灰 内面: 7.5 Y 7/1 灰白 断面: 7.5 Y 7/1 灰白	外面: 回転ナデ 凹線文2条 内面: 回転ナデ 器具痕	8世紀
14	3	22	3	7N-1f	第3層	須恵器	甕	(35.7)	—	(4.2)	5	外面: 2.5Y5/1 黄灰 内面: 2.5Y6/1 黄灰 断面: 7.5YR6/3 にぶい橙	外面: 回転ナデ 縞線波状文1 帯凹線文2条 内面: 回転ナデ	7世紀中頃
16	4	—	3	7N-1g	第4層	須恵器	甕	(19.2)	—	(2.5)	5	外面: 7.5Y7/1 灰白 内面: 7.5 Y 7/1 灰白 断面: N8/ 灰白	内・外面: 回転ナデ	6世紀中頃か
16	5	22	1	6M-8d	第5層	青磁	碗	(19.5)	—	(2.8)	5	外面: 10Y6/2 オリーブ灰 内面: 10Y6/2 オリーブ灰 断面: 7.5Y7/1 灰白	外面: 体部に連弁文	13世紀中頃～ 14世紀初頃
16	6	22	3	北平部	第5層	青磁	皿	(11.4)	—	(2.5)	5	外面: 7.5Y6/2 灰オリーブ 内面: 7.5Y6/2 灰オリーブ 断面: 10YR7/1 灰白	内面: 見込み文様	12世紀中頃～ 後半
16	7	—	1	6M-8a	第5層	瓦器	椀	(16.8)	—	(4.0)	5	外面: N4/ 灰 内面: N4/ 灰 断面: 10YR8/1 灰白	外面: 口縁部ミガキ 体部磨 のため調整不明 内面: ミガキ	11世紀後半
16	8	—	1	6L-8j	第5層	黒色土器	椀	—	(9.2)	(1.0)	5	外面: 10YR7/4 にぶい黄 橙 内面: 5Y2/1 黒 断面: 10YR7/4 にぶい黄 橙	内・外面: ナデ	9世紀末～10 世紀
16	9	—	1	6L-9i	第5層	須恵器	杯蓋	(13.9)	—	(1.3)	5	内・外・断面: N5/ 灰	内・外面: 回転ナデ	9世紀前半
16	10	—	1	6L-8j	第5層	須恵器	杯	—	(7.6)	(1.6)	5	内・外・断面: N7/ 灰白	内・外面: 回転ナデ	9世紀
16	11	—	1	6L-8j	第5層	土師器	皿	(12.3)	—	(2.1)	5	内・外・断面: 10YR7/4 にぶい黄 橙	口縁部: 横方向のナデ 外面: ナデ? 摩滅のため調整不 明 内面: ナデ	11世紀前半
16	12	—	1	6L-9i	第5層	土師器	甕	(17.6)	—	(2.1)	5	外面: 10YH4/1 黄灰 内面: 10YR6/6 明黄灰 断面: 2.5Y8/3 淡黄	内・外面: 横方向のナデ	9世紀前半
16	13	22	3	7N-1e	第5層	瓦	平瓦	(5.4)	(4.3)	1.8	5	凹・凸・断面: 5Y7/1 灰 白	凹面: 布目痕 凸面: 縄目タキ	古代
16	14	22	1	6L-8j	第5層	瓦	平瓦	(14.5)	(10.0)	2.2	10	凹・凸・断面: N8/ 灰白	凹面: 布目痕 凸面: ナデ	古代
16	15	22	1	6L-9i	第5層	瓦	丸瓦	(9.0)	(6.3)	2.2	5	凹・凸・断面: 2.5Y8/3 淡 黄	凹面: 布目痕 凸面: 摩滅のため調整不明	古代
17	16	—	1	6M-8a	第6-1 層	黒色土器	椀	—	(8.2)	(1.3)	5	外面: 7.5YR7/3 にぶい橙 内面: N3/ 暗灰 断面: 7.5YR7/3 にぶい橙	外面: 摩滅・割離のため調整不 明 内面: ミガキ	9世紀～10世 紀前半
17	17	—	1	6L-8- 9h	第6-1 層	黒色土器	椀	—	(8.0)	(1.25)	5	外面: 10YR8/2 灰白 内面: N3/ 暗灰 断面: 10YR7/2 にぶい黄 橙	外面: 摩滅のため調整不明 内面: ミガキ	9世紀～10世 紀前半
17	18	22	1	6L-8- 7h	第6-1 層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.75)	5	外面: 2.5Y6/1 黄灰 内面: 2.5Y8/1 灰白 断面: 2.5Y8/1 灰白	外面: ケズリ つまみ に回転ナデ 内面: 回転ナデ	8世紀
17	19	—	2	6N-8a	第6-1 層	須恵器	杯蓋	(15.2)	—	(0.9)	5	外面: N6/ 灰 内面: 5Y6/1 灰 断面: 7.5YR6/4 にぶい橙	内・外面: 回転ナデ	8世紀後半～ 9世紀初頃
17	20	—	1	6L-9h	第6-1 層	須恵器	杯蓋	(20.9)	—	(1.7)	5	内・外・断面: N6/ 灰	内・外面: 回転ナデ	8世紀
17	21	22	3	7M-2j	第6-1 層	須恵器	杯蓋	(11.2)	—	3.45	15	外面: 2.5Y5/1 黄灰 内面: N7/ 灰白 断面: N7/ 灰白	内・外面: 回転ナデ	7世紀前半

神田遺跡 番号	遺物 番号	写真 撮影 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期
								口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
17	22	—	1	6L-8・7h	第6-1層	須恵器	杯	—	(7.6)	(1.5)	5	外面: 2.5Y7/1 灰白 内面: 2.5Y8/1 灰白 断面: 2.5Y8/1 灰白	内・外面: 回転ナデ	8世紀後半～9世紀初頭
17	23	—	1	6L-8・7h	第6-1層	須恵器	杯	—	(8.9)	(1.8)	5	内・外・断面: 2.5Y7/1 灰白	内・外面: 回転ナデ	8世紀後半～9世紀初頭
17	24	22	3	7N-2a	第6-1層	須恵器	杯	—	8.3	(1.85)	25	外面: N5/ 灰 内面: 2.5Y7/1 灰白 断面: 2.5Y8/1 灰白	外面: 回転ナデ 底部にナデ 内面: 回転ナデ	8世紀後半～9世紀初頭
17	25	—	2	6N-8a	第6-1層	須恵器	壺	—	(6.0)	(2.4)	5	内・外・断面: N7/ 灰白	内・外面: 回転ナデ	8世紀
17	26	22	3	7M-2j	第6-1層	土師器	椀	(14.8)	—	4.2	30	内・外・断面: 10YR8/3 浅黄橙	口縁部: 横方向のナデ 外面: ナデ ユビオサエ 内面: ナデ	8世紀
17	27	22	3	7M-1j	第6-1層	土師器	杯	(18.8)	—	(3.0)	5	外面: 10YR6/3 にぶい黄橙 内面: 10YR6/3 にぶい黄橙 断面: 5Y5/6 明赤橙	外面: ナデ 内面: 放射状暗文	8世紀前半
17	28	—	1	6L-8・9h	第6-1層	土師器	皿	(20.0)	—	(2.5)	5	内・外・断面: 2.5Y7/4 浅黄	外面: 摩滅のための調整不明 裏面 内面: 放射状暗文 螺旋状暗文	8世紀前半
17	29	22	3	7N-2a	第6-1層	土師器	甕	(27.8)	—	(6.0)	5	内・外・断面: 2.5Y8/2 灰白	外面: 横方向のナデ ユビオサエ ハケ後ナデ 内面: ハケ後ナデ	7世紀前半
17	30	—	4	6N-9d	第6-1層	弥生土器	高杯	—	—	(8.0)	10	外面: 2.5Y7/4 浅黄 内面: 2.5Y7/4 浅黄 断面: 2.5Y4/1 黄灰	内・外面: 摩滅・割離のための調整不明	弥生後期
17	31	—	4	6N-9e	第6-1層	弥生土器	鉢	(31.0)	—	(4.6)	5	外面: 2.5Y7/6 明黄橙 内面: 2.5Y7/6 明黄橙 断面: 2.5Y7/2 灰黄	内・外面: 摩滅のための調整不明	弥生後期
17	32	—	3	7N-2a	第6-1層	弥生土器	鉢	—	(4.7)	(2.8)	5	外面: 10YR7/3 にぶい黄橙 内面: 10YR7/3 にぶい黄橙 断面: 10YR5/1 褐灰	内・外面: ユビオサエ	弥生後期後半
17	33	22	3	7N-1a	第6-1層	古式土師器	鉢	(8.4)	—	(5.0)	5	外面: 2.5Y7/3 浅黄 内面: 2.5Y6/3 にぶい黄橙 断面: 2.5Y7/3 浅黄	口縁部: 横方向のナデ 外面: タタキ後ナデ 内面: ナデ	庄内式期
17	34	—	3	7M-2j	第6-1層	弥生土器	甕	(13.8)	—	(3.0)	5	外面: 10YR6/2 灰黄褐 内面: 10YR6/3 にぶい黄橙 断面: 10YR6/3 にぶい黄橙	内・外面: 摩滅・割離のための調整不明	弥生後期
17	35	—	3	7N-2a	第6-1層	弥生土器	甕	—	(6.0)	(3.8)	5	外面: 2.5Y7/3 浅黄 内面: 2.5Y6/2 灰黄・2.5Y4/1 黄灰 断面: 2.5Y7/3 浅黄	外面: タタキ後ナデ 内面: 摩滅のための調整不明	弥生後期
17	36	—	4	6N-9d	第6-1層	弥生土器	甕	—	5.2	(7.6)	25	外面: 2.5Y8/3 淡黄 内面: 5Y7/1 灰白 断面: 2.5Y8/1 灰白	内・外面: 摩滅・割離のための調整不明	弥生後期
17	37	22	1	6M-7e	第6-1層	瓦	平瓦	(7.8)	(8.2)	2.3	5	凹面: 2.5Y6/2 灰黄 凸面: 5Y6/1 灰 断面: 10YR6/2 灰黄褐	凹面: 布目痕 凸面: 斜格子タタキ	古代
17	38	22	1	6L-8	第6-1層	瓦	丸瓦	(7.8)	(5.6)	1.7	5	凹面: 2.5Y7/2 灰黄 凸面: 2.5Y7/3 浅黄 断面: 2.5Y7/2 灰黄	凹面: 布目痕 凸面: ナデ	古代
17	39	22	3	7M-2j	第6-1層	土製品	円筒埴輪	(4.7)	(7.8)	1.7	5	外面: 10YR7/3 にぶい黄橙 内面: 10YR7/4 にぶい黄橙 断面: 5YR2/6 橙	外面: 横方向のナデ 摩滅のための調整不明 内面: ナデ	古墳中期
17	40	23	1	6M-7e	第6-1層	土製品	羽口	(3.8)	(4.1)	1.7	5	外面: 5Y3/1 灰 内面: 10YR6/6 明黄褐 断面: 7.5YR6/4 にぶい橙	外面: ナデ ガラス質付着 内面: ナデ	
17	41	25	1	6L-9h	第6-1層	木製品	火付棒	7.3	1.5	0.8	—	—	先端炭化	

神田遺物 番号	写真 図録 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
18 42	—	1	6M-8d	第6-2層	黒色土器	椀	(12.5)	—	(2.45)	5	外面: 10YR8/2 灰白 内面: 2.5Y2/1 黒 断面: 10YR8/2 灰白	外面: ミガキ ナデ 内面: ミガキ	9世紀~10世紀前半
18 43	—	1	6L-9i	第6-2層	須恵器	杯蓋	(13.4)	—	(1.3)	8	外面: N5/ 灰 内面: N6/ 灰 断面: N6/ 灰	内・外面: 回転ナデ	8世紀後半
18 44	—	3	7N-1d-1e	第6-3層	須恵器	杯	—	(11.8)	(1.6)	5	外面: N6/ 灰 内面: N6/ 灰 断面: 5Y6/1 褐灰	外面: 回転ナデ 底部にナデ 内面: 回転ナデ	8世紀後半~9世紀初頭
18 45	23	1	6L-9h	第6-2層	須恵器	壺	—	3.9	(2.75)	5	外面: N7/ 灰白 内面: N6/ 灰 断面: N6/ 灰	外面: 回転ナデ 底部に糸切り 筋 内面: 回転ナデ	8~9世紀
18 46	—	1	6M-7d	第6-2層	須恵器	壺	—	(10.4)	(2.85)	5	外面: N6/ 灰 内面: N7/ 灰白 断面: 5YR6/2 灰褐	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ ユビオサエ	8~9世紀
18 47	—	1	6L-8h	第6-2層	須恵器	壺	—	(10.2)	(2.1)	5	外面: 5Y6/1 灰 内面: 2.5Y7/1 灰白 断面: 10YR7/2 にぶい黄 緑	外面: ケズリ 底部に回転 ナデ 内面: 回転ナデ ナデ	8~9世紀
18 48	—	1	6L-8h	第6-2層	須恵器	壺	—	(12.0)	(3.6)	5	内・外・断面: N7/ 灰白	外面: 回転ナデ ケズリ ナデ 内面: 回転ナデ	8~9世紀
18 49	—	1	6M-8a	第6-2層	土師器	皿	(10.7)	—	2.2	25	外面: 2.5YR/2 灰白 内面: 10YR7/3 にぶい黄 緑 断面: 10YR7/3 にぶい黄 緑	外面: 横方向のナデ 底部は摩 滅・調整のため調整不明 内面: 摩滅・調整のため調整 不明	8世紀後半~9世紀初頭
18 50	—	1	6L-8i	第6-2層	土師器	皿	(24.6)	—	2.3	5	外面: 10YR7/2 にぶい黄 緑 内面: 10YR7/1 灰白 断面: 10YR7/2 にぶい黄 緑	外面: 横方向のナデ ヘラケズ リ 内面: 横方向のナデ ナデ	8世紀後半~9世紀初頭
18 51	23	1	6L-8i	第6-2層	瓦	平瓦	(9.4)	(8.8)	2.7	5	凹面: N7/ 灰白 凸面: 10YR8/1 灰白 断面: 10YR8/1 灰白	凹面: 布目痕 凸面: 縄目タタキ	古代
18 52	23	1	6L-9i	第6-2層	瓦	平瓦	(5.4)	(9.2)	1.7	5	凹面: 2.5YR/3 淡黄 凸面: 2.5YR/4 淡黄 断面: 7.5YR/6 橙	凹面: 布目痕 凸面: 縄目タタキ	古代
24 53	—	3	7M-2h-2i	21土坑	須恵器	杯蓋	(14.7)	—	3.4	20	外面: N6/ 灰 内面: N7/ 灰白 断面: N6/ 灰	外面: 回転ナデ ヘラケズ リ 内面: 回転ナデ	6世紀後半
24 54	23	4	6N-10g	15土坑	須恵器	甕	(33.4)	—	(10.0)	5	外面: 5Y5/1 灰 内面: 5Y6/1 灰 断面: N8/ 灰白	外面: 口縁~頸部に回転ナデ 凹線文4条 ヘラ指波状 文2帯 肩部にタタキ 内面: 回転ナデ 頸部にユビオ サエ後回転ナデ後半	6世紀前半
25 55	23	3	7N-2a	61土坑	弥生土器	器台	(15.0)	—	(1.5)	5	外面: 10YR7/4 にぶい黄 緑 内面: 10YR7/4 にぶい黄 緑 断面: 2.5Y7/7 灰黄	外面: ナデ 口縁端部に凹線文 1条 内面: 磨損波状文1帯 ミガキ	弥生後期中葉
25 56	23	3	7N-2a	61土坑	弥生土器	器台	—	(14.6)	(1.65)	5	外面: 2.5Y7/2 灰黄 内面: 2.5Y7/2 灰黄 断面: 2.5YR/2 灰黄	内・外面: ミガキ 横方向の ナデ	弥生後期
25 57	—	3	7N-2a	61土坑	弥生土器	壺	—	(5.8)	(3.85)	5	外面: 10YR7/2 にぶい黄 緑 内面: 10YR5/1 褐灰 断面: 10YR6/2 灰黄褐	内・外面: 摩滅のため不明瞭 ユビオサエ	弥生後期
26 58	23	3	7M-2j-1j	68土坑	須恵器	杯	(9.8)	4.0	3.5	50	外面: N5/ 灰 内面: N6/ 灰 断面: N6/ 灰	外面: 回転ナデ ケズリ後 一定方向のナデ 内面: 回転ナデ	7世紀前半
26 59	23	3	7M-2j-1j	68土坑	須恵器	高杯	—	9.7	(7.0)	50	外面: N7/ 灰白 内面: 7.5Y6/1 灰 断面: 5Y5/1 灰	外面: 回転ナデ 凹線文 内面: 回転ナデ	7世紀前半
26 60	—	3	7M-2j-1j	68土坑	土師器	杯	(13.8)	—	(4.1)	10	外面: 10YR4/1 褐灰 内面: 10YR5/2 灰黄褐 断面: 10YR6/3 にぶい黄 緑	外面: 摩滅のため調整不明 内面: 横方向のナデ ナデ 放射状凹文2段	7世紀前半

神田遺物 番号	遺物 図版 番号	写真 図版 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期
								口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
27	61	23	3	7M-1j	70 土坑	須置器	杯蓋	11.0	6.0	3.8	70	外面：N4/ 灰 内面：2.5Y6/1 黄灰 断面：2.5Y6/1 黄灰	外面：回転ナデ ケズリ 内面：回転ナデ	7世紀前半
27	62	23	3	7M-1j	70 土坑	土師器	甕	(24.5)	—	(9.0)	5	外面：10YR6/3 にぶい黄 内面：10YR6/3 にぶい黄 断面：10YR7/3 にぶい黄	口縁部：横方向のナデ 外面：エビオサエ ハケ 黒斑 内面：ハケ後ケズリ後ナデ	7世紀後半
27	63	23	3	7M-1j	70 土坑	土師器	甕	20.3	—	(17.6)	40	外面：10YR7/2 にぶい黄 内面：10YR7/4 にぶい黄 断面：7.5YR7/3 にぶい黄	口縁部：横方向のナデ 外面：ハケ後板状工具による ナデ スス付着 内面：ケズリ コゲ付着	7世紀後半
28	64	—	3	7M-1i	71 土坑	弥生土器	甕	(17.6)	—	(5.5)	5	外面：7.5YR6/6 橙 内面：10YR7/4 にぶい黄 断面：10YR7/4 にぶい黄 ・ 7.5YR6/6 橙	外面：体部にタタキ 内面：横方向のナデ？ 摩滅のため調整不明	弥生後期後半
28	65	—	3	7M-1i	71 土坑	弥生土器	甕	—	4.7	(8.3)	5	外面：2.5YR/2 灰白 内面：2.5YR/3 淡黄 断面：2.5YR/3 淡黄	外面：底部にエビオサエ後ナデ 内面：摩滅のため調整不明	弥生後期
28	66	—	3	7M-1i	71 土坑	弥生土器	甕	—	5.3	(8.8)	5	外面：10YR3/1 黒 内面：10YR2/1 黒 断面：10YR6/3 にぶい黄	外面：タタキ エビオサエ スス付着 内面：ナデ コゲ付着	弥生後期
29	67	—	3	7N-1a	76 土坑	弥生土器	甕	—	(5.4)	(4.75)	5	外面：2.5Y6/2 灰黄 内面：2.5Y5/2 暗灰黄 断面：2.5Y6/3 にぶい黄	外面：エビオサエ後ナデ 黒斑 内面：ナデ	弥生後期
30	68	—	3	7N-2a	83 土坑	弥生土器	甕	(16.5)	—	(2.4)	5	内・外・断面：2.5YR/3 淡黄	内・外面：摩滅のため 調整不明	弥生後期
32	69	—	2	7M-1i	87 土坑	弥生土器	高杯	—	(12.2)	(2.5)	5	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y5/1 黄灰	内・外面：割離のため調整不明 円形透孔あり	弥生後期
32	70	23	3	7M-1i	87 土坑	弥生土器	鉢	(5.6)	2.8	4.4	80	外面：10YR8/3 浅黄橙 内面：2.5Y5/1 黄灰 断面：2.5Y5/1 黄灰	外面：摩滅のため調整不明 黒斑 内面：ナデ	弥生後期
32	71	—	2	7M-1i	87 土坑	弥生土器	鉢	(28)	—	(2.0)	5	内・外・断面：2.5Y7/2 灰黄	外面：口縁面にキザミ 割離の ため調整不明 内面：割離のため調整不明	弥生後期後半
36	72	—	4	6N-9e	112 土坑	弥生土器	甕	—	4.3	(6.7)	10	外面：10YR7/6 明黄褐 内面：10YR8/1 灰白 断面：10YR7/2 にぶい黄	内・外面：摩滅・割離のため調 整不明	弥生後期
39	73	23	4	6N-9e	138 土坑	弥生土器	鉢	(14.7)	4.2	10.0	30	外面：2.5YR/1 灰白 内面：10YR8/1 灰白 断面：10YR7/2 にぶい黄 橙	外面：横方向のナデ ハケ後ミガキ エビオサエ 黒斑 底部にナデ 内面：ミガキ	弥生後期末
42	74	—	4	6N-9d- 10d	164 土坑	古式 土師器	甕	(19.2)	—	(7.5)	10	外面：10YR7/1 灰白 内面：2.5Y6/2 灰黄 断面：2.5Y7/1 灰白	外面：横方向のナデ タタキ後ハケ スス付着 内面：横方向のナデ エビオサエ後ナデ	注内式期
40	75	—	4	6N-9d- 10d	164 土坑	弥生土器	甕	—	(6.2)	(2.7)	5	外面：2.5YR/1 灰白 内面：10YR8/1 灰白 断面：2.5Y7/1 灰白	内・外面：割離のため調整不明	弥生後期
40	76	—	4	6N-9d	168 土坑	弥生土器	甕	—	6.0	(3.5)	5	外面：2.5YR/2 灰白 内面：2.5YR/3 淡黄 断面：2.5YR/2 灰白	外面：ミガキ 黒斑 内面：摩滅のため調整不明	弥生後期
42	77	—	4	6N-9d	168 土坑	弥生土器	甕	(15.0)	—	(7.2)	5	内・外・断面：2.5YR/2 灰白	外面：タタキ 内面：摩滅のため調整不明	弥生後期
42	78	23	4	6N-9d	168 土坑	弥生土器	甕	—	6.1	(13.5)	20	外面：10YR8/4 浅黄橙 内面：10YR6/4 にぶい黄 断面：10YR8/4 浅黄橙	外面：タタキ 黒斑 内面：摩滅・割離のため調整 不明	弥生後期
45	79	—	4	6N-9f	190 土坑	弥生土器	甕	—	5.5	(4.0)	5	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y7/1 灰白 断面：2.5Y7/2 灰黄	外面：タタキ後ナデ 内面：板状工具によるナデ	弥生後期

神宮遺物 番号	遺物 番号	写真 図版 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	層種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期
								口徑 長さ	底径 幅	底厚				
45	80	24	4	6N-9f	190土坑	弥生土器	甕	—	6.3	(21.5)	30	外面：10YR6/2 灰黄褐色 内面：2.5Y7/2 灰黄褐色 断面：10YR7/2 に近い黄褐色	外面：タタキ後ハケ後ナデ スス付着 内面：ナデ コダ付着	弥生後期
45	81	—	4	6N-9e	193土坑	弥生土器	甕	—	5.0	(4.0)	5	外面：2.5Y7/2 灰黄褐色 内面：2.5Y8/1 灰白 断面：2.5Y8/1 灰白	内・外面：摩滅のため調整不明	弥生後期
45	82	24	4	6N-9e	193土坑	古式土器	甕	(13.1)	—	(9.6)	5	外面：2.5Y7/3 浅黄褐色 内面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y4/1 黄灰	外面：横方向のナデ ハネ口縁部にスス付着 内面：エビオサエケズリ	庄内式期新段階
46	83	—	4	6N-9e	196土坑	弥生土器	甕	—	4.0	(2.0)	5	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：2.5Y4/1 黄灰 断面：2.5Y6/1 黄灰	外面：摩滅・割離のため調整不明 内面：ナデ	弥生後期
46	84	—	4	6N-9e	197土坑	弥生土器	甕	—	(5.3)	(4.0)	5	外面：2.5Y8/1 灰白 内面：7.5YR8/2 灰白 断面：2.5Y7/1 灰白	内・外面：摩滅・割離のため調整不明	弥生後期
51	85	—	4	6N-9d-9e	269土坑	弥生土器	広口甕	(16.8)	—	(5.0)	5	外面：2.5Y8/2 灰白 内面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y6/2 灰黄褐色	外面：横方向のナデ 頸部は摩滅・割離のため調整不明 内面：摩滅・割離のため調整不明	弥生後期後半
54	86	—	2	6N-8b	305土坑	弥生土器	甕	—	4.9	(1.7)	5	外面：10YR7/3 に近い黄褐色 内面：N3/ 緑灰 断面：10YR7/2 に近い黄褐色	外面：ナデ 内面：エビオサエ後ナデ	弥生後期
56	87	24	2	6M-10f	311土坑	弥生土器	高杯	—	(14.8)	(6.2)	5	外面：2.5Y6/2 灰黄褐色 内面：2.5Y7/2 灰黄褐色 断面：2.5Y8/1 灰白・2.5Y5/1 黄灰	外面：ハケ後ミガキ 内面：横方向のナデ ナデ	弥生後期
56	88	—	2	7M-11 6M-10f	311土坑	弥生土器	甕	(12.7)	—	(3.1)	5	外面：10YR8/3 浅黄褐色 内面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y8/2 灰白	外面：横方向のナデ タタキ 内面：横方向のナデ	弥生後期中葉
56	89	24	2	7M-11	312土坑	弥生土器	甕	(12.6)	4.3	12.9	50	外面：10YR7/2 に近い黄褐色 内面：10YR7/3 に近い黄褐色 断面：10YR6/1 黄灰	口縁部：横方向のナデ 外面：ハケ後ナデ 黒炭 内面：ナデ	弥生後期中葉
58	90	—	2	6N-10a	320土坑	弥生土器	甕	—	4.6	(4.2)	5	外面：5Y7/2 灰白 内面：2.5Y6/2 灰黄褐色 断面：7.5YR6/3 に近い黄褐色	内・外面：摩滅・割離のため調整不明	弥生後期
62	91	24	4	6N-9e	267ピット	弥生土器	広口甕	(15.8)	—	(4.9)	5	外面：5Y7/1 灰白 内面：2.5Y7/2 灰黄褐色 断面：5Y7/1 灰白・2.5Y5/1 黄灰	口縁部：横方向のナデ 外面：割離のため調整不明 内面：ナデ	弥生後期後半
62	92	24	4	6N-9c 10e	272ピット	弥生土器	広口甕	15.1	—	(5.0)	10	外面：2.5Y8/1 灰白 内面：2.5Y8/1 灰白 断面：2.5Y8/2 灰白	外面：摩滅・割離のため調整不明 内面：頸部下エビオサエ 摩滅・割離のため調整不明	弥生後期後半
62	93	24	4	6N-10e	273ピット	弥生土器	鉢	(24.0)	—	(9.5)	10	外面：7.5YR8/4 浅黄褐色 内面：10YR8/3 浅黄褐色 断面：10YR8/2 灰白	外面：ハケ後ミガキ スス付着 内面：ミガキ	弥生後期後半
66	94	—	3	6M-10f	90溝	弥生土器	長頸甕	(10.5)	—	(4.3)	5	外面：10YR6/2 灰黄褐色 内面：10YR6/1 黄灰 断面：2.5Y6/1 黄灰	外面：横方向のナデ ハネ 内面：横方向のナデ	弥生後期中葉
66	95	24	2	7N-1a	90溝	弥生土器	広口甕	(9.4)	—	(4.5)	5	外面：10YR8/2 灰白 内面：10YR8/2 灰白 断面：2.5Y7/2 灰黄褐色	内・外面：摩滅のため調整不明	弥生後期
66	96	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	広口甕	(10.8)	—	(6.05)	5	外面：10YR7/2 ～ 7/3 に近い黄褐色 内面：10YR7/3 に近い黄褐色 断面：10YR7/2 に近い黄褐色	内・外面：摩滅のため調整不明	弥生後期
66	97	—	3	7M-1a	90溝	弥生土器	広口甕	(12.2)	—	(3.7)	5	外面：2.5Y8/2 灰白 内面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y5/1 黄灰	外面：摩滅・割離のため調整不明 内面：ナデ エビオサエ	弥生後期後半
66	98	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	広口甕	(15.8)	—	(5.15)	5	外面：10YR8/2 灰白 内面：2.5Y7/2 灰黄褐色 断面：10YR8/2 灰白	外面：摩滅のため調整不明 内面：エビオサエ	弥生後期後半

神田 遺物 番号	写真 図版 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
66 99	—	2	7M-1J	90溝	弥生土器	広口 壺	(12.0)	—	(8.4)	10	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y7/1 灰白 断面：7.5YR5/4 に近い 黄	口縁～頸部；横方向のナデ 外面：ハケ後ミガキ 内面：ユビオサエ後ナデ	弥生後期
66 100	24	3	7N-2a	90溝	弥生土器	広口 壺	(18.1)	—	(2.8)	5	外面：10YR6/4 黄褐 内面：10YR6/4 黄褐 断面：7.5YR5/4 に近い 黄	外面：横方向のナデ 口縁部に 凹線文3条後円形浮文 内面：摩滅のため調整不明	弥生後期前半
66 101	—	2	6N-10a	90溝	弥生土器	壺	—	(7.6)	(3.1)	5	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y6/1 黄灰 断面：2.5Y7/2 灰黄	外面：摩滅・割離のため調整不 明 内面：ナデ	弥生後期
66 102	—	2	6N-10a	90溝	弥生土器	壺	—	5.5	(3.3)	5	外面：2.5Y8/2 灰白 内面：10YR8/2 灰白 断面：5Y7/2 灰白	内・外面：ミガキ？割離のため 調整不明 内面：底部にナデ	弥生後期
66 103	—	2	6M-10f	90溝	弥生土器	壺	—	5.0	(7.5)	5	外面：5Y8/2 灰白 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y8/2 灰白	外面：ミガキ 裏面 内面：ハケ後ナデ	弥生後期
66 104	24	3	7N-1c	90溝	弥生土器	壺	—	4.9	(8.9)	5	外面：2.5Y7/3 浅黄 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y7/2 灰黄	外面：ミガキ ユビオサエ ナデ 内面：ユビオサエ 体部は摩滅 のため調整不明	弥生後期
66 105	24	3	7N-2a	90溝	弥生土器	壺	—	5.1	(12.8)	10	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y7/3 浅黄 断面：2.5Y6/3 に近い 黄	内・外面：ミガキ	弥生後期
66 106	24	3	7N-2a	90溝	弥生土器	小形 壺	—	4.0	(4.7)	30	外面：10YR8/2 灰白 内面：10YR8/1 ～ 8/2 灰 白 断面：2.5Y6/2 灰黄	外面：ユビオサエ 体部摩滅の ため調整不明 底部ユビ オサエ ナデ 内面：ユビオサエ ナデ	弥生後期
66 107	24	3	7M-2a	90溝	弥生土器	鉢	(26.2)	—	(8.6)	5	外面：10YR7/2 に近い 黄褐 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y6/2 灰黄	外面：ミガキ 頸部ハケ後 内面：口縁に沈線 ミガキ	弥生後期後半
67 108	24	2	6M-10f	90溝	弥生土器	高杯	(19.0)	—	(3.8)	5	外面：10YR7/2 に近い 黄褐 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y5/2 閉灰黄	内・外面：ミガキ	弥生後期後半
67 109	24	3	7N-1c	90溝	弥生土器	高杯	(26.6)	—	(3.65)	5	外面：2.5Y8/3 淡黄 内面：2.5Y8/3 淡黄 断面：2.5Y8/2 灰白	外面：横方向のナデ 花縁1条 内面：横方向のナデ後ミガキ	弥生後期後半
67 110	—	2	6M-10f	90溝	弥生土器	高杯	—	(10.2)	(2.2)	5	外面：2.5Y7/2 黄灰 内面：2.5Y7/2 黄灰 断面：2.5Y8/1 灰白	内・外面：横方向のナデ	弥生後期
67 111	—	3	7N-1c	90溝	弥生土器	高杯	—	—	(5.9)	10	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：10YR5/3 に近い 黄褐	内・外面：摩滅のため調整不明	弥生後期後半
67 112	—	2	6M-10f	90溝	弥生土器	高杯	—	—	(6.4)	10	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y7/2 灰黄 + 2.5Y5/1 灰	外面：沈線2条 ミガキ？摩滅 のため調整不明	弥生後期後半
67 113	25	3	7N-2a	90溝	弥生土器	高杯	—	—	(9.1)	30	外面：5YR7/4 に近い 黄 内面：7.5Y7/4 に近い 黄 断面：10YR7/2 に近い 黄褐 + 10YR6/1 黄灰	円形透孔あり 内・外面：摩滅のため調整不明	弥生後期
67 114	24	3	7N-1c	90溝	弥生土器	甕	(15.8)	—	(4.1)	5	外面：10YR7/3 に近い 黄褐 内面：10YR7/2 に近い 黄褐 断面：2.5Y8/2 灰白	外面：横方向のナデ ハケ 摩滅・割離のため調整 不明 内面：ナデ ユビオサエ	弥生後期後半
67 115	24	2	6M-10f	90溝	弥生土器	甕	(17.0)	—	(3.2)	5	外面：7.5YR7/6 橙 内面：7.5YR7/4 に近い 黄褐 断面：10YR7/4 に近い 黄褐	内・外面：摩滅のため調整不明	弥生後期後半
67 116	24	2	6M-10f	90溝	弥生土器	甕	(18.3)	—	(3.0)	5	外面：10YR6/3 に近い 黄褐 内面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y8/2 灰白	外面：横方向のナデ 口縁部に スス付着 内面：摩滅・割離のため 調整不明	弥生後期後半
67 117	24	2	6M-10f	90溝	弥生土器	甕	(12.6)	—	(7.0)	5	内・外・断面：7.5YR7/4 に近い 黄	外面：横方向のナデ タタキ 内面：摩滅のため調整不明	弥生後期後半
67 118	25	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	16.2	—	(23.7)	50	外面：10YR7/2 に近い 黄褐 内面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y8/2 灰白	口縁部：横方向のナデ スス付着 外面：タタキ後ハケ スス付着 内面：ハケ後ナデ ヲダ付着	弥生後期

神田遺物 番号	写真 図版 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
67 119	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	3.8	(3.0)	5	外面：10YR7/2にぶい黄 褐色 内面：10YR7/2にぶい黄 褐色 断面：2.5Y8/2灰白	外面：タタキ 内面：ナデ	弥生後期
67 120	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	4.8	(3.0)	5	外面：2.5Y6/1 黄灰 内面：2.5Y4/1 黄灰 断面：2.5Y5/1 黄灰	外面：タタキ後ナデ ：底部にナデ 内面：ハケ	弥生後期
67 121	—	3	7M-1j	90溝	弥生土器	甕	—	4.6	(3.6)	5	外面：7.5YR5/2 灰褐 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：5YR5/6 明赤褐	外面：タタキ 底部にナデ 内面：ナデ	弥生後期
67 122	—	3	7N-1a	90溝	弥生土器	甕	—	5.5	(3.3)	5	外面：10YR7/2にぶい黄 褐色 内面：2.5Y5/1 黄灰 断面：2.5Y7/3 浅黄	外面：タタキ 内面：ユビオサエ 摩滅のため調整不明	弥生後期
67 123	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	(5.0)	(4.4)	5	外面：10YR7/2にぶい黄 褐色 内面：10YR7/2にぶい黄 褐色 断面：10YR7/1 灰白	外面：タタキ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ	弥生後期
67 124	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	4.6	(4.6)	5	外面：2.5Y7/4 浅黄 内面：10YR6/2 灰黄褐 断面：7.5YR5/6 明赤	外面：タタキ 内面：ナデ	弥生後期
67 125	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	(5.8)	(6.4)	10	外面：5Y7/2 灰白 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：7.5YR5/4 にぶい褐	外面：タタキ 内面：ハケ後ナデ	弥生後期
67 126	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	3.9	(6.6)	5	外面：10YR7/1 灰白 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y8/3 浅黄	外面：タタキ ユビオサエ 内面：ナデ?ミガキ?摩滅のた め調整不明	弥生後期
67 127	25	2	7M-1j	90溝	弥生土器	甕	—	(5.9)	(8.1)	5	外面：2.5Y7/3 浅黄 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：2.5Y7/2 灰黄・ 5Y5/1 灰	外面：タタキ 内面：ハケ後ナデ	弥生後期
67 128	25	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	(4.5)	(21.9)	25	外面：10YR6/3 にぶい黄 褐色 内面：10YR6/3 にぶい黄 褐色 断面：10YR6/2 灰黄褐	外面：タタキ後ナデ スス付着 底部にナデ 内面：砥状工具によるナデ コゲ付着	弥生後期後半
67 129	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	4.8	(2.5)	5	外面：2.5Y6/1 黄灰 内面：2.5Y7/1 灰白 断面：2.5Y6/1 黄灰	内・外面：摩滅・割損のため調 整不明	弥生後期
67 130	—	3	7N-2a	90溝	弥生土器	甕	—	5.0	(3.65)	5	外面：2.5Y7/2 灰黄 内面：10YR7/2 にぶい黄 褐色 断面：10YR7/2 にぶい黄 褐色	内・外面：ユビオサエ	弥生後期
67 131	—	3	7N-2b	90溝	弥生土器	甕	—	5.2	(4.4)	5	外面：10YR7/3 にぶい黄 褐色 内面：2.5Y6/1 黄灰 断面：2.5Y7/2 灰黄	外面：摩滅のため調整不明 ナデ 内面：摩滅のため調整不明	弥生後期
67 132	—	2	7M-1j	90溝	弥生土器	甕	—	(5.8)	(5.9)	5	外面：2.5Y4/1 黄灰 内面：2.5Y7/2 灰黄 断面：5Y7/2 灰白	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ ナデ	弥生後期
77 133	25	1	6M-7e	283 礎 集中 1層	緑釉陶器	皿	—	(7.9)	(2.1)	5	外面：7.5Y6/3 オリーブ 内面：7.5Y6/3 オリーブ 断面：2.5Y8/2 灰白	内面：黒線1条	9世紀
77 134	—	1	6M-7e	283 礎 集中内	須恵器	平瓶	—	—	(1.1)	5	外面：5Y6/2 灰オリーブ 内面：5Y8/1 灰白 断面：5Y8/1 灰白	外面：自然釉 内面：ナデ 指押丸	8～9世紀
77 135	—	1	6M-8f	283 礎 集中 最下段	土師器	甕	(19.8)	—	(3.6)	5	外面：2.5Y7/3 浅黄 内面：2.5Y6/3 にぶい黄 褐色 断面：2.5Y6/3 にぶい黄 褐色	外面：横方向のナデ 内面：摩滅のため調整不明	7世紀
77 136	25	1	6M-7d	283 礎 集中 1層	瓦	平瓦	(7.0)	(5.8)	2.6	5	凹面：2.5Y7/2 灰黄 凸面：2.5Y8/2 灰白 断面：2.5Y8/2 灰白	凹・凸面：ナデ	古代
77 137	25	1	6M-8d	283 礎 集中 最下段	木製品	火付 棒	(10.5)	1.2	0.8	—	—	先端：ケズリ 炭化	
77 138	25	1	6M-8d	283 礎 集中 1層	木製品	下駄	(14.5)	8.1	(1.8)	70	—	鼻緒の孔2箇所残存 表面：先端炭化	

神宮遺物 番号	写真 図版 番号	調査 区	区画	遺構・層	種類	器種	法量 (cm)			残存 率 (%)	色調	技法・特徴	時期	
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚					
77	139	—	1	6M-8d	283 礎 集中周辺 1層	木製品	板	(53.1)	(14.3)	2.2	—	—		
78	140	25	1	6M-8a	283 礎 集中周辺 2層	須恵器	杯蓋	(9.0)	—	(2.4)	10	外面：5Y6/1 灰 内面：N7/ 灰白 断面：N7/ 灰白	内・外面：回転ナデ	6世紀末～7世 紀前半
78	141	—	1	6L-8i	283 礎 集中周辺 2層	須恵器	杯	—	(7.8)	(1.5)	5	内・外・断面：2.5Y7/1 灰白	内・外面：回転ナデ	9世紀前半
78	142	—	1	6M-8a	283 礎 集中周辺 2層	須恵器	壺	—	(4.0)	(3.5)	5	外面：N5/ 灰 内面：N5/ 灰 断面：N6/ 灰	外面：回転ナデ 底部糸切り痕 内面：回転ナデ	9世紀
78	143	25	1	6M-8a	283 礎 集中周辺 2層	須恵器	壺	—	(9.4)	(2.7)	5	外面：2.5Y5/1 黄灰 内面：10YR7/1 灰白 断面：10YR7/1 灰白	外面：回転ナデ ケズリ 内面：回転ナデ 底部に一定方 向のナデ	8～9世紀
78	144	25	1	6M-8a	283 礎 集中周辺 2層	土師器	杯	(17.0)	—	(3.4)	5	外面：10YR6/4 にぶい黄 橙 内面：10YR7/4 にぶい黄 橙 断面：10YR7/4 にぶい黄 橙	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ 漆付着	8世紀中葉
78	145	25	1	6M-9d	283 礎 集中周辺 2層	土師器	皿	(20.5)	—	(2.5)	5	内・外・断面：10YR7/4 にぶい黄 橙	外面：横方向のナデ ナデ 内面：横方向のナデ	8世紀後半
78	146	—	1	6M-8a	283 礎 集中周辺 2層	土師器	皿	(21.7)	—	(2.8)	5	外面：2.5Y7/4 浅黄 内面：2.5Y7/4 浅黄 断面：7.5YR6/6 橙	内・外面：厚減割離のため調整 不明	8世紀後半
78	147	—	1	6L-8i	283 礎 集中周辺 2層	土師器	甕	(11.6)	—	(2.0)	5	外面：2.5Y6/3 にぶい黄 内面：2.5Y6/4 にぶい黄 断面：2.5Y7/3 浅黄	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ ナデ	8世紀
78	148	25	1	6M-8a	283 礎 集中周辺 2層	瓦	平瓦	(7.3)	(8.0)	2.4	5	凹面：7.5YR8/4 浅黄橙 凸面：10YR7/2 にぶい黄 橙 断面：7.5YR7/6 橙・ 2.5Y7/1 灰白	凹面：布目 凸面：斜格子タタキ	古代
78	149	25	1	6L-8h	283 礎 集中周辺 2層	木製品	火付 棒	(15.3)	1.0	0.6	—	—	先端炭化	
78	150	25	1	6L-8i	283 礎 集中周辺 2層	木製品	棒	(22.1)	2.1	(1.5)	—	—	—	

写 真 图 版



1. 調査地遠景（南から）



2. 調査前状況（南から）

写真図版 2



1. 1区 北壁断面（南西から）



2. 1区 東壁断面（北西から）



3. 1区 西壁断面（東から）



4. 1区追加調査2・3 西壁断面（東から）



1. 3区 北壁断面（南西から）



2. 3区 南壁断面（北から）



3. 4区 東壁北半断面（北西から）

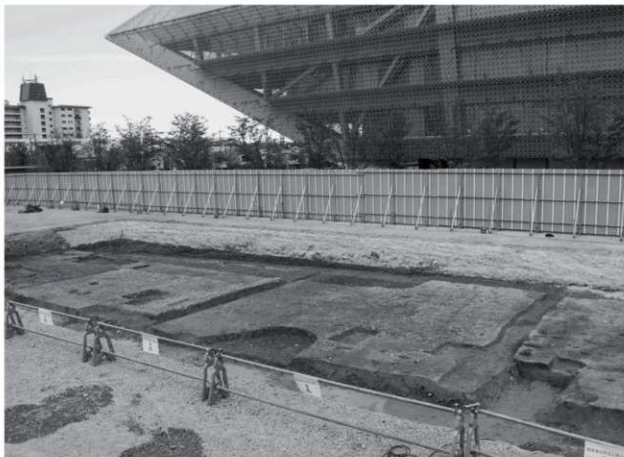


4. 4区 東壁南半断面（北西から）



5. 1区 地震による変形状況（南東から）

写真図版 4



1. 3区南半 第1面 全景（北東より）



2. 3区南半 第1面 第3層（整地層） 検出状況（東から）



1. 1区 第4面 全景 (南から)



2. 1区 第4面 全景 (北から)

写真図版 6

1. 1区追加調査1
第4面 全景 (南東から)



2. 1区追加調査2・3
第4面 全景 (南から)

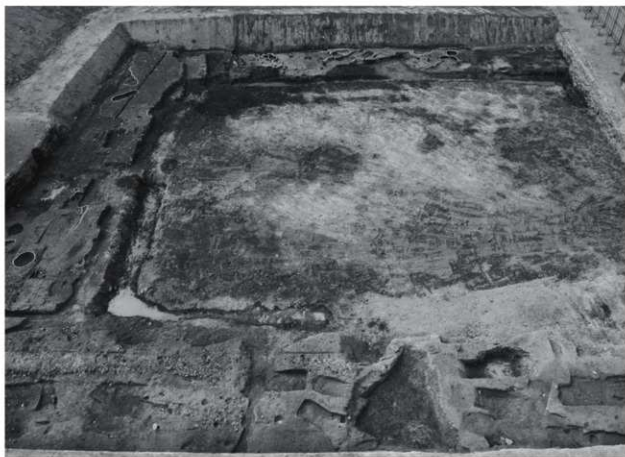


3. 1区追加調査4
第4面 全景 (北から)





1.2区 第4面 全景（北から）



2.2区 第4面 全景（東から）

写真図版 8



1. 3区 第4面 全景 (南から)



2. 3区北半 第4面 全景 (東から)



1. 4区 第4面 全景 (北から)



2. 4区中央部 第4面 全景 (北から)



1. 掘立柱建物1 全景(南から)



2. 掘立柱建物1 38柱穴 断面(西から)



3. 掘立柱建物1 39柱穴 断面(西から)



4. 掘立柱建物1 42柱穴 断面(東から)



5. 掘立柱建物1 44柱穴 断面(東から)



1. 316 井戸・322 溝 全景 (東から)



2. 316 井戸 上半断面 (南から)



3. 316 井戸 下半断面 (南から)



4. 322 溝 断面 (西から)



5. 329 木杭 断面 (南から)



6. 330 木杭 断面 (南から)



7. 2 土坑 断面 (南から)



8. 9 土坑 断面 (南西から)

写真図版 12



1. 15土坑 断面(西から)



2. 15土坑 遺物出土状況(東から)



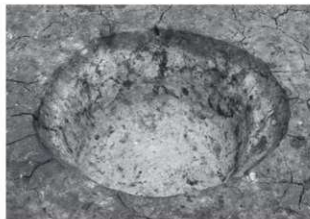
3. 20土坑 断面(南から)



4. 61土坑 断面(南から)



5. 64土坑 断面(南から)



6. 64土坑 完掘状況(南から)



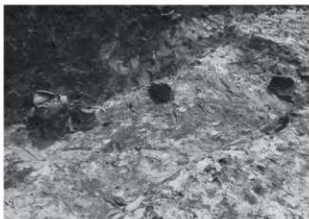
7. 66土坑 断面(南から)



8. 68土坑 断面(西から)



1. 70 土坑 断面（西から）



2. 71 土坑 遺物出土状況（西から）



3. 75 土坑 断面（南から）



4. 85 土坑 断面（東から）



5. 87 土坑 断面（西から）



6. 104 土坑 遺物出土状況（南から）



7. 119 土坑 断面（北西から）



8. 137 土坑 断面（西から）

写真図版 14



1. 138・206 土坑 断面（北西から）



2. 139・269 土坑 断面（北西から）



3. 157 土坑 断面（南から）



4. 164 土坑 断面（西から）



5. 190 土坑 断面（西から）



6. 190 土坑 遺物出土状況（南西から）



7. 198・199 土坑 断面（北西から）



8. 201 土坑 断面（西から）



1. 240 土坑 断面 (南西から)



2. 241 土坑 断面 (西から)



3. 242 土坑 断面 (北西から)



4. 280 土坑 断面 (北から)



5. 298 土坑 断面 (南東から)



6. 301 土坑 断面 (南から)



7. 304 土坑 断面 (南から)



8. 305 土坑 断面 (北から)

写真図版 16



1. 311土坑 断面(南から)



2. 312土坑 断面(南から)



3. 312土坑 遺物出土状況(南から)



4. 314土坑 断面(南東から)



5. 315土坑 断面(南から)



6. 317土坑 断面(南から)



7. 325土坑 断面(北から)



8. 328土坑 断面(西から)



1. 90溝 (2区) 全景
(南西から)



2. 90溝 (3区) 全景
(北東から)



3. 90溝 断面 (北東から)



1. 283 礫集中 最上部 全景 (南西から)



2. 283 礫集中 最上部南半 検出状況 (南西から)



1. 283 礫集中 最下部 全景 (南から)



2. 283 礫集中 最下部南半 検出状況 (南西から)



1. 283 礫集中 Aライン 断面 (南から)



2. 283 礫集中 Bライン上層 断面 (南東から)



3. 283 礫集中 Bライン下層 断面 (南から)



4. 283 礫集中 Bライン下層中央 断面 (南から)



1. 283 裸集中 Dライン上層 断面 (南東から)



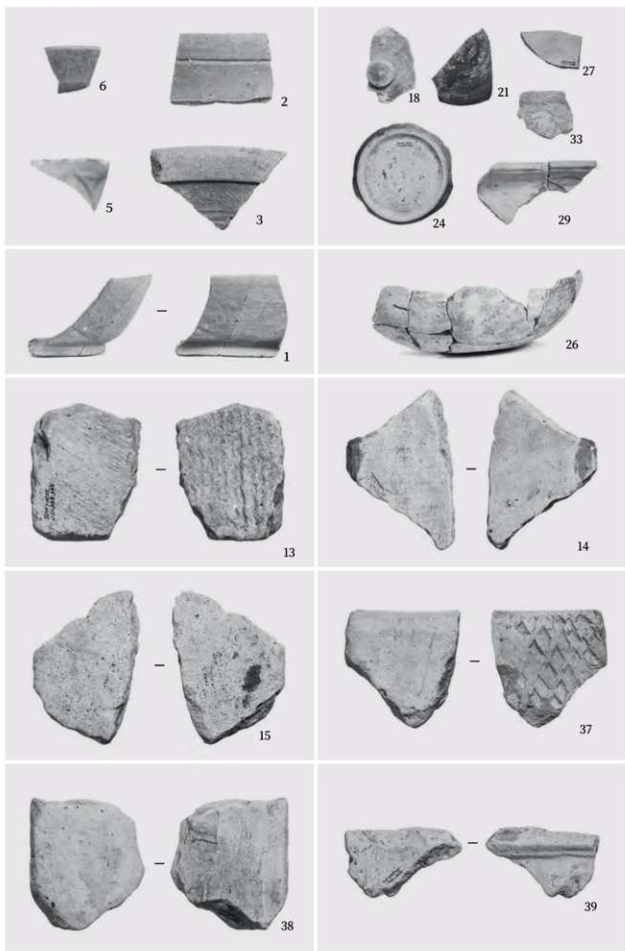
4. 283 裸集中 Dライン下層 断面 (南から)

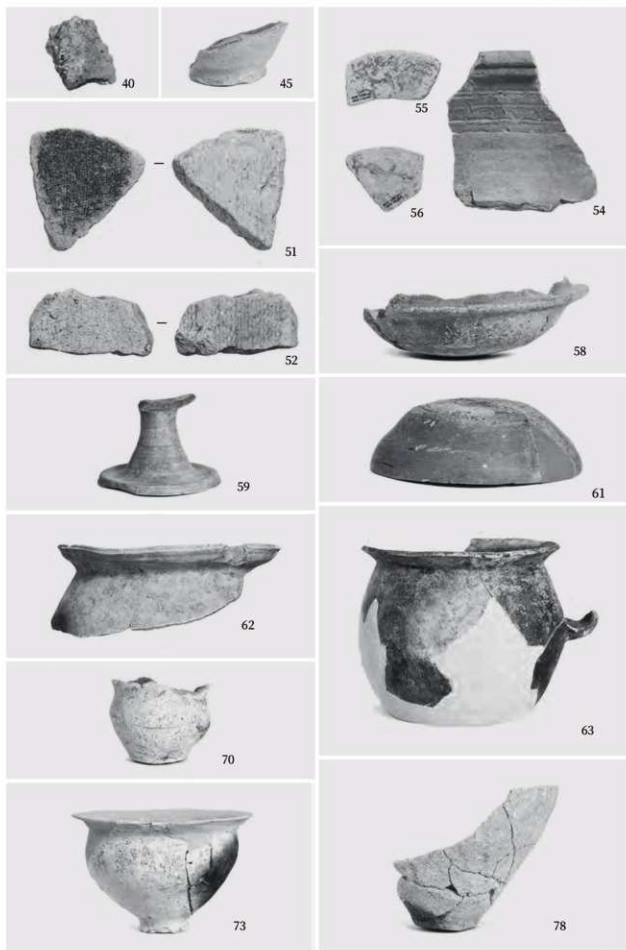


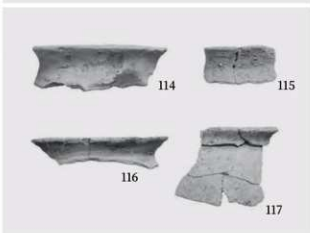
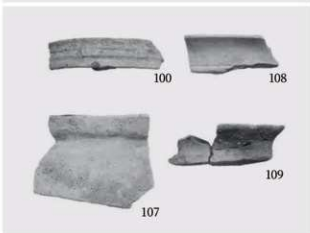
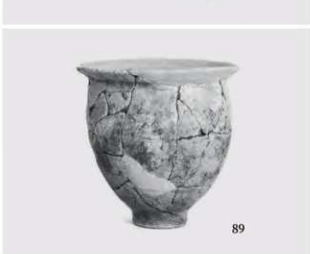
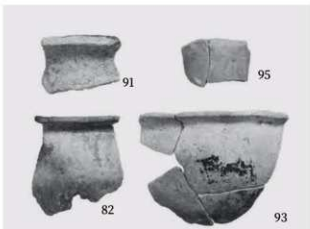
3. 283 裸集中 Dライン下層西半 断面 (南から)

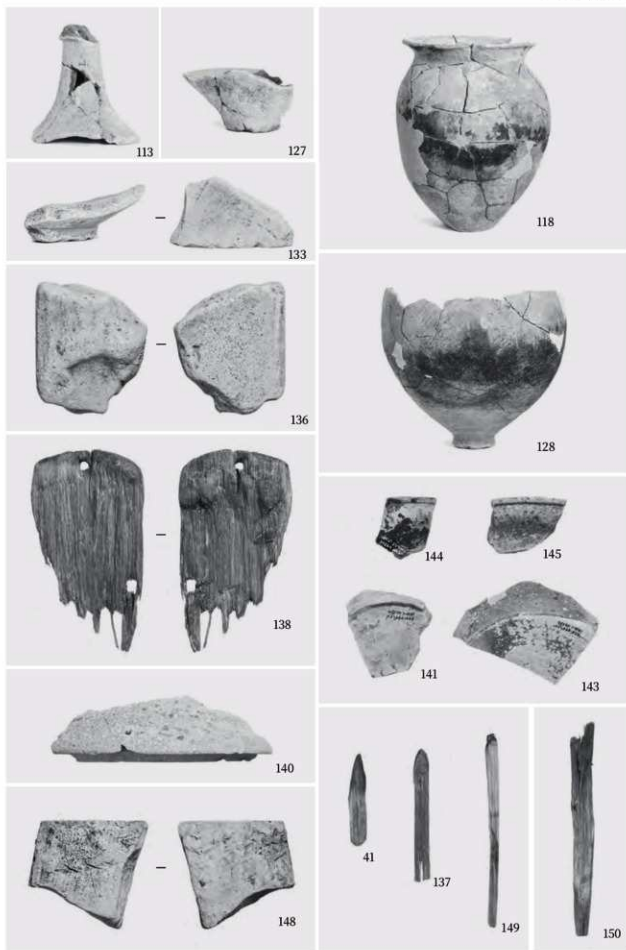


4. 283 裸集中 Dライン周辺最下部 検出状況 (南から)









報告書抄録

ふりがな	おおだいせき・おおだはいじあといち						
書名	太田遺跡・太田廃寺跡 1						
シリーズ名	茨木市文化財資料集						
シリーズ番号	第 85 集						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第 328 集						
編著者名	坂田典彦、福佐美智子（編）						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL.072 - 299 - 8791						
発行機関	茨木市教育委員会						
所在地	〒 567 - 8505 大阪府茨木市駅前 3 丁目 8 番 13 号 TEL.072 - 620 - 1686						
発行年月日	令和 6 年（2024 年）3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
おおだいせき 太田遺跡 おおだはいじあと 太田廃寺跡	おおさかふいぼろまし 大阪府茨木市 おおだとうしほちようちない 太田東芝町地内	27211	—	北緯 34° 50' 40" 東経 135° 34' 41"	令和 3 年 7 月 12 日 ～ 令和 4 年 3 月 4 日	6,475 m ²	学校法人追手門 学院大学校舎建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
太田遺跡 太田廃寺跡	集落	弥生時代～ 古代	掘立柱建物、土坑、溝、 礎集中		弥生土器、土師器、須恵 器、黒色土器、瓦器、瓦、 木製品	古代の礎集中を確認	
要 約	弥生時代後期中葉以降、古墳時代初頭にかけての時期が最も遺構・遺物が多く、段丘崖近くまで遺構が広がっていたことを確認した。集落を区画すると考えられる溝や 100 基余りの土坑・ピット群を検出した。古代は長さ 26 m、最大幅 8 m の帯状に広がる礎集中を検出した。これは既往調査で検出されている石敷遺構に連なり、本調査と合わせると長さ約 37 m にも広がる事が明らかになった。						

茨木市文化財資料集 第85集

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第328集

太田遺跡・太田廃寺跡1

発行年月日 / 令和6年(2024年)3月31日

編集 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

発行 / 茨木市教育委員会
大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

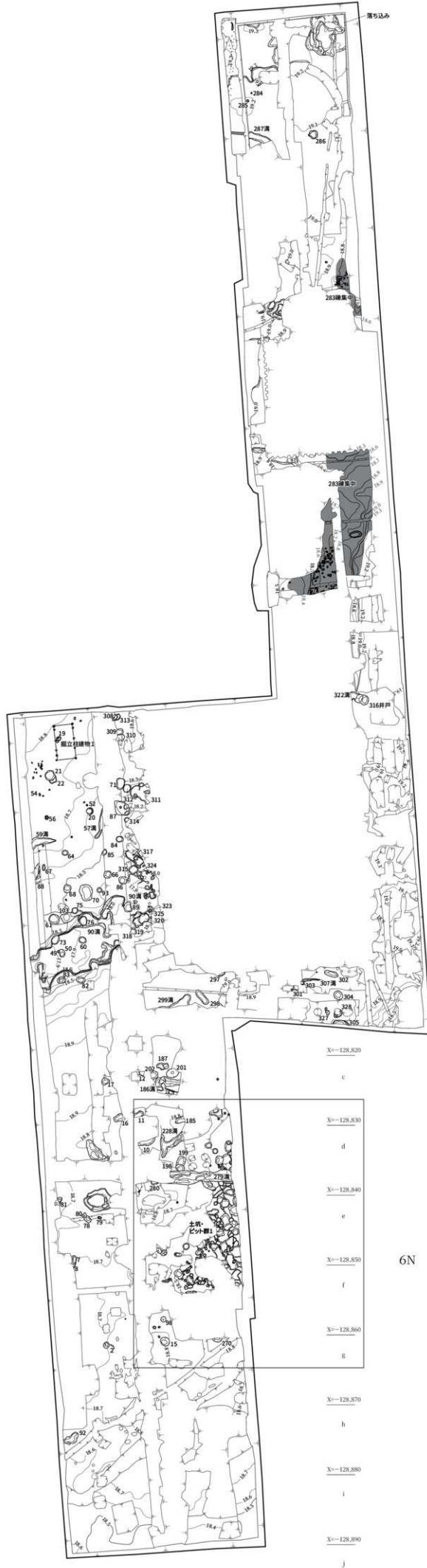
印刷・製本 / 丸山印刷株式会社
兵庫県高砂市神爪1丁目11-33



Y=38,620
2
Y=38,610
1
Y=38,600
10
Y=38,590
9
Y=38,580
8
Y=38,570
7
Y=38,560

7M

7N

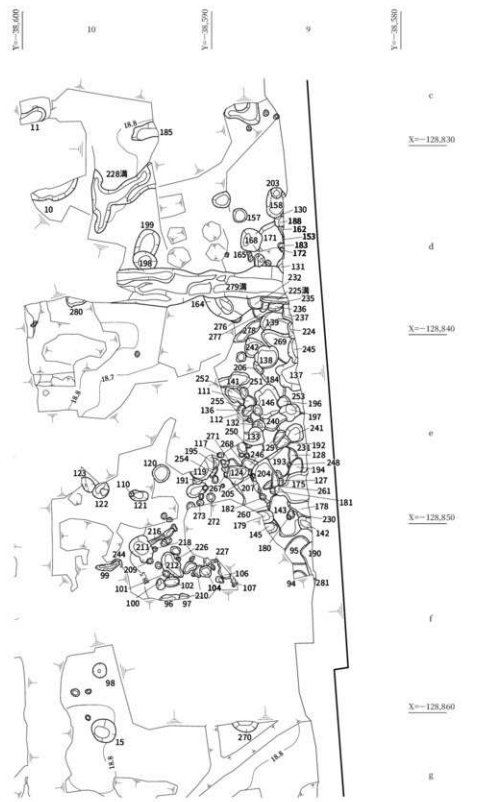


g
X=128,670
h
X=128,680
i
X=128,690
j
X=128,700
a
X=128,710
b
X=128,720
c
X=128,730
d
X=128,740
e
X=128,750
f
X=128,760
g
X=128,770
h
X=128,780
i
X=128,790
j
X=128,800
a
X=128,810
b

6L

6M

6N



c
X=128,830
d
X=128,840
e
X=128,850
f
X=128,860
g

0 (1:400) 20m

0 (1:200) 10m





Y=38,300

Y=38,500

Y=38,700

Y=38,900

X=128,710

X=128,720

X=128,730

X=128,740

X=128,750

